岩波文庫
32-066-1

インド古典説話集

カター・サリット・サーガラ

(一)

岩本 裕訳



岩波書店

はしがき

わが國には古くから、佛教を媒介にして、いくつかのインドの説話が傳えられた。そして、わが物語文學の發達に大きな役割を演じた。インドの説話は、また、中國の説話文學に大きな影響を及ぼしたといわれる。古くからインドの文化を直接に受容した東南アジアでは、イスラム教に教化された今日でも、なお民衆の娯しむ説話は凡てインドの説話にイスラム教の衣を着せたものである。このように、インドの説話はアジアの東にある國々に流傳して、それぞれの文學に寄與したのであったが、また西に流れてアラビアからヨーロッパに傳わって、ヨーロッパ人の情緒を養った。九五六年に死んだアラビアの作家マスーディ Masūdi が、「シンドバードの書」Kitāb el Sindbād はインドに由來する、と述べているが、この書は本質的にはペルシア文學の「シンディバード・ナーメ」Sindibād-nāmeh シリア文學の「シンドバン」Sindban ヘブライ文學の「サンダバル」Sandabar アラビアの「千一夜物語」の多くの寫本に見られる「七人のヴェジール（大臣）の物語」、ギリシア語で傳わる「シュンティパス」Syntipas 更にヨーロッパの諸國で「七賢人の物語」Historia septem sapientium 或は「ドロパトス」Dolopathos の名で知られている物語集と同一である。また、「千一夜物語」に含まれて、われわれになじみの深い「シンドバッドの航海」のいくつかのモティーフはインドの古典説話文學に見られる。「千一夜物語」

に含まれる數多くの物語がインドに起源を有することは疑いえない事實であり、しかもこの偉大な物語集の枠物語のモティーフもインドに起源を有する。そして、この文學の形式はヨーロッパに傳えられて、ボッカチオ Giovanni Boccaccio (1313—1375) の「デカメロン」Il Decameron ナヴァルの女王 マルグリット Marguerite (1492—1549) の「ヘプタメロン」L'Heptaméron またハウフ Wilhelm Hauff (1802—1827) の「隊商」Die Karawane などに影響を及ぼした。また、インドの寓話集「パンチャ・タントラ」は中世ペルシア語、シリア語、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語と傳譯せられて、ヨーロッパの民衆の間に生き、ラ・フォンテーヌ La Fontaine (1621—1695) はそのいくつかを取上げて自らの「寓話」Fables を豐かにした。また、中世のカトリック教會にもてはやされた聖者傳說「バルラームとヨサファットの物語」は佛陀の傳記の飜案である。かくして、インドの說話はヨーロッパ及びアジアの大部分に流傳して、種々の形で民衆に影響を及ぼし、その文學に貢獻した。この事實を考えるとき、インドの說話文學は世界の文學史に於いてのみならず、文化史の上に於いても重要な意義を持つものというべきである。

しかも、インドの說話文學は、その量に於いても、その歴史に於いても、他の文化民族を遙かに凌駕している。今日、われわれが容易に接しうる作品を擧げてみても

一「マハーバーラタ」及び「ラーマーヤナ」の二大敍事詩に含まれる挿話。

二 佛教徒の「ジャータカ」(本生譚)、アヴァダーナ(譬喩譚)及びジャイナ教徒の物語集。

三 政略或は世間的智識を教える目的の寓話集「パンチャ・タントラ」及びその改刪本。

四 純粹の物語集として「ブリハット・カター」の諸傳本、更には單行の「シュカ・サプタティ」(鸚鵡七十物語)、「ヴェーターラ・パンチャヴィンシャティカー」(憑屍鬼廿五物語)など。

五「ダシャ・クマーラ・チャリタ」(十王子の冒險)などの文藝作品。

などがある。しかも、これらの多くには別行の傳本があり、それらにはまた他の傳本に見られぬ說話が含まれるなど、インドの說話とそのモティーフは枚擧に遑ないというのが事實である。

次に、歴史的に見ても、インド最古の聖典「リグ・ヴェーダ」に含まれる神話・傳說は暫く措くとしても、ヴェーダの釋義書のブラーフマナ文獻に見られる神話・傳說はインド民族最古の說話文學の形態を傳えていて、古淡な雅趣の掬すべきものがある。そして、この時代にはこれらの物語を誦唱した一群の人々のあったことが知られる。また、當時には說話文學としてアーキヤーナ、イティハーサ、プラーナの名が傳えられ、これらが「マハーバーラタ」或は「ラーマーヤナ」に於ける挿話に素材を提供した。西曆紀元前四世紀より更に遙か以前のことである。そして、これらは後世のプラーナ文獻に於ける神話・傳說となって展開し、インド古典文學に重要なモティーフを提供したのである。これらのアーキヤーナやイティハーサが後世の物語文學(カター)に直結するか、或はそれぞれの愛好せられた社會が異なっていたかについては異論があるが、寓話は既に「マハーバーラタ」に見られ、西紀前三世紀に寓話のあったことはバルフートの塔に見られる浮彫から知られる。カターの名を有する最古の作品はグナーディヤの「ブリハット・カタ

ー」であるが、これは現在原典は傳わらない。しかし、西暦二、三世紀の頃に成立したことがいくつかの傍證から知られる。ジャイナ教徒の物語集はかなり後代に屬するが、佛教徒の「ジャータカ」は、古いものは西紀前三世紀に溯り、新らしいものでもその文化像は相當に古い。かくして、インドの説話は西紀前數世紀にはその大體の形式の整っていたことが知られる。かくて、その歴史と量の點に於いても、インドの説話文學は世界文學に冠絶するものである。

インドの説話文學の特徴は、その構想の自由で奔放であるということである。説話に登場する神も、半神も、精靈も、人間も、動物も、自由自在に姿を變え、天空といわず地中といわず自由に濶歩する。これはインド人の世界觀に基づくものであって、凡ゆる形の被造物はその本質に於いて同一であり、それらに本質的な差違があるのでなく、階層の差があるのみであるという考によるものである。しかも、すべての被造物は輪廻轉生をまぬかれず、その經過に於いて或は半神となり或は動物となり、或は天界に生れて天樂を享受するかと思えば、地上に生れて苦惱の生涯を送るのである。それは生前の行爲の善悪によって定められ、從って他人の呪詛は大きく人間の運命に影響する。かかる思想乃至は世界觀に基づいて、説話文學の構想は雄大となり奔放自在となった。今日の讀者の眼には荒唐無稽と思われることも、いささかの躊躇もなく物語られる。しかも、其處には婆羅門の社會的優越、シヴァ神の絶對的君臨など、インド獨自の雰圍氣がある。しかし、なお、其處には人世に對する深い洞察があり、政略とか世才とかを尊重する傾向が見られ、この意味に於いて現代的意義を見ることが出來るのである。由來、インド人は一方に於いて

は出家遁世を奬勵し、瞑想を重んじ苦行を讃美するが、他面に於いては現實を肯定し、現世社會の事象に強い關心を示した。從って、現實の生活に必要な技術なり實際的な知識を教える綱要書が著わされたのである。「パンチャ・タントラ」のごとき寓話集はその目的を説話文學によって達成しようとしたものであり、われわれの「カター・サリット・サーガラ」のごとき純粋の説話文學と雖も、この世界觀から免れるものではない。かくして、インドの説話文學は現實の世界と空想の世界が渾然と一體をなして織り出す華麗な綾織であり、この意味に於いて世界文學に獨特なジャンルをもつものと言いうる。

われわれの「カター・サリット・サーガラ」は、「解題」に於いて述べたように、かなり後代の作品であるが、インドの説話文學として最も完成された作品であり、また文藝作品としてもインド文學史上に傑出する作品である。かかる作品を玆にわが讀書界に提供することが出來るのは譯者としてこの上ない光榮である。ただ、遺憾なのは、種々の事情に制約されて、抜萃譯に終ることである。しかし、十八篇二萬頌に餘る全篇を邦譯することはいささか冗長の嫌いもあり、むしろその萃を拾って、讀者諸賢にインド説話文學の醍醐味を賞玩して頂くのが賢明であると考えられる。更に、この邦譯に關し、原典は全篇詩形を以て書かれているが、本書に於いては平易な口語體を用いた。原文が格調のある韻律を踏んでいる以上、如何に平易とはいえ、また散文に極めて近いとはいえ、口語譯が原典の面影を傳ええないことは言うまでもない。しかし、現在の譯者に與えられている別の課題は、わが讀書界に殆んど知られていないインドの文學作品に、一人

でも多く觸れて頂くということである。従って、この書は讀物として誰にでも親しまれるものでなくてはならぬ。この意味に於いて、譯者は口語體を選んだ。しかも、原文が詩形であるだけに、韻律の關係上、呼びかけの言葉や譯出に際しては不用あるいは冗長と思われる語句が少くない。これらを一々そのまま邦語化するときには、文脈を無益に冗長ならしめる怖れがある。従って、譯出にあたっては、これらを適宜按配し、また省略して、邦文として讀み易いことに努めた。しかし、なお、非議すべきいくつかの點のあろうことは、これ實に譯筆の拙きためであって、讀者の寛恕を乞わねばならないとともに、識者の叱正をまつ所以である。

終りに、本譯書の刊行に關し、數々の高慮に與った高津春繁氏、岩波書店の波木居齊二氏に謹んで謝意を表わさなければならない。

昭和廿八年七月　　　　譯者

目次

ウダヤナ王行狀記

一

カイラーサ山*に於いて頭髪の縺れた神（シヴァ神）から勝れたガナ（シヴァ神の眷屬）のプシュパダンタが聽き、ヴァラルチとなって地上に權化した彼からカーナブーティが聽き、カーナブーティからグナーディヤが聽き、グナーディヤからサータヴァーハナ王が聽いたという、ヴィディヤーダラ族*に傳わる不可思議な物語を聽きたまえ。

　創造主が天國の誇を粉砕するために地上の競爭者として造りたもうたかのようなヴァツァ*という有名な土地があります。カウシャームビー*という大都城がその眞中にあって、繁榮の女神のお氣に入りの住地で、いわば大地の耳飾りでありました。この都に、シャターニーカという、パーンダヴァ王家*の王がありました。彼はジャナメージャヤの子、パリークシットの孫、アビマヌユの曾孫で、祖先はトゥリ・プラ*の敵（シヴァ神）との格闘の際に腕の強さが世に知られたアルジュナでありました。大地はシャターニーカ王の妃で、ヴィシュヌマティーがこの王の皇后でありました。ひとりの妃は寶玉を生み出しましたが、他のひとりは皇子を生みませんでした。あるとき、王が狩獵に夢中になってさまようていましたとき、森林でシャーンディリヤ仙と知己になりました。この勝れた聖仙は王が王子を欲しがっていることを知り、カウシャームビーに赴いて、呪頌で清

めた供物を皇后に授けました。やがて、サハスラーニーカという王子が生れ、あたかも徳が謙遜によって光を增すように、父王はこの王子によって一段と光輝を加えたのでありました。時經て、王子が長じますと、シャターニーカ王は王子を太子として國政を委ね、自らは在位のままで逸樂をこととしました。すると、神々とアスラ族*との間に戰が起り、天帝インドラはこの王に援軍をもとめるために使者マータリを遣わしました。王は王子と王國を首相ユガンダラと將軍スプラティーカの手に委ねて、アスラ族と戰って彼等を滅ぼそうと、マータリとともにインドラ神の許に赴きました。王はインドラ神の面前でヤマダンシュトラなどの多くのアスラを殺しましたが、遂にその戰で戰死しました。王の屍をマータリが持ち歸りますと、皇后ヴィシュヌマティーは王に殉死しましたので、王位は王子サハスラーニーカに傳えられました。不思議なことに、彼が父祖傳來の獅子座に登りますと、彼の版圖の至るところで諸王の頭は重さのために自然と下ったということです。

　そこで、インドラ神はマータリを遣わして親友の子サハスラーニーカを敵に對する勝利の祝宴に招待して、天國に連れてこさせました。天國に於いて神々が愛人とともにナンダナ園*で遊び戲むれているのを見まして、サハスラーニーカは自分に相應わしい妻が欲しくなり、少し悲しくなりました。すると、彼の心の中を知って、インドラ神が彼に

「王よ、失望するではない。そなたの望は遂げさせてあげよう。何故なれば、そなたに相應わしい妻として運命づけられた女子が地上に既に生れているからだ。余が今そなたに話す一部始終

をよく聴くがよい。

嘗て余が梵天に會うためにその宮廷に赴いたことがある。そのとき、ヴィドゥーマというヴァス(インドラ神の眷屬)が余に隨行した。われわれが其處にいたとき、アラムブシャーというアプサラス(天女)が梵天に會いに來た。すると、風のために彼女の衣服の裾が亂れた。彼女を見て、かのヴァスは戀の虜となった。彼女もまた忽ちに彼の姿に見惚れてしまった。それを見て、蓮華生(梵天)は余の顔を見つめたので余はその心中を覺り、怒にまかせて彼等二人を呪詛して『汝等恥知らずめ、汝等は人間界に生れて夫婦となれ。』と、言った。かのヴァスがシァターニーカ王の子となり、月種族*の裝飾たるそなたサハスラーニーカ王として生れたのである。そして、かのアプサラスはアヨーディヤー*のクリタヴァルマン王の王女ムリガーヴァティーとして生れた。彼女がそなたの妻となるであろう。」

と、語りました。インドラ神のこの言葉を聴きますと、その言葉はあたかも風のようにサハスラーニーカ王の心の中に戀の焔をあおり、その焔は油を注がれたように忽ちに燃え上りました。そして、王はインドラ神から厚く欵待せられた後、マータリに送られて一緒にインドラ神の車に乘って自分の都城にむけて出發しました。

その途中、ティロッタマーという天女が王を見染め、王に

「王さま、あなたにお話し申上げたいことがございます。暫くお待ち下さいませ。」

と、話しかけました。王はムリガーヴァティーのことばかり思っていましたので、その言葉が耳

に這入りませんでした。すると、ティロッタマーは羞かしめられたと思って怒り、

「王よ、あなたがわたしの言葉も耳に這入らないほどに心を奪われている女と、あなたは十四年のあいだ別れて暮すがよい。」

と、王を呪詛しました。マータリはその言葉を聞きましたが、愛しい人に心を奪われていました王にはそれが聞こえませんでした。王は車に乘ってカウシャームビーに還りましたが、心はアヨーディヤーに行っていました。そして、王は戀しい思いでインドラ神から聽いたムリガーヴァティーのことをユガンダラを始めとして大臣たちに話しましたが、待つことが出來なくなって彼女の父クリタヴァルマン王に王女を懇請するために、アヨーディヤーに使者を派遣しました。クリタヴァルマン王は使者から使命の趣を聽きますと、喜んでそのことを皇后カラーヴァティーに語りました。すると、皇后も

「王さま、ムリガーヴァティーはいずれにもせよサハスラーニーカ王に嫁がさねばなりません。いつか、夢の中で、ひとりの婆羅門がわたしにそのことを話したのを覺えています。」

と、話しました。そこで、大いに喜んだ王は使者にムリガーヴァティーが舞踊や歌などに巧みなことや並ぶ者もなく美しいことを見せました。そして、クリタヴァルマン王は、優雅な技藝の權化のように並ぶ者なく、また月の化身のように輝かしい王女を、かのサハスラーニーカ王に與えました。サハスラーニーカ王とムリガーヴァティー姫との結婚は、お互いの美徳が互いに他を補い合って、あたかも學識と智慧の結合のようでありました。

さて、その後間もなく、サハスラーニーカ王の大臣たちに息子が生れました。宰相ユガンダラにはヤウガンダラーヤナという息子が生れ、将軍スプラティーカにはルマンヴァットという息子が生れました。また、王のお伽役にはヴァサンタカという子が生れました。こうして、日を経て、ムリガーヴァティー妃の顔は青白くなり、サハスラーニーカ王の種を宿しました。王妃は自分を飽かず眺めて暮す夫に、妊娠中の異常嗜好から血の満ちた桶の中で浴みしたい、と懇願しました。王妃の望を満させるために、有徳な王は（生類を殺してその血をとるに忍びず）臙脂などの赤色の液を桶に満しましたので、あたかも血を満したかのように見えました。王妃がその中で浴していますと、臙脂などで眞赤になっている王妃を生肉と思って、ガルダ鳥が突然に舞い下りて王妃を攫ってしまいました。鳥に何處とも知れず攫われていった王妃の後を追うかのように、サハスラーニーカ王の自制心も何處かに飛び去って、王の心は千々に亂れました。王の心は愛妃に惹きつけられていましただけに、まこと王の心も鳥のために運びさられましたので、王はそのために意識を失って地上に倒れてしまいました。王がやがて意識を回復しますと、神通力でそれを知りましたマータリは直ちに天空を驅って王のところに天下ってきました。マータリは王を慰めて、ティロッタマーの呪詛とその終る時期について嘗て耳にした通りに物語った後に、去ってゆきました。王は悲しみにさいなまれて

「嗚呼、愛しい妃よ、あの性悪なティロッタマーは望を遂げたのだ。」

などと、繰り言を繰返しました。王は呪詛について一部始終を知りましたし、また大臣たちから

諫められましたので、愛妃との再會を唯一の望にして辛うじて生命を永らえました。

さて、王妃ムリガーヴァティーを連れ去った鳥王は彼女が生きているのを知って東方の山に捨てましたが、これは運命のしからしめるところでありました。王妃を捨てて鳥が飛び去りますと、彼女は悲しみと恐怖におののきながら、自分が誰も頼りにする人もなく人跡未到の山の傾斜にのこされていることを知りました。森の中で唯ひとり一枚の着物を身にまとうただけで泣いていますと、大蛇が出てきて彼女を呑もうとしました。すると、天上の丈夫が出現して蛇を殺し、未來の幸福を運命づけられているムリガーヴァティーを救ったのでしたが、その丈夫は姿を現わした途端に姿を消してしまいました。彼女は死を望んで野象の前に身を投げ出しましたが、象は彼女を憐れむかのように彼女の生命を奪いませんでした。また、野獣の棲む地に身を横たえていましたけれども、野獣は不思議にも彼女を害いませんでした。いや、それは少しも不思議ではありません。シヴァ神の望にして達せられないことがありましょうか。

胎兒の重さに動作の鈍くなっていました若いムリガーヴァティーは斷崖から身を投じようとしましたが、夫のことが思い出されて、大聲をあげて泣きました。その泣聲を聞いて、その森に木の根や實を採りにきていました聖仙の息子が、悲しみの權化のように泣き悲しんでいる彼女に近づいてきました。彼はムリガーヴァティーに一部始終をたずね、色々と彼女を慰めました。そして、憐愍の優しい心根の彼は王妃をジャマダグニ仙の庵に連れて行きました。彼女は其處で慰めの權化のような聖仙に會いましたが、この聖仙の威光は東方の山を照らして、あたかも昇天の太

陽がその上にかかっているかのようでありました。ムリガーヴァティーが聖仙の足許にひれ伏しますと、救を求める人に憐れみ深く、神のごとき眼識をもつ聖仙は、夫との別離を嘆き悲しむ彼女に

「娘よ、そなたは此處で父の家を繼ぐべき息子を生むのだ。そなたの夫との再會は必定じゃ。嘆き悲しむではない。」

と語りました。ジャマダグニ仙からこのように言われますと、貞淑なムリガーヴァティーは愛する夫との再會を唯一つの頼りにして、聖仙の庵にとどまりました。こうして、日數を經て、無垢な彼女は善人との交際が善行を生ずるように、彼女に相應わしい立派な玉の子を生みました。すると、そのとき天から

「ウダヤナという名聲高き吉祥王が生れた。彼の子は一切のヴィディヤーダラ族の君主となるであろう。」

という聲が聞こえてきました。この聲は永く忘れていました喜びをムリガーヴァティーの心に生じさせました。ウダヤナ少年は善良な性質を遊び友達としているかのように、心身ともに勝れて、この苦行林で育ってゆきました。そして、この勇敢な少年はジャマダグニ仙から王族に相應わしい凡ての聖禮を授けられ、また學問及び射術の教授を受けました。彼の母ムリガーヴァティーは愛情からサハスラーニーカの名を刻んだ腕輪を自分の腕からはずして、この子の腕にはめさせました。

あるとき、ウダヤナが鹿を逐うて歩き廻っていましたとき、森の中でシャヴァラ族*の一人の男にしっかりと捕えられた蛇を見ました。彼はこの美しい蛇を憐れんで、

「わたしを喜ばすためにこの蛇を放してやってお與れ。」

と、シャヴァラに言いました。すると、そのシャヴァラが答えました。

「旦那さま、これはわたくしの生計のもとなのでございます。わたくしは貧乏で、いつも蛇を踊らせて生計をたてております。以前に持っていました蛇が死にましたので、この大森林の中を探し廻って漸く見つけ、呪文の力で捕えましたのでございます。」

と言うのを聽きまして、寛大なウダヤナは母から貰った腕輪をシャヴァラに與え、蛇を放たせました。腕輪を受取ってシャヴァラが立ち去りますと、蛇は彼の前に進んで恭しく禮をして、

「わたしはヴァスネーミと申しまして、蛇王ヴァースキの長兄であります。あなたに助けて頂いたお禮に、絃の音美しく音階の正しいこの琵琶と、蒟醤と、凋れることのない花環の作り方と、永久に消えない印を額につける技術とを、お受け下さい。」

と、語りました。ウダヤナはそれらを快く受け、蛇と別れてジャマダグニ仙の庵に歸りました。彼の母は彼の行爲を喜んで、眼に甘露のような涙を浮べました。

さて、話かわって、森を歩き廻って、運命の命ずるままにウダヤナから腕環を貰いましたシャヴァラは、王の名を刻んだ腕環を市場で賣ろうとして警吏に捕えられ、王廷に引き立てられました。サハスラーニーカ王は悲しみながら

「お前はこの腕輪を何處で得たのだ。」

と、親ら訊問しました。シャヴァラは自分が東方の山中で蛇を捕えたことから始まって腕輪を手に入れるに至った一部始終を王に物語りました。サハスラーニーカ王はシャヴァラ族から話を聴きましたけれども、愛妃の腕輪を見て、疑惑の鞦韆に乘ったのでした。すると、

「王よ、汝にかけられた呪詛は終った。汝の妃ムリガーヴァティーは息子とともに東方の山中にあるジャマダグニ仙の庵にいる。」

と、天から聲が聞えてきましたので、あたかも雨滴が暑さに喘ぐ孔雀を悦ばすように、その聲は愛妃との別離の焰に苦惱する王を悦ばしました。

そして、思慕のためにいつもより永く感ぜられたその日も暮れて、その翌朝になりますと、サハスラーニーカ王はかのシャヴァラを道案内として、愛妃と一刻も早く再會しようと、軍勢を引きつれて、東方の山のジャマダグニ仙の庵に向けて出發しました。

二

さて、王は長い道程を進んで、その日は或る森の湖水の岸に宿營しました。夜となって、疲れて臥床につきました王は、お伽のために隨行していました講釋師のサンガタカを召して、

「何か余の心を娯しませる物語を話して貰いたい。ムリガーヴァティーの蓮華の顏を見る喜びが待遠しくて、余は落着かないのだ。」

と、申しました。すると、サンガタカは王に語りました。

「陛下、何故にそのような無駄なことに心を惱まされますか。陛下にかけられた呪詛も終って、お妃さまとの御再會も間もないことではございませぬか。人間は度々再會したり別離したり致します。このことについて一つの物語をお話し申上げます。陛下、お聽き下さい。」

〔婆羅門シュリーダッタとムリガーンカヴァティーの物語〕

むかし、マーラヴァ*にヤジュナソーマという一人の婆羅門がいました。この善良な人に二人の息子が生れましたが、二人とも人から愛せられました。その一人はカーラネーミと言い、他はヴィガタバヤと呼ばれました。彼等の父が天國に行きますと、二人とも最早子供ではありませんでしたので、學問を得るためにパータリプトラ*の都に行きました。その地で彼等が學問を成就しますと、先生のデーヴァシャルマンは學問の化身さながらの、自分の二人の娘を彼等に與えました。

さて、カーラネーミは他の家長たちが裕福なのを見て嫉妬を起し、誓盟して、燒供を捧げてシュリー(吉祥と幸福の女神)を祀りました。女神は滿足せられて、肉身を現じて彼に告げられました。

「汝は多くの財産と大地を支配する息子とを得るであろう。しかし、結局汝は盜人のごとくに

殺されるであろう。汝が怒にまかせて燒供を捧げたからである。」
と宣示せられますと、ラクシュミー(シュリー女神の別名)は姿を消しました。カーラネーミはその後次第に非常に裕福となりましたが、間もなく息子も生れました。この父は望が達せられましたので、シュリーの恩寵によって授けられた(ダッタ)息子とて、この子にシュリーダッタという名をつけました。シュリーダッタは次第に成長しましたが、婆羅門であるにも拘わらず、武器を持たせても、また鬪技に於いても、この世に並ぶ者がなくなりました。

さて、カーラネーミの弟のヴィガタバヤは、妻が蛇に嚙まれて死んだのを悲しんで、靈場めぐりを望み、他國に行きました。

シュリーダッタは德を知るヴァッラハ・シャクティ王によって王子ヴィクラマ・シャクティの友に選ばれました。こうして、シュリーダッタは、あたかもビーマが若いとき兇暴なドゥルヨーダナと一緒に暮しましたように、* この高慢な王子と一緒に暮すことになりました。すると、アヴァンティ*生れのバーフシャーリンとヴァジラムシュティという二人の刹帝利がこの婆羅門の友人になりました。また、南方生れの大臣の息子たちも、鬪技でシュリーダッタに負けたのでしたが、他人の美點をよく知る人々でありましたので、自ら勸んで彼の友人となり、彼の許に寄り集りました。また、マハーハラ、ヴヤーグラバタ、ウペーンドラバラなどいう人々、更にはニシュトゥラカという男も彼の友人になりました。

幾年か經ちました或るとき、シュリーダッタは王子のお伴をして、ガンジス河の岸で遊ぶため

に、友人たちを連れて出かけました。そのとき、王子の召使たちは王子を王さまにしましたが、シュリーダッタもそのとき友人たちから王さまにされました。このことが王子を怒らせ、傲慢な王子はこの婆羅門の英雄に鬪技を挑みました。しかし、王子はシュリーダッタのために打負かされ、恥かしめを受けましたので、この昇天の勢の男を殺そうと心中深く決心しました。王子の意中を知りましたシュリーダッタは、驚き怖れて、友人たちと一緒に王子の側から去りました。一行が歩いていますと、海に泳ぐ吉祥の女神さながらに、一人の女がガンジス河の眞中で流れに曳きこまれているのを見ました。そこで、シュリーダッタはバーフシャーリン等六人の友人を岸に殘して、その女を救おうとして河にとびこみました。彼は女の髪を捉えたのでしたが、その女は水中深く沈んでゆきましたので、彼も女の後を追うて水中深く潜ってゆきました。潜ってゆきますと、シュリーダッタは突然にシヴァ神の壯麗な神殿を見ました。其處には水もなければ、女もいませんでした。その素晴らしい光景を眺めますと、シュリーダッタは雄牛を紋章とせられる神(シヴァ神)を恭しく禮拜し、疲れていましたので美しい庭園の中でその夜を過しました。

その翌朝、女としての凡ゆる美點を具え、輝くはかりの美しさの化身のような彼女が、シヴァ神に拜禮するために、やって來るのを見ました。月に似た顏容の彼女は、シヴァ神を禮拜しますと、自分の宮殿に歸ってゆきました。シュリーダッタは早速彼女の後をつけてゆきますと、神の都城にも似た彼女の宮殿が見えました。彼が後をつけて來るのに驚き慌てました彼女は、いくらか彼を侮蔑するかのような態度で、急いで其處に這入ってゆきました。美しい容姿の彼女は、彼

に一言の挨拶もしないで、建物の奥深くの椅子に數千の女に侍ずかれて坐りました。シュリーダッタも其處へ這入っていって、彼女の傍に坐りました。すると突然に、この淑やかな女は泣きはじめ、彼女の流す涙の滴りは彼女の兩乳房の間を流れ落ちました。それを見ますと、シュリーダッタは心の中で彼女が可愛そうになりましたので、

「貴女はどなたですか。また、何が悲しいのですか。美しい方よ。わたしはあなたの悲しみの原因を取りのぞくことが出來ますゆえ、話して下さい。」

と訊ねました。すると、彼女はためらいながら話しました。

「わたしたちはダイティヤ族*の王バリの千人の孫娘です。わたしはその長女で、ヴィデュットプラバーと申します。わたくしたちの祖父はヴィシュヌ神に連行され、長期に亘る監禁に處せられました。また、父もシャウリ（ヴィシュヌ神の別名）と格闘して殺されました。かの神はわたくしたちの父を殺したのち、わたくしたちを都から追い出し、わたくしたちが這入るのを防ぐために、都城の入口を獅子に番をさせました。獅子が其處を占領していますのが、わたくしたちの心を悲しませるのです。かの獅子はヤクシャ*で、クベーラ（財寶の神）の呪詛によって獅子となったものです。彼にかけられた呪詛は、彼が人間に征服せられるときに終る、と、ずっと以前に豫示せられています。わたくしたちが都城に歸る手段を歎願して訊ねましたとき、ヴィシュヌ神はこのように宣示せられました。ですから、わたくしたちの敵であるあの獅子を征服して下さいませ。そうして頂こうと、勇氣ある方よ、わたしはあなたを此處までお誘い申上げたのです。あなたがあの獅子を征服

なさいましたならば、あなたは彼からムリガーンカという劍を受けられ、その威力によってあなたは世界を征服なされて王者となられましょう。」

と、ヴィデュットプラバーから聽きましたシュリーダッタはこの冒險を引受けました。その日も終って、翌朝ダイティヤ族の乙女たちに案内せられて、彼女たちの都に行きました。そして、獅子と格闘し、傲慢な彼を打負かしますと、彼は呪詛から解放されて、人間の姿になりました。彼は喜んで、呪詛を終らして與れましたシュリーダッタに自分の劍を與えてアスラの娘の悲しみを背負うて姿を消しました。シュリーダッタは、妹たちを連れたダイティヤの娘ヴィデュットプラバーとともに、龍神アナンタ*が地下から頭をもたげたような華麗な都城に這入りました。ダイティヤの娘は彼にお禮として毒を消す指環を贈りました。こうして、この若者は其處に留っていましたが、彼女を戀するに至りました。すると、それを察しました彼女は、策略を用いて彼に

「この池で水浴をなさいませ。鰐の危險を防ぐために、この劍を持って水浴をなさいませ。」

と申しました。シュリーダッタがその言葉に同意して池に這入りますと、彼が最初に水に飛びこんだ、あのガンジス河の岸のところに浮び上りました。手に劍と指環を持っているのを見まして、地下界から上ってきましたシュリーダッタは驚きましたが、アスラの娘に瞞されたことに失望しました。そこで、彼は友人たちの後を追うて、自分の家に向って足を進めました。すると、その途中で、友人の一人のニシュトゥラカに出會いました。ニシュトゥラカは、彼に近づいて挨拶をしますと、急いで彼を一隅に連れてゆき、問われるままに、彼の身内の者の消息を語りました。

「あなたがガンジス河に飛びこんだとき、われわれは幾日もあなたを探したのですが見つからず、われわれは悲しさのあまり自分たちの頭を刎ねて死のうとしました。すると、天から『わが子たちよ、早まったことをするな。お前たちの友は生きて歸るであろう。』という聲が聞えてきまして、われわれに思い止まらせました。そこで、われわれがあなたの父上の許に行きかけますと、その途中で一人の男がやってきまして、このように語りました。『今、あなた方は都城にお這入りになってはいけません。ヴァッラバ・シャクティ王が死にましたので、大臣たちは一致してヴィクラマ・シャクティ王子を王位に卽けました。彼が王位に卽きますと、その翌日カーラネーミの家に行き、「お前の倅シュリーダッタは何處だ。」と、憤怒のさまも物凄くたずねました。彼が「存じません。」と、答えますと、怒った王は彼が息子を隱しているのだと邪推し、彼に盜人の汚名を着せて刺し殺してしまいました。彼の妻はそれを見て、心臟が破裂して死にました。殘酷な所行をする人々は惡事に惡事を重ねるものであります。ヴィクラマ・シャクティはなおシュリーダッタを殺そうとして搜索しています。あなた方はシュリーダッタの友人ですから、早く此處を立去りなさい。』と、その人から聽きますと、バーフシャーリンたち五人は悲しみまして、相談の結果ウッジャイニー*の自分の家に歸ってゆきました。そして、わたしを隱れさせて、あなたを待たせたのです。ですから、兎に角われわれはかの地の友人のところへ行きましょう。」

と、ニシュトゥラカから聽きまして、シュリーダッタは兩親の死を深く悼み、劍をしげしげと眺めて、あたかもそれに復讐の望を托するかのようでありました。この勇者は時期を待つことにし、

友人たちに會うためにニシュトゥラカを連れてウッジャイニーの都城にむけて出發しました。

　シュリーダッタが、ガンジス河の流れに飛びこんだときからの一部始終を、友人に話しながら歩いていますと、道傍に泣いている一人の女を見ました。その女が

「妾はマーラヴァのウッジャイニーに行きたいのですが、道に迷ったのです。」

と、言うのを聽きまして、シュリーダッタは可愛そうに思い同行することにしました、彼とニシュトゥラカとは、憐れんで同行した女と一緒に、その夜は、とある寂しい町に宿りました。その夜中に不圖眼を覺したシュリーダッタは、その女がニシュトゥラカを殺して、その肉を貪り食うているのを見ました。そこで、彼は劍ムリガーンカを拔いて立上りました。すると、その女はラークシャシー*の怖ろしい本來の姿となりました。シュリーダッタが女の頭髮を摑んで、この夜間にうろつく奴を殺そうとしますと、その瞬間に彼女は神々しい姿となって、彼に語りました。

「妾を殺さないで下さい。大勇ある方よ、妾を離して下さい。妾はラークシャシーではありません。カウシカ仙の呪詛で、妾はこのようなものになったのです。嘗てかの仙が財寶の神の位を得ようとして苦行をしましたとき、かの神がそれを妨げるために妾を遣わされました。妾の妖艶な姿でもカウシカ仙を誘惑することが出來ませんでしたので、當惑しました妾はカウシカ仙を脅かそうとして怖ろしい姿を現じました。それを見て、かの仙は『惡い女め、お前はラークシャシーとなって人間を殺せ。』と、そのときの妾に相應わしい呪詛をかけられました。そして、あなたが妾の髮を摑まれたときに、妾にかけられた呪詛が終る、と定められました。こうして、妾は

この嫌らしいラークシャシーの境遇となり、この都城の住民を食いつくしました。妾にかけられた呪詛を、今日漸くにしてあなたが終らせて下さったのです。ですから、今、何が贈物を受けて下さい。」

という彼女の言葉を聴きまして、シュリーダッタは恭しく彼女に言いました。

「わたしの友人を生きかえらして下さい。その他に何を望みましょう。」

「そのように致しましょう。」

と、彼女はシュリーダッタに恩寵を授けたのち、姿を消しました。すると、ニシュトゥラカは身體に傷ひとつ負わずに再び生命を得て立ち上りました。悦び且つ驚嘆しました彼は、その翌朝、ニシュトゥラカと一緒にその地を出發し、漸くにしてウッジャイニーに到着しました。彼の安否を氣遣っていました友人たちの心は、彼が現われましたので、あたかも空に漲りはじめた雲が（暑さに喘ぎ水を欲しがる）孔雀を喜ばすように、元氣づいたのでした。シュリーダッタがそれまでに經驗しました一部始終を殘らず物語りますと、バーフシャーリンは歓待の禮式に則って挨拶をし、彼を自分の家に案内しました。こうして、シュリーダッタはバーフシャーリンの兩親に迎えられ、自分の家にいるのと同じように安樂に、友人たちと其處で暮しました。

さて、春の大祭がきまして、或る日シュリーダッタは友人たちと一緒に遊園地で行われる祭の行列を見物に出かけました。そこで、彼は春光の女神の權化のような一人の娘を見かけました。彼女は勢威赫々たるビムバキ王の王女で、ムリガーンカヴァティーという名でした。彼女は、彼

女を見つめて見張った眼の隙間から忍びこんだかのように、忽ちに彼の心に這入りこみました。彼女の情熱的なまなざしも愛のきざしを示して、彼を見つめたまま侍女のように行ったり來たりしました。彼女が樹の繁みに這入りますと、シュリーダッタは彼女が見えなくなりましたので、自分が何處に居るのか判らないほどに放心してしまいました。女の表情に通曉していました友人のバーフシャーリンから

「友よ、君の心はわたしによく判っている。君は自分の情熱を否定してはならない。さあ、來なさい。王女が居る場處へ行こう。」

と言われて、シュリーダッタは同意して、友人と一緒に彼女に近づきました。そのとき、

「王女さまが蛇に噛まれた。」

という叫び聲が起りましたので、シュリーダッタの心は潰れる思いでした。バーフシャーリンは直ぐ王女のお伴の廷臣のところへ行き、

「わたしの友人が毒消しの指環を持っておりますし、また呪文を知っています。」

と言いましたので、廷臣はすぐさまシュリーダッタに近づいて恭しく彼の足に禮拜して、彼を王女の傍に急いで案内しました。彼が指環を王女の指にはめて呪文を唱えますと、王女は再び息を吹きかえしましたので、侍臣たちは悦んでシュリーダッタを賞讃しました。ビムバキ王がそのことを聞いて其處へ來られましたので、シュリーダッタは指環を返して貰わないで友人たちと一緒に、バーフシャーリンの家に歸りました。悦ばれた王はシュリーダッタに黄金などの贈物をしまし

たが、彼はそれらをすべてバーフシャーリンの父に與えてしまいました。シュリーダッタは美しい王女のことのみを考えて思い惱んでいましたので、彼の友人たちはどうしてよいのか判らないほどに困りはてました。すると、バーヴァニカーという、王女の氣に入りの友が指環を返すという口實で、シュリーダッタのところに來まして、

「勝れた御方よ、わたしの友はあなたさまが夫となられて生命を救うて下さるか、さもなくば死を選ぶと決心しています。」

と、彼に言いました。バーヴァニカーがこのように言うのを聽きますと、シュリーダッタとバーフシャーリンとその他の者たちはみなバーヴァニカーと額をあつめて相談をしました。

「われわれは策略を用いて王女を連れ出し、ひそかにこの地を去ってマトゥラー*に行って住むことにしよう。」

と、相談をし、それを實行するために各自の爲すべきことを定めて、バーヴァニカーは歸ってゆきました。

その翌日、バーフシャーリンは三人の友人を連れて、商用と佯ってマトゥラーに向けて出發し、その途中の要所要所に王女を連れ去るための早馬をひそかに用意しました。シュリーダッタは夜になると、娘のある一人の女に酒を飲ませて酔いつぶし、王女の館に連れて行きました。すると、バーヴァニカーは館に燈火をともすという口實で王女の宮殿に火を放ち、ひそかに王女を外に連れ出しました。館の外で待っていましたシュリーダッタはすぐさま王女を迎えて、二人の友人と

バーヴァニカーに附添わせて、朝出發したバーフシャーリンの許に王女を送らせました。そして、酔い潰れた女は娘とともに王女の宮殿で燒死しましたので、世間の人々は王女がバーヴァニカーと一緒に燒け死んだと思いました。その翌朝、シュリーダッタは以前と同じように人々の前に姿を現わしました。そして、第二夜になりますと、シュリーダッタは寶劍ムリガーンカを携えて、先行した愛人の後を追いました。一生懸命に後を追いましたので、シュリーダッタはその夜の中にかなりの距離を進み、翌朝第一刻（午前九時）の頃にはヴィンディヤ山の森に到着しました。其處まで來ますと、彼はまず悪事の豫感がしましたが、果して間もなく友人たちのすべてがバーヴァニカーとともに傷を負うて路上に倒れているのを見ました。この有様を見ましてシュリーダッタは途方に暮れましたが、彼の姿をみとめた彼等が

「今日、騎馬の大軍に襲われて掠奪された。われわれがこのような狀態になると、一人の騎馬の男が怖れおののく王女を馬に乘せて連れ去ってしまった。まだ遠くへ行かないうちに、この方向に早く行きなさい。われわれのところに留っていてはいけない。君にとっては、王女は何物にも代えがたい筈だ。」

と語りました。このように友人たちから促がされて、シュリーダッタは度々友人たちの方をふりかえりながら、大急ぎで王女の後を追いました。かなりの距離を行きますと、騎馬隊を見つけました。その眞中に、一人の若い武士が王女を馬に乘せて連れて行くのをみとめ、彼はゆっくりとその若い武士に近づきました。穩やかな言葉で王女を返すように要求しましたが肯んじませぬの

で、シュリーダッタはその男を馬から蹴落し、岩に叩きつけて粉砕してしまいました。その男を殺しますと、他の騎馬者たちが怒って襲いかかってきましたが、シュリーダッタは馬に跨ったままで大勢の者を殺しましたので、生き残った者たちはこの勇士の勇氣が人間業でないことを見て、怖れて逃走しました。

シュリーダッタは王女ムリガーンカヴァティーと一緒に馬に乗り、友人たちを探しに引返しましたが、少し行くと戦闘に重傷を負うていた馬が動かなくなりましたので、彼と彼の妻は馬から下りました。すると、馬は倒れて、そのまま死んでしまいました。しかも、そのとき、彼の愛妻も恐怖と難儀とに疲れ果てて喉が渇いて堪えられなくなりました。シュリーダッタは彼女をその場にのこして、あちらこちらと遠くまで水を探している間に太陽は沒してしまい、水を探しえたときには道を迷っていました。彼はチャクラヴァーカ鳥*のように妻を戀い焦れてさまよいながら、その夜を森の中で過しました。夜が明けますと、王女をのこしておいた場所は馬の屍で直ぐ判りましたが、其處へ歸ってみますと王女の姿は何處にも見られませんでした。そこで、シュリーダッタは樹の頂に登ってあちらこちらと彼女を探そうと思い、うっかりと劍を地上に置いたまま樹に登りました。

そのとき、一人のシャヴァラ族の酋長がその道を通りかかり、寶劍ムリガーンカが樹の根元にあるのを見まして、それを取り上げました。愛する妻の姿が見えず、歎き悲しんでいましたシュリーダッタは、その男を見て、樹から下りて妻の消息をたずねました。すると、

「あなたは此處からわたしの村に行かれるがよい。あなたの探していられるひとはきっと其處に行っていますよ。わたしが其處へ歸ったとき、この劍をあなたにお返ししましょう。」

と、シャヴァラ族の酋長が彼に勸めましたので、焦っていましたシュリーダッタはその酋長の部下たちと一緒に、その村に行きました。其處に到着しますと、部下の者たちが、

「兎も角、疲れを囘復しなさい。」

と言いましたので、疲れていましたシュリーダッタは酋長の宅に着くや否やぐっすりと寢こんでしまいました。その翌朝、彼が眼を覺ましますと、自分の兩足が鎖で縛られているのを知りましたが、あたかも彼が愛する妻を取り戻そうとしてそれまでに盡した努力がすべて失敗してしまったことを示唆しているかのようでありました。こうして、シュリーダッタは、あたかも運命の成行のように、あるときには彼に喜びを與えながらも、次の瞬間にはそれを粉砕してしまった愛する妻に戀い焦れながら、どうすることも出來ず、其處にいました。

あるとき、モーチャニカーという侍女が來まして、彼に言葉をかけました。

「勝れた方よ、あなたは知らず識らずに、死ぬために、此處に來られたのです。酋長は用件を果すために何處かに行っていますが、歸ってくればあなたをチャンディカー女神（シヴァ神妃パールヴァティーの別名）への生贄にするでしょう。そのために酋長はあなたを瞞してヴィンディヤ山腹の森から此處へ連れてきて、すぐさま鎖で繋いでしまったのです。あなたが此處で現在食物にも着物にも不自由せられないのは、あなたを神さまに犧牲として捧げようとしているからなのです。しかし、あなた

が承知せられますならば、あなたの逃げられる一つの方便があります。と言いますのは、あの酋長にスンダリーという娘があります。彼女があなたを見て、ひどくあなたに執心なのです。わたしの友人である彼女と結婚なさいませ。そうすれば、あなたは身の安全を得られましょう。」
と、モーチャニカーから聽きますと、身體の自由になることを切望していましたシュリーダッタはその言葉に同意し、ひそかにガーンダルヴァ式の結婚*でスンダリーを妻としました。スンダリーは毎夜彼の鎖をはずしました。そして、間もなく、彼女は姙娠しました。スンダリーの母はモーチャニカーの口からすべてを聞き知りまして、娘の婿に對する愛情から自らシュリーダッタのところに行って、申しました。
「伜よ、スンダリーの父親のシュリーチャンダは怖ろしい人ですよ。女婿のそなたとて容赦はしません。だから、早く此處を立去りなさい。でも、スンダリーを忘れてはいけませんよ。」
と、妻の母親は言いまして鎖を解いてくれましたので、シュリーダッタはスンダリーに彼女の父シュリーチャンダが手にいれた劍は自分のものだと告げまして、其處を出發しました。
シュリーダッタはムリガーンカヴァティーへの思慕に驅られ、彼女の足跡を探ねようとしまして、嘗て彼女を探しまわったあの森に再び這入ってゆきました。すると、瑞兆が見られましたので、嘗て彼の馬が死に、また妻が行方不明になった地點へ行きました。そのとき、遠くから彼の方に近づいてくる獵師が見えましたので、その男に會って、鹿のような眼をしたムリガーンカヴァティーの消息をたずねました。すると、獵師が

「あんたはシュリーダッタさんかね。」
と言いましたので、彼は溜息をつきながら
「その不幸な男こそ、わたしなんだ。」
と言いますと、獵師が言いました。
「友よ、では、お話しよう。お聽きなさい。あなたの奥さんが泣きながらあちらこちらとあなたを探していられるのを、わたしが見たのです。おたずねして、一部始終を伺い、お慰めしたのですが、氣の毒になって、この森からわたしの村にお連れしました。しかし、わたしの村で、プリンダ族*の若い男を見て怖ろしくなり、マトゥラー近くのナーガスタラ村にお連れしました。其處に住むヴィシュヴァダッタという老年の婆羅門のお宅に懇にお預けしておきました。わたしはあの方の口からあなたの名を伺い、此處へやって來たのです。ですから、あの方を探しに、早くナーガスタラにお行きなさい。」
と、獵師から聽きますと、シュリーダッタは直ちに出發し、その翌日の夕方にナーガスタラ村に到着しました。ヴィシュヴァダッタの邸に赴き、この老婆羅門に會い、
「獵師がお預けしておいたわたしの妻を何卒お返し下さい。」
と申しました。この言葉を聽きますと、ヴィシュヴァダッタがシュリーダッタに語りました。
「マトゥラーに、わたしの友人で、有徳な人々の敬愛する婆羅門がいます。この人はまたシューラセーナ王の教師で、大臣ですが、この人の手にあなたの奥さんをわたしは預けました。この

村は邊鄙な土地で、あなたの奥さんをお護りすることが出來ないからです。ですから、明日其處に行きなさい。今日は此處で休息しなさい。」

と、ヴィシュヴァダッタから聽きますと、シュリーダッタはその夜を其處で過ごし、翌朝出發しまして、次の日にマトゥラーに到着しました。長途の旅行に汚れていましたし、また疲れていましたので、シュリーダッタは都城の郊外にある堀の清らかな水で水浴をしました。すると、水中から盜人が隱しておいた衣服が出てきましたが、その裾に頸飾りが縫いこんで隱されていました。シュリーダッタはそのために身に災難がふりかかるとも思わず、また愛する妻に會いたい一心からその頸飾りにも氣づかないで、その着物を着てマトゥラーの市街に這入りました。すると、巡警たちがその衣服が盜品であることを認め、頸飾りが出てきましたので、シュリーダッタを盜人として逮捕し連行しました。盜品の衣服を着たまま彼は警察長官の前に連行され、長官はその旨を國王に報告しましたので、國王は彼に死刑を宣告しました。

そのとき、背後で太鼓を鳴らしながら刑場に連行されてゆくシュリーダッタを、ムリガーンカヴァティーが遠くから見ました。彼女は驚き慌てて、彼女が逗留している首席宰相の館に歸り、宰相に

「あそこにわたしの夫が處刑のために連行されています。」

と申しました。大臣は刑吏たちに處刑を止めさせ、國王に奏上してシュリーダッタを死刑から免れさせました。そして、自分の館に連れ歸りました。シュリーダッタが大臣の館に參りまして、

大臣に會いますと、自分の叔父であることが判り、

「これはまた何ということでしょう。むかし、外國に行かれたわたしの叔父上が、今日茲に、運命のしからしめるところ、勢威並ぶ者もない大臣の顯職に昇っていられましょうとは。」

と、大臣の足許にひれ伏しました。大臣もシュリーダッタが兄の子であることを知りまして驚き、彼を抱きしめて再會を悅び、仔細をのこらず訊ねました。そこで、シュリーダッタは叔父に父の殺されたことを始めとして、自分に振りかかった一部始終を物語りました。大臣は涙を流して悅び、ひそかに甥に言いました。

「もう決して心配するではない。伜よ、嘗てわたしは神通力によってヤクシニー*を征服した。彼女はわたしに息子がないにも拘わらず、五千頭の駿馬と七千萬金とを與れた。この財產は殘らずそなたのものだ。」

と言いまして、叔父はシュリーダッタに愛する妻ムリガーンカヴァティーを渡しました。シュリーダッタは財產をえました上に、彼女と結婚しました。こうして、彼は愛するムリガーンカヴァティーと、あたかも夜間に花を開く白蓮が夜に會うたように再び結ばれて、樂しく其處に逗留しました。しかし、彼は幸福の絶頂にあっても、あたかも月の面を曇らす陰影のように、パーフーシャーリンたちに對する心配が彼の心に暗い影を投げかけていました。

ある日、叔父がシュリーダッタにひそかに

「伜よ、シューラセーナ王に娘がある。わたしは王の命令でこの王女を結婚のためにアヴァン

ティ國に連れてゆくことになっている。だから、その口實で王女を連れ出し、彼女をそなたに與えよう。そうすれば、そなたはわたしの財産と王女に附隨する威力とをえて、嘗て吉祥の女神がそなたに約した王國を、そなたは間もなく得るであろう。」

と言いました。シュリーダッタと彼の叔父とはこのように決心し、軍勢や從者たちをともない、王女を連れて出發しました。すると、彼等の一行がヴィンディヤ山の森林地帶に到着するやいなや、不意に盗賊の大集團が矢の雨を降らせて襲撃してきました。盗賊たちはシュリーダッタの軍勢をうち破り、財産をすべて强奪し、傷ついた彼を捕縛して自分たちの村に連行しました。そして、彼等は彼をチャンディカー女神の怖ろしい神殿に生贄にするために、其處へ行きました。彼等の打鳴らす鐃鈸の音とともに、あたかも死の神がシュリーダッタを召喚したかのようでありました。すると、そのとき、嘗て彼の妻であった酋長の娘スンダリーが、彼との間に出來た子を連れて、女神を參詣しに其處に來ていまして、彼を見ました。彼女は非常に悦んで、彼女が彼の側に近づくのをはばんでいる匪賊どもを退かせました。シュリーダッタは彼女と一緒に彼女の館に這入りました。そして、直ちに、彼は、スンダリーの父が男子なくして死に、彼女に讓られていました酋長の位に卽きました。シュリーダッタはこうして嘗ての妻と再び會い、寶劍ムリガーンカを取り戻し、また盗賊にうち負かされた叔父や從者たちを救出しました。シュリーダッタは其の地でシューラセーナ王の王女とも結婚し、其の地を都城として大王の位に卽きました。こうして、彼がビムバキ王とシューラセーナ王の二人の舅に使節を派遣しますと、娘に對する愛情の

深い彼等は悦んで彼を親族と認めましたばかりでなく、全軍を率いて彼のところへ來ました。また、別れたままでいましたバーフシャーリンたちの友人も、そのことを知り、傷も癒え元氣になっていましたので、彼の許に來ました。そこで、この英雄は舅とともに父を殺したヴィクラマ・シャクティ王に軍を進め、かの王を彼の憤怒の焰に投ずる供物にしました。こうして、シュリーダッタは四方の海に圍まれた大地を統治し、別離の悲しみを克服してムリガーンカヴァティーとの樂しい生活を送りました。

「陛下、このように決意の堅い人々は長い別離の慘憺たる海を渡って、幸福な生活を得るのであります。」

と、サンガタカから物語を聽きまして、サハスラーニーカ王は愛妃を戀い焦れながら、旅の一夜を其處で過しました。そして、サハスラーニーカ王は思慕の情に心を奪われ、心をいやたけに逸らせながら、その翌朝愛妃の許に向って出發しました。數日ならずして、王は鹿さえも愛慾の戯れを愼しむというジャマダグニ仙の寂靜な庵に到着しました。そして、其處に、苦行の權化のように神聖な風貌をしたジャマダグニ仙が懇ろに出迎えているのを見まして、仙に恭しく禮をしました。かの仙は王にあたかも喜びを湛えた寂靜のような王妃ムリガーヴァティーを、息子とともに、久しぶりに渡しました。そして、夫と妻とが互いに見つめ合いましたとき、かの呪詛は解け、再會の喜悦の涙の溢れた眼に甘露が降りそそぐかのようでありました。王は始めて見るわが子ウ

ダヤナを抱きしめ、あたかも喜悦に逆立つ彼の頭髪*によって二人の身體が縛り合わされたかのように、離れることが出來ませんでした。こうして、サハスラーニーカ王は王妃ムリガーヴァティーを連れ、ウダヤナを伴って、ジャマダグニ仙に別れを告げ、この靜かな庵から自分の都城に向って出發しました。鹿さえ眼に涙を湛えて苦行林の境まで見送ってきました。愛妃から別離の間の一部始終を聽き、またその間の自分の身の上を語りながら、サハスラーニーカ王は遂にアーチや旌旗に飾られた都城カウシャームビーに到着しました。王が王妃と王子と一緒に都城に這入りますと、都城の人々の睫毛の端をあげた眼は彼等の姿をむさぼるかのようでありました。王子ウダヤナの勝れた資質を見まして、王は直ちに彼に灌頂して皇太子とし、自分の大臣の息子のヴァサンタカとルマンヴァット並びにヤウガンダラーヤナを太子の大臣としました。そのとき、天から

「これらの勝れた大臣の輔弼によって、太子は全世界を征服すべし。」

という神々しい聲が聞え、同時に花の雨が降ってきました。

こうして、サハスラーニーカ王はウダヤナ太子に國政を委ね、自らは妃ムリガーヴァティーと一緒に永い間望んでいました俗世の幸福を享樂しました。そして、王の耳の根元に寂靜の使者たる老齢が到着しますと*、世俗的な享樂の欲望は忽ちにそれを見て、怒って王から遠くに逃げてしまいました。サハスラーニーカ王は世界の繁榮のために臣下の敬愛して止まぬ勝れた王子ウダヤナを王位に卽け、自らは大臣を連れ、愛妃を伴って、人生の最後の大旅行のためにヒマーラヤ山

に赴きました。

三

こうして、ウダヤナは父から委ねられましたヴァッツァ王國を得て、カウシャームビーに都を定め、臣下の者たちを正しく統御しました。しかし、漸くにして、王は國政をヤウガンダラーヤナを始め大臣たちに委ねて、自らは快樂に耽るに至りました。彼は絶えず狩獵を事とし、また嘗て龍王ヴァースキから贈られた琵琶ゴーシャヴァティーを日夜奏でていました。また、この琵琶の絃の美わしい音色に魅せられた野性の兇象を馴らしては連れ歸るのを常としていました。ヴァッツァ王ウダヤナは美女の月の顏容の影を映した酒を飲みましたが、また同時に大臣たちの顏の美しい色艶を飲んでしまったのでした。王は

「わが家柄と容姿にふさわしい妻は何處にも見あたらない。ヴァーサヴァダッターという娘がわが妻たるにふさわしいと人々は言うが、如何にすれば彼女を得ることが出來ようか。」

とばかり考えていました。丁度その頃、ウッジャイニーのチャンダ・マハーセーナ王も考えました。

「わが娘ヴァーサヴァダッターにふさわしい夫はこの世間にはない。ただウダヤナという王がいるが、彼はこれまでわが敵であった。如何にして彼をわが女婿とし、われに隷屬せしめようか。

だが、唯一つの方策がある。彼は森林の中を歩き廻って象を捕えるのに夢中になっており、狩獵の悪徳に耽る王者だ。この弱點を利用し、策略を用いて彼を捕縛して連れてこよう。彼は音樂に長じているから、娘を彼の弟子にしよう。そうすれば、彼の眼が娘に魅了せられることは必定だ。このようにして、彼はわが婿となり、隷屬するようになることは確かだ。他に方策はない。この手段によれば、彼をわが意に從わせられないということはない。」

と考えて、この計畫の成功のためにチャンディカー女神の神殿に赴き、女神を禮拝し、讃嘆して、祈願しました。すると、

「王よ、そなたの希望は間もなく遂げられるであろう。」

という、姿の見えない聲が聞えてきました。チャンダ・マハーセーナ王は滿足して歸館し、大臣ブッダダッタにそのことについて相談をしました。

「かのヴァッツァ國王ウダヤナは矜持高く、無慾恬淡、臣下の親愛厚く、威光は大である。從って、商議などの尋常の手段では成功は望みがたい。ともあれ、まず談判を試みてみようではないか。」

と相談しまして、使節に

「ヴァッツァ國に赴いて、國王に『わが娘ヴァーサヴァダッターは貴方に音樂を習いたいと希望しています。もしわれわれに親愛の情を有せられるならば、此の地にお出で下さって娘に音樂を教えて頂きたい。』という當方の口上を傳えよ。」

と命じ、使節をヴァッツァ國に派遣しました。使節はカウシャームビーに赴いて、命ぜられた通りにヴァッツァ王に傳えました。ヴァッツァ王は使節の口からこの奇妙な口上を聽きますと、大臣ヤウガンダラーヤナと祕かに相談をしました。

「何故にかの王は余にかかる失敬なことを申出たのであろうか。かかる申出をした惡辣な輩の目的は果して何であろうか。」

と、ヴァッツァ王から聽きまして、そのとき君主のためを思う忠誠心の厚い大宰相ヤウガンダラーヤナは王に語りました。

「陛下の不行跡の噂は世間に蔓草のように擴がっています。大王よ、これはその噂の澁く苦い果實なのです。かのチャンダ・マハーセーナは陛下が情熱の虜になり易い男と考えて、寶玉のごとき娘で陛下を虜にし、自分の意志に從わせようと欲しているのです。ですから、何卒道樂を止めて頂きたいと思います。逸樂に耽る王者は、象が穴に陷入って捕えられるように、容易に敵に捕えられるものです。」

と、大臣からこのように言われますと、決斷力あるヴァッツァ王は答禮の使節を派遣して、

「もし貴方の姫君が余の弟子たることを欲せられるならば、姫君こそこの地に來られたい。」

と申し送りました。このような返答を申し送りましたのち、ヴァッツァ王は大臣たちに

「余はチャンダ・マハーセーナ王に對して軍を進め、かの王を捕縛してここに連れてこよう。」

と語りました。この言葉を聽きまして、首相ヤウガンダラーヤナが王に言いました。

「陛下それは不可能であり、またあなたに相應わしくないことです。と申しますのは、かの王は威勢ある君主で、陛下の征服しうる王ではありません。如何なる故でそうであるか、その由緒をお聽き下さい。お話し申し上げましょう。」

〔チャンダ・マハーセーナ王行狀記〕

この世界に、ウッジャイニーという都城があります。大地の裝飾ともいうべき都で、その白堊の殿堂の輪奐の美は神の都アマラーヴァティーを笑い嘲るかのようであります。萬物の主たるハラ(シヴァ神の別名)がカイラーサ山に住む樂しみを思いとどまられたときには、マハーカーラ*の姿で親しくこの都城に住みたもうのであります。むかし、この都に、王者の中で最も勝れたマヘーンドラヴァルマンという王があり、この王にジャヤセーナという、父王に似た王子がありました。このジャヤセーナ王に、膂力に於いて並ぶ者がない王子マハーセーナが生れましたが、このマハーセーナ王はまこと諸王の中の象でありました。

さて、この王は自分の王國を守護しながら考えました。

「余に相應わしい寶劍がなく、また余の家柄に相應わしい良家の生れの妻もない。」

と考えました王は、チャンディカー女神(シヴァ神妃パールヴァティーの別名)の神殿に赴きまして、永い間斷食して女神を祀りました。更に、王は自分の肉を切りとって聖火に投じ、女神に供物として捧げました。

すると、滿足せられた女神が姿を現わされ、

「妾は滿足じゃ。吾子よ、この勝れたる寶劍を受取るがよい。その神威力により、そなたは敵を征服すべし。また、アスラのアンガーラカの娘にして三界隨一の美女なるスンダリーなる娘を、間もなく妻とすべし。そなたは此處にて劇しき(チャンダ)苦行を行いたれば、爾後チャンダ・マハーセーナと稱すべし。」

と、宣示せられました。女神は王に寶劍を授けて、姿を消しました。王は所期の希望を達成するをえて、大きな歡喜をえました。陛下、かの王は現在この寶劍とナダーギリという巨象とを所有しています。この二つは、かの王にとっては、インドラ神が神器ヴァジラと神象アイラーヴァナとを所持していられるのと同じであります。この二つの神威力に滿悦したチャンダ・マハーセーナ王が、あるとき大森林に狩獵に出かけました。そして、一疋の巨大な、怖ろしい野猪を見つけました。その野猪はあたかも夜の闇が突然に日中に塊となったかのようでありました。王の矢は鋭かったのでしたけれども、野猪は傷も受けずに王の車を破壞して、洞穴の中に逃げこみました。王は怒って車を捨てて野猪の後を追い、弓だけを携えて、その洞穴の中に這入ってゆきました。かなりの距離を進みますと、素晴らしく勝れた巨大な都城が見られました。王は驚き怪しみながら、その都城の中にある湖水の岸に腰を下ろしました。すると、數百人の侍女を連れた一人の娘が散歩しているのをみとめました。彼女は、猛き者をもひしぐ戀の神の箭のように、愛の甘露を雨霰と降らす眼で、あたかも彼を繰返し浴させるかのように、靜かに彼に近づいてきました。彼

女が

「あなたはどなたですか。また、如何なる譯で、今ここにお這入りになったのですか。」

と訊ねましたので、彼は事の次第をありのままに語りました。それを聽きますと、その娘は情熱的な兩眼から涙をさめざめと流し、また心からは自制心をすっかりなくしてしまいました。

「貴女はどなたですか。何故に泣くのですか。」

と、王がたずねますと、戀の神の命令に從順な彼女は、彼にこのように答えました。

「此處に這入ってきました野猪はアンガーラカというダイティヤ（アスラの別名）でございます。そして、王さま、妾は彼の娘でアンガーラヴァティーと申します。金剛石のように堅い體軀の父は、これら百人の王女を諸王の宮殿から攫ってきて、妾の侍女にしました。そして、この偉大なアスラは呪詛のためにラークシャサとなったのですが、今日は渇と疲勞とで困憊していましたので、あなたに會ってもあなたを見逃したのです。今では彼は野猪の姿を捨てて休息していますが、眼を覺ましましたならば必ずやあなたに危害を加えるでありましょう。そのような譯で、此處ではあなたに幸福は望めませぬゆえ、わたしの生命が悲しみの火に煮られるかのように思われまして、涙の雫がこのように滴り落ちるのです。」

と、アンガーラヴァティーの言葉を聽きますと、王は彼女に言いました。

「わたしに對して貴女に愛情があるならば、わたしの言葉の通りにして下さい。あなたのお父上が眼を覺まされたとき、あなたは父上の前に行ってお泣きなさい。そうなされば、父上は必ず

あなたに何故に悲しいのかと譯を訊ねるでしょう。そのとき、あなたは『もし誰かが父上を殺すようなことがあれば、わたしはどうなるのでしょう。それを思うと、わたしは悲しいのです。』と、言いなさい。あなたがこのようになさりさえすれば、あなたにも、わたしにも、幸福が訪れて參りましょう。」

と、王から言われますと、彼女は

「そのようにしましょう。」

と、彼の言葉に同意しました。不幸な結末を怖れましたアスラ族の乙女は王を匿しました。そして睡っている父の側にゆき、かのダイティヤが眼を覺ましますと、泣きはじめました。

「娘よ、そなたは何故に泣くのか。」

と、彼女に言葉をかけましたので、彼女が

「父上さま、もしも誰かがあなたを殺すようなことがありましたら、わたしはどうなりましょう。」

と、悲しみを裝うて言いますと、彼は笑って言いました。

「娘よ、誰がわたしを殺すことが出來ようか。わたしは全身金剛づくりだからね。ただわたしの左手に急所があるのだが、弓で護られているのだ。」

と、娘を慰めました。王はひそかにこのことを殘らず聽きました。

すると、かのダーナヴァ（アスラの別名）はそう言うと直ぐに立上り、水浴をしましたのち、沈默の行を

守ってハラ神を祀りはじめました。そのとき、王は弓を番えて姿を現わし、ダイティヤに突進して戦を挑みました。沈黙の行を守っていました彼は左手を擧げて、「暫く待て」と、合圖をしました。王は勝れた射手でありましたので、忽ちにダイティヤの急所を弓で射ました。かの偉大なアスラのアンガーラカは急所を射られて、大地に倒れ、息をひきとりながら叫びました。

「喉の渇いたわたしを殺した男がわたしに供物の水を供えないときは、その男の五人の大臣を殺してくれようぞ。」

と言って、かのダイティヤは息絶えました。王はその娘アンガーラヴァティーを連れて、ウッジャイニーに歸還しました。

チャンダ・マハーセーナ王はこのダイティヤの娘と結婚し、二人の息子が生れました。長子をゴーパーラカといい、次子をパーラカと言いました。この二人の王子が生れましたとき、王は彼等のためにインドラ神を祀る大祭を擧行しました。すると、王を嘉したもうたヴァーサヴァ（インドラの別名）は夢の中で

「余の恩寵によって、汝は比類なき娘を得るであろう。」

と、王に告げました。こうして、時経て、王に容姿すぐれた王女が生れました。この王女は創造主がつくられた月輪の第二の新らしい姿のようでありました。すると、そのとき、

「この王女の子は、愛の神の權化であり、ヴィディヤーダラ族の王者たるべし。」

という聲が天から聞えてきました。王は

「姫は余に満足せられたヴァーサヴァから授けられたのだ。」

とて、王女にヴァーサヴァダッター（「ヴァーサヴァから授けられた女」の意）という名をつけました。そして、彼女はあたかも大海が攪拌せられない以前に大海の洞窟に坐したもうたカマラー（繁榮の女神）のように、未だ嫁がずに父の家に留っています。

「このように威力あるチャンダ・マハーセーナ王は、陛下、まこと征服することは出來ません。それに、彼の王國は進撃することの困難な土地です。しかも、陛下、かの王はあなたに娘を嫁入りさせたいと常に思っています。しかし、かの王は自尊心たかく、自分の側の勝利を願っています。でも、あなたがヴァーサヴァダッターと結婚せられることは間違いない、と、わたしは確信しています。」

と、大臣ヤウガンダラーヤナから聽きますと、ヴァツァ王は忽ちにヴァーサヴァダッターに心を奪われてしまいました。

四

さて、話かわって、ヴァツァ王の答禮の使節はチャンダ・マハーセーナ王の許に赴き、ヴァツァ王の返答を傳えましたので、チャンダ・マハーセーナ王はその言葉を聽いて、熟考しました。

「ともあれ、自尊心の高いヴァツァ王が此處に來ないことは必定である。」と言って、娘をかの地へ遣わすことは出來ない。かかることは無思慮である。從って、策略を用いて彼を捕えて、此處へ連れてこよう。」
と考え、大臣たちと相談して、自らの所有する象ナダーギリに似た巨大な人工の象を造らせました。そして、その中に勇士を隱して、王はこの人工の象をヴィンディヤ山の森林の中に置きました。*すると、象の捕獲の娛しみに耽るヴァツァ王の派遣していた密偵たちがそれを遠くから見て、急遽ヴァツァ王の許に歸って
「王さま、ヴィンディヤ山の森林を一頭だけで歩き廻っている象をみつけました。この象と同じ大きさのものはこの地上では何處にも見られません。その軀體は天に達し、ヴィンディヤ山が動くようであります。」
と、報告をしました。密偵の言葉を聽きましたヴァツァ王は悅び、彼等に褒賞として十萬金を與えました。王は
「ナダーギリの好敵手たる、かの巨象を手に入れることが出來るならば、チャンダ・マハーセーナが余に服屬する者となることは確かだ。そうなれば、ヴァーサヴァダッターを喜んで余に與えよう。」
と考えながら、その夜を過しました。そして、その翌朝、象の捕獲に夢中になっていました王は、大臣たちの言葉に耳を籍さず、密偵たちを先導としてヴィンディヤ山の森林に向って出發しました。

王の出發に際して、占星者たちが「王は捕縛せられるけれども、娘を獲る。」という前兆を語りましたが、王はそれにも注意を拂いませんでした。
　ヴァツァ王はヴィンディヤ山の森林に到着しますと、象を愕かすことを怖れて、軍勢を遠くにとどめ、密偵のみを連れ、琵琶ゴーシャヴァティーを手にして、彼自らの道樂のように奧深い大森林に這入っていきました。ヴィンディヤ山の南側の傾斜に本當の象のように見えるかの巨象を、密偵たちから指さされて、王は見ました。王はただひとりで琵琶を彈じ美しい聲で歌をうたって、象を捕獲する方法を考えながら徐々に象に近づいてゆきました。王は音樂に夢中になっていましたし、また夜のとばりがあたりに立ちこめはじめていましたので、彼はこの野象が贋の象であることに氣がつきませんでした。象は歌を樂しむかのように耳をあげて動かし、王の方に近づいたり、王が近づけば後退したりして、王を遠くまで誘い寄せたのでした。そして、突然に、その人工の象から武裝した兵士が飛び出して、ヴァツァ王を取圍みました。王はそれを見て怒り、劍を拔いて、前にいる兵士たちと戰いましたが、背後から忍び寄った他の兵士たちのために捕えられてしまいました。これらの兵士たちは、豫め打合せておいた合圖によって現われた他の者たちと一緒に、ヴァツァ王をチャンダ・マハーセーナ王の前に連行しました。チャンダ・マハーセーナ王は親しく出迎えて、ヴァツァ王とともに都城ウッジャイニーに這入りました。
　都の人々は、新らしく到着したヴァツァ王の顔は屈辱にゆがめられていましたとはいえ、彼の容姿が月輪のように眼を娛しませるのを見まして、彼の德を敬慕し、彼が死刑に處せられるかも

知れないと危惧し、それを阻止しようとして全市民は集って自殺を決意しました。チャンダ・マハーセーナ王は

「余はヴァツァ王を殺す意志はない。彼と同盟しようと思うのだ。」

と告げて、市民たちの動搖を防いだのでした。こうして、王は直ちに音樂を習わせるために王女ヴァーサヴァダッターをヴァツァ王に委ね、ヴァツァ王に

「王よ、この娘に音樂を教えて頂きたい。そうして下さるならば、貴方は幸福となられよう。失望せられるな。」

と語りました。ヴァツァ王が彼女を一目見ますと、彼の心は彼女に對する戀情にずぶ濡れとなり、彼のまなざしから憤怒の色は消えました。彼女の眼も心も、また、ともに彼に吸いよせられました。彼女は羞らいから眼をそらしましたけれども、心は決して彼から離れませんでした。そして、ヴァツァ王はチャンダ・マハーセーナ王の音樂堂に住んで、ヴァーサヴァダッターに歌を教えましたが、彼の眼はいつも彼女に惹きつけられていました。彼の膝にはいつも名器ゴーシャヴァティーがあり、彼の喉には歌のほまれがあり、彼の前にはヴァーサヴァダッターが居て、彼の心を悦ばせるのでした。ヴァーサヴァダッターも彼に夢中になって、あたかも吉祥の女神が侍ずくように、專心彼にかしずき、彼は捕れの身でありましたけれども彼女は彼の傍を一時も離れませんでした。

話かわって、ヴァツァ王の扈從者たちがカウシャームビーに還って、王の捕えられたことが知

れ渡り、王國は動搖しました。憤激した臣下の者たちはヴァツァ王に對する愛情から直ちにウッジャイニーに四方から攻撃を加えようとしました。すると、將軍ルマンヴァットが、

「チャンダ・マハーセーナは偉大な王者であるから、力で征服することは出來ない。また、そのような企てはヴァツァ王の身の安全を危殆に陥れるであろう。從って、攻撃を行うべきではない。われわれは智慧によって目的を遂げるべきである。」

と、動搖した臣下の者たちをとどめました。冷靜で決斷力のあるヤウガンダラーヤナは、王國の人々が王に愛着をもち忠誠心を抱いていることを見て、ルマンヴァットたちに語りました。

「卿等はみな懈怠することなくこの地に留まられたい。そして、この王國を護られよ。もし機至れば、各〻の武勇を發揮せられたい。余はヴァサンタカのみを連れてかの地に赴き、自らの智慧によって必ずやヴァツァ王を救出し、連れ歸るであろう。わが王はまこと冷靜で決斷力のある方である故、王の智慧はあたかも稲妻の閃きが豪雨の際にひときわ輝くように、逆運に際して輝きわたるであろう。余は壁を破り、足枷を解く呪文を知っており、また必要の時に用いうる隱身のための處方*を知っている。」

と言って、ヤウガンダラーヤナはルマンヴァットに臣下をゆだね、自らはヴァサンタカのみを連れてカウシャームビーを出發しました。そして、彼自身の智慧のように生命の充滿し、また彼自身の策略のように錯雜して人跡未到のヴィンディヤ山の大森林に這入りました。ヤウガンダラーヤナはこの地で、ヴァツァ王の盟友で、ヴィンディヤ山の傾斜に住むプリンダ族の王プリンダカ

の許に赴きました。大軍を率いたこの王を、ヴァッァ王がその地を過って歸還する際の、王の保護のための備えとした後、ヤウガンダラーヤナは更にヴァサンタカを連れて遂にウッジャイニーのマハーカーラ燒屍場に着きました。彼等二人が其處に這入りますと、其處には、夜の闇のように黒く、腐肉の臭のするヴェーターラ(屍體に憑く鬼靈)が、屍を燒く薪の煙の渦巻とまごうばかりに、此處彼處に巣くうていました。すると、ヨーゲーシュヴァラという鬼靈が彼に會うのを喜んで忽ちにやってきましたので、彼を仲間としました。ヤウガンダラーヤナはこの者に教えられた呪文によって、忽ちに自分の姿を變えました。彼はこの呪文によって忽ちに傴僂の老人の醜い姿となり、狂人を装いましたので、彼を見た人々に大笑いをさせました。彼はまたその呪文によってヴァサンタカの姿を變えさせ、彼を血管の浮き出た、太鼓腹の、歯が突き出て醜悪な顔の男にしました。こうして、まずヴァサンタカを先發させて王宮の門に行かせ、ヤウガンダラーヤナは嚮に述べたような姿でウッジャイニーに這入り、婆羅門の少年たちに圍まれて歌ったり踊ったりしながら、好奇心を起した衆人環視の中を王宮の方に赴きました。彼は其處で王の後宮の人々の好奇心を唆りました。すると、その噂は遂にヴァーサヴァダッターに聞えました。彼女は急いで侍女を遣わして、彼を音樂堂に連れてこさせました。まこと、若さは歡樂と雙生兒であります。ヤウガンダラーヤナは音樂堂に這入って繋がれているヴァッァ王を見ますと、狂人を裝うていながらも、涙を禁じえませんでした。彼はヴァッァ王に合圖をしましたので、彼が姿をやつしていましたけれども、王は直ちに彼であることを認めました。そこで、ヤウガンダラーヤナは隱身の呪文の威力

によって、ヴァーサヴァダッターや召使の女たちに、自分の姿を見えないようにしました。しかし、王にだけは彼の姿は見えたのです。ヴァッァ王は面前に彼が見えるに拘わらず、彼女等が驚いて

「あの狂人は突然に何處かへ行ってしまった。」

と語るのを聞きまして、それが呪文の力によることを知り、ヴァーサヴァダッターを欺いて

「姫よ、あちらに行って、サラスヴァティー女神(音樂を司る女神)をお祀りする祭具を持ってきて下さい。」

と言いました。王の言葉を聽きますと、ヴァーサヴァダッターは

「そう致します。」

と答えて、侍女たちを連れてゆきました。

そこで、ヤウガンダラーヤナはヴァッァ王に近づいて、足枷を解く呪文を定められた通りに教え、またヴァーサヴァダッターの心を得るための呪文を琵琶の絃にこめて王に授けました。そして、

「陛下、ヴァサンタカも此處にやってきまして、姿を變えて門に立っています。あの婆羅門を近くにお召しなさい。ヴァーサヴァダッター姫があなたさまに賴るようになりましたならば、わたくしの申上げるとおりになさいませ。暫くの間は此處にお留りなさい。」

と言って、ヤウガンダラーヤナは急いで退出しました。すると、そのとき、ヴァーサヴァダッタ

ーが祭具を持って引き歸してきたので、王は彼女に

「門外に婆羅門が立っています。サラスヴァティー女神を祀るために、その人を此處に招じ入れて、布施しましょう。」

と語りました。ヴァーサヴァダッターは承知して、醜い姿をしたヴァサンタカを門のところから連れてこさせました。彼が案内せられてきましてヴァッァ王を見ますと、悲しみのために涙を流しました。そこで、王は祕密がばれないようにするために、

「婆羅門よ、病氣のために起ったあなたの醜い姿を余はすべて癒してあげよう。泣くのではない。余の側に留るがよい。」

と言いました。ヴァサンタカは

「王さま、有難き仕合せに存じます。」

と答えましたが、ヴァッァ王は彼の醜い姿を見て、噴き出さずにはいられませんでした。ヴァサンタカは王の笑い出したのを見まして、王の心中を察して笑い出しましたので、その醜い顏は一層醜くなりました。彼が人形のように笑うのを見まして、ヴァーサヴァダッターも笑い出し、悦び樂しみました。すると、この若い姫は戯れてヴァサンタカに

「婆羅門よ、あなたは如何なる學藝に通曉していられますか、話して下さい。」

と訊ねました。彼が

「姫君、物語を話すことを存じております。」

と答えますと、彼女は

「では、物語を何か話して頂きたい。」

と言いました。そこで、ヴァサンタカは王女に滑稽さと筋の變化で非常に面白い物語を語りました。

〔遊女ルーピニカーとその情夫ローハジャンガの物語〕

この世に、惡魔カンサの敵(クリシュナ神)の生誕の地で、マトゥラーという都があります。その地にルーピニカーという有名な遊女がいました。彼女にはマカラ・ダムシュトラーという女將の老母がありましたが、この母親はルーピニカーの美しさに心を惹かれる若者たちの眼には毒の塊のように見えました。ある日、ルーピニカーが禮拝の時間に自分の務*を果すために神殿に赴きましたとき、遠方に一人の男を見ました。彼女が眉目秀麗なこの男を見ますと、母親の教えた警め*も忘れてしまうほどに、この男の姿が彼女の心に燒きつけられてしまいました。彼女は召使の女に言いつけました。

「早く行って、あの方に『今夜、あなたさまは何卒妾の宅までお出かけ下さいませ。』と、言いなさい。」

「はい。」

と答えて、召使の女は行って、その旨をその男に告げました。すると、その男は暫く考えたのち、申しました。

「わたしはローハジャンガという婆羅門ですが、財産はありません。金持の男だけが揚げることの出來るルービニカーの家で、貧乏なわたしのごときはどういう人間でしょうか。」

「わたくしの主人はあなたさまからお金は頂戴致しません。」

と言われて、ローハジャンガは

「では、そうしましょう。」

と、彼女の言葉に同意しました。

ルービニカーは召使の女の口からローハジャンガの同意したことを聴きますと、嬉しさに心を躍らせながら自宅に歸り、彼の來る道を見下ろして待っていました。間もなく、ローハジャンガが彼女の館にやって來ました。女將マカラ・ダンシュトラーは彼を見て

「この男は何處から來たのかしら。」

と、怪しみました。ルービニカーは彼の來たのを見まして、立上って自ら鄭重に出迎え、嬉しさのあまり彼の頸にかじりついて、自分の居間に案内しました。彼女はローハジャンガの手練手管に魅せられてしまい、この世に於ける他の果報を考えませんでした。こうして、彼女は他の男の相手をすることを拒み、この若者は彼女の館に安樂に彼女と暮しました。この有樣を見まして、多くの遊女たちを仕込んできました母親のマカラ・ダンシュトラーも困りはて、ルービニカーにひそかに申しました。

「娘や、お前は何故あの金のない男にいれこむのだね。腕ききの遊女は貧乏な男を抱くくらいなら、いっそのこと死體を抱くものなんだよ。愛情なんて、遊女の分際にとって、何かって言うんだ。お前はそれを忘れたのかい。男にいれあげる遊女なんて、娘や、西に沈む太陽の赤い色のように、一時輝くだけなんだよ。遊女というものは、踊子と同じに、金儲けのために偽りの愛情を示せばいいんだよ。だから、あの貧乏人を追い出しておしまい。自分を害うようなことをするんではないよ。」

と言う母親の言葉を聞きますと、ルービニカーは怒って

「そんなことを言わないで下さい。あの方は妾にとっては生命よりも大切な愛しい方なんですから。お金は妾が澤山持っています。他のものなんか、妾は何も欲しくないんです。ですから、おっかさん、そのようなことを後生ですから言わないで下さい。」

と言いました。この言葉を聽いて憤慨しましたマカラ・ダンシュトラーは、ローハジャンガを追い出す手段を、色々と考えました。すると、財産をなくした浪人が武器を携えた家來の者たちを連れて、街の通を歩いてくるのを見ました。マカラ・ダンシュトラーは急いでこの男に近づき、片隅に連れて行って、言いました。

「わたしの家が貧乏な情夫に占領せられてしまったんだよ。だから、あんたが行って、その男をわたしの家から追い出すようにしておくれよ。そして、わたしの娘をお抱きよ。」

「よろしい。」

と、その浪人は彼女の家に這入りました。そのとき、ルービニカーは神殿に出かけていました。また、ローハジャンガもそのとき何處かに外出していましたが、浪人が館に乗りこんだ直後に、何の疑惑ももたずに歸ってきました。浪人の家來たちは忽ちに彼に飛びかかって、彼の手といわず足といわず散々に蹴ったり毆ったりした上に、汚物の充ちた溝の中に彼を投げこみました。ローハジャンガは漸くのことで其處から逃げだしました。ルービニカーは歸ってきてそのことを知り、彼女は悲嘆の涙にくれました。浪人はそれを見ておとなしく歸ってゆきました。

　ローハジャンガは女將からひどい仕打ちを受けた上に、愛しい女から引裂かれた悲しみから靈場に赴いて生命を捨てようとして巡禮に出かけました。途中、彼の心は女將に對する怒に燃えさかり、また彼の皮膚は夏の暑い太陽に燒かれて、樹蔭に憩もうと欲しましたが樹木が見つからず、偶然に象の屍體を見つけました。それは尻から豺が這入りこんで肉を喰いつくして皮だけが殘っていたものでした。ローハジャンガは、風が吹きこんで涼しい、その中に這入りこみましたが、疲れていましたので熟睡してしまいました。すると、突然に雲が四方から湧き上って、忽ちに篠つく雨が降りはじめました。そのために、象の皮は收縮して出口がなくなりました。すると、突然に、その道路に物凄い洪水がやってきましたので、象の皮はそのために押し流されてガンジス河に流れこみ、水嵩を増した河水に流されて海まで運ばれました。ガルダ族の生れの鳥がこの象の皮を見て腐肉と思い、それを海の向うまで運んでゆきました。そして、この象の皮を嘴で引き

裂くと、人間が中にいるのを見まして、鳥は逃げてゆきました。そこで、鳥のつつく音に眼を覺ましたローハジャンガは、鳥が嘴であけた穴から外へ出ましたが、自分が海の向う側（セイロン島）にいることを知って驚き、すべてが白晝夢のように思われたのでした。そのとき、彼は怖ろしいラークシャサが二人いるのを見て怖れおののきましたが、このラークシャサたちも遠くから彼を見て怖れました。嘗てラーマ*が海を渡ってきて彼等をうち負かしたことを思い出し、ローハジャンガがラーマと同じように海を渡ってきた人間であることを知って、心中に激しく恐怖を抱いたのです。彼等は互に相談をして、その一人が直ちにヴィビーシャナ王の許に行って、見たままを逐一報告しました。ヴィビーシャナ王はラーマの武勇を知っていましたので、この王も人間の來たのを怖れて、ラークシャサに語りました。

「おい親友、お前は直ぐ行って『わたしどもの家に御光來を賜わりとう存じます。』と、わたしの言葉を鄭重に傳えてくれ。」

「承知しました。」

と、そのラークシャサは引返し、おずおずとローハジャンガに近づき、彼に自分たちの君主の懇請の言葉を傳えました。婆羅門ローハジャンガは心の平靜を取戻し、その招待を受けいれて、ラークシャサを連れてランカー（セイロンの古名　その首都の名）城に這入りました。ローハジャンガは、この都城に這入って、數多くの大廈高樓が黄金で造られているのを見て驚嘆しました。彼は王宮に這入って、ヴィビーシャナ王に會いました。

王はローハジャンガを恭しく迎えました。彼が祝福の言葉をかえしますと、王は彼に

「婆羅門よ、御身は如何にしてこの土地に到着せられましたか。」

と訊ねました。すると、狡猾なローハジャンガは王に語りました。

「わたしはマトゥラに住むローハジャンガという婆羅門です。貧乏に悩まされて、わたしは神殿に赴き、ナーラーヤナ（ヴィシュヌ神）の面前で断食して苦行を行いました。すると、尊きハリ（ヴィシュヌ神）が夢の中で『ヴィビーシャナ王の許に行け。彼は余の信奉者なれば、汝に財寶を贈與せん。』と、告げられました。わたしが『ヴィビーシャナはわたしの行けないところにいます。』と言いますと、わが主は再び『行け、今日ヴィビーシャナに會わせよう。』と告げられました。わが主からこのように告げられました途端に眼が覺めたのですが、海の向うまで來ているのが判りました。その他のことは知りません。」

と、ローハジャンガから聽きますと、ヴィビーシャナ王は、ランカーが到達し難い土地であることを考えて、

「たしかに、この人は神通力を有している。」

と考えました。

「此處に御逗留下さい。あなたに財寶を差上げましょう。」

と、この婆羅門に言いました。王はラークシャサどもを遣わして、その地のスヴァルナ・ムーラという山からガルダ族の生れの若鳥を連れてこさせ、マトゥラーまで歸るローハジャンガの乘物

として馴らすために、直ちに彼に與えました。ローハジャンガはそれに乘ってランカーを飛び廻り、暫くの間ヴィビーシャナの厚いもてなしを受けて、その地に留りました。

暫くして、ローハジャンガがマトゥラーに歸ろうとしますと、ヴィビーシャナ王は彼に多くの高價な寶玉を贈りました。また、ヴィビーシャナはマトゥラーに住むハリ神に對する信心から、この神に奉獻する品として、黄金造りの蓮華、棍棒、螺貝及び輪寶*をローハジャンガの手に委ねました。ローハジャンガはこれらの品を殘らず受取り、ヴィビーシャナ王が彼のために用意した十萬由旬*を飛びうる鳥に乘り、ランカーから飛翔し、天空を驅って海を渡り、造作なくマトゥラーに歸りました。彼は郊外にある人影のない僧院の天空に下り、持って歸りました夥しい財寶を其處に匿して、その鳥をつなぎました。それから彼は市場に行き、寶石の一つを賣り、衣服、薫香、食物を購いました。僧院に歸って食事をし、鳥にも食べさし、衣服、薫香、花などで身支度を整えました。夜になると、彼は螺貝、チャクラ及び棒を手にして鳥に乘り、ルーピニカーの家に行きました。彼女の家のある場所をよく知っていましたので、彼は彼女の家の上空を旋回しながら、蟄居している愛人に聞かせるために鈍い音をたてました。ルーピニカーはその音を聞くやいなや外に出て、夜空にナーラーヤナに似た姿が寶玉を燦めかせながら徘徊しているのを見ました。ローハジャンガが

「余はハリじゃ、そなたのために此處に來たのだ。」

と申しますと、彼女は平伏して

「神さまに於かれましては何卒妾にお惠みを垂れさせたまえ。」
と言いました。そこで、ローハジャンガは下りて鳥をつなぎ、愛する女とともに彼女の部屋に這入りました。彼女と逢瀬を樂しむと、間もなく彼は其處を出て、來たときと同じように鳥に乘って空中を飛び去りました。翌朝になると、ルービニカーは
「妾はヴィシュヌ神の妃である。人間どもとは口をきかない。」
と、沈默の行を守っていました。彼女の母親マカラ・ダンシュトラーが
「娘や、お前は何故そのように振舞うのかい。譯をお話しよ。」
と訊ねました。執拗に訊ねますと、ルービニカーは母親との間に幕を下ろして、沈默の原因である前夜の出來事を母親に語りました。母親はそれを聽いて内心疑いましたが、間もなく夜になるとローハジャンガが鳥に乘って來るのを見ました。翌朝になりますと、幕の内に居ますルービニカーのところに祕かに行って、女將マカラ・ダンシュトラーは恭しく拜禮をして懇願しました。
「娘や、お前は神さまの御惠みで此の世で女神になりました。妾はお前の生みの親なのだから、お前を生んだ褒美を授けておくれ。この年老いた身體のままで天國に行けるように、神さまにお願いしておくれ。妾に惠みを垂れて下さいよ。」
と申しますと、ルービニカーは同意しまして、その夜ヴィシュヌ神に變裝したローハジャンガが再び來ますと、そのことを懇願しました。すると、神を裝うたローハジャンガは愛人に語りました。

「そなたの母親は惡人である。從って、あの女を公然と天國に連れてゆくのは適當でない。今から十一日目の朝に天國の扉が開かれ、シヴァ神の眷屬のガナたちが眞先きに這入る。彼等の中にまじって、彼等と同じ姿をして、そなたの母親は這入るのがよかろう。だから、そなたは母親の頭を剃って五條の髻髪をのこし、頸には髑髏の頸飾をかけ、衣服を脱がせて半身に油煙を塗り、半身を赤鉛で塗れ。* このようにすれば、ガナに似た彼女を余は易々と天國に連れてゆくことが出來よう。」
と言って、ローハジャンガは少時彼女の許にいて歸りました。翌朝、ルービニカーは母親を言われた通りの姿にしました。母親自身も一心不亂に天國を願っていました。夕方になって、ローハジャンガが再び現われますと、ルービニカーは母親を彼に委ねました。そこで、彼は裸になって姿を變えた女將を連れて鳥に乘り、空中に素速く飛び上りました。天空に上ると、ローハジャンガは頂に輪寶を飾った高い石柱が神殿の前に建っているのを見まして、女將をその頂のチャクラにぶらさがらせましたので、女將はあたかも彼女の意地惡い仕打に對する彼の復讐を誇示する旗のようにぶらさがりました。彼は
「余が大地に近づいて大地を幸いならしめる間、しばらく此處に居よ。」
と言って、彼女の視界から去ってしまいました。こうして、ローハジャンガは神殿の前に人々が祭禮の行列に參加するために集って徹夜しているのを見まして、彼等に天から聲をかけました。
「おい、世間の人々よ、今日此處で、汝等の上に、一切を滅ぼし盡すマーリー（疫病の女神）が落ちる

ぞ。されば、ハリに助けを求めよ。」

と、天上からの聲を聞きますと、其處に居ましたマトゥラーの人々はみな怖れおののき、神の保護を懇願して災害を免れるように祈禱をしつづけました。ローハジャンガは天から下り、神の服裝を脱いで、人知れず彼等の間にまざってお祈りをしていました。

柱の頂上にのこされました女將は

「神さまはまだ歸ってこられないし、妾は天國にまだ行くことが出來ない。」

と考えました。しかし、柱の頂上に最早ぶら下っていることが出來なくなり、怖ろしくなった彼女は下に居る人々に聞こえるように

「ああ、ああ、落ちる。」

と叫びました。その聲を聞きますと、神前に集った人々はマーリーが天降ったのであるかと思い、驚き慌て

「女神さま、何卒、何卒、天降られませぬように。」

と言いました。こうして、マトゥラーの人々は、若い者も、老人も、マーリーの天降るのを怖れながら、漸くのことでその夜を過しました。朝になって、嚮に述べたような姿で柱の頂にぶら下っている女將を見て、市民たちも、王も、みな彼女が誰であるかが判りました。すべての人々は昨夜の恐怖もすっかり忘れて、大笑いしました。ルーピニカーもその椿事を聞いて其處に來ましたが、その有様を見て恥ずかしくなり、其處に居ました人々の助けをえて、直ちに自分の母親を

柱の頂上から下ろしました。そこで、人々は好奇心から女將に訊ねましたので、彼女は仕方なく有りのままを物語りました。王も、婆羅門も、商人たちも、すべての人々はこの事件が魔法使いか或はそれに類する人の仕業であると考えて、

「多くの色男を瞞したこの女將をたぶらかした人は現われ出られよ。その人の頭に、今、此處で、賞讚の飾布をわれわれは贈ろう。」

と語りました。その言葉を聞きまして、ローハジャンガはその場に名乘りでて、問われるままに事の次第を最初からすべて物語りました。そして、彼はヴィビーシャナ王が彼に委ねた螺貝やチャクラなどの神器を供えて、人々を驚かせました。

そこで、マトゥラーの人々はみな悦んで、直ちに彼に賞讚の飾布を被らせ、また王命によってルーピニカーを自由の身としました。* こうして、ローハジャンガは女將の意地悪い仕打に對する怒を報復し、ランカーから持ち歸った莫大な數々の寶玉によって大金持となり、愛する女と一緒に樂しくその地で暮しました。

と、變裝したヴァサンタカの口から、この物語を聽きまして、繋がれたヴァツァ王の側に坐っていましたヴァーサヴァダッターは非常な喜びを感じました。

五

さて、ヴァーサヴァダッターは次第にヴァツァ王に激しい愛情を抱くようになり、遂に父の意に逆うようになりました。そこで、ヤウガンダラーヤナが他の誰にも姿を見せないで再びヴァツァ王の側に來て、ヴァサンタカの居るところで、祕かに王に告げました。

「陛下、あなたはチャンダ・マハーセーナ王のために策略で捕えられました。しかも、かの王はあなたを鄭重に待遇して、自由の身とし、娘を嫁がせようと望んでいます。ですから、われわれはヴァーサヴァダッターを攫って逃げましょう。このようにして、われわれはかの高慢な王に報復しましょう。そうすれば、世間の人々はわれわれに勇氣がないとは決して考えないでしょう。さて、陛下、かの王は王女ヴァーサヴァダッターにバドラヴァティーという雌象を與えましたが、ナダーギリを除いては速さの點でこの雌象に追いつきうるものは他にいません。しかも、ナダーギリがこの雌象を見ましても、戰を挑むことは決してありません。この雌象の御者はアーシャーダカという男ですが、わたしはこの男に澤山の財貨を與えて買收してあります。あなたは夜間に祕かにヴァーサヴァダッターを連れ、武裝して、この象に乘って此處を立去って下さい。そして、此處の象長官は象の動作に通曉していますから、何も氣づかれぬように酒で醉わしておかねばなりません。わたしは先發しまして味方のプリンダカの許に行き、かの王があなたの通過せられる

道筋を守護するように致させます。」

と言いまして、ヤウガンダラーヤナは出發しました。

ヴァツァ王は自分のなすべきことをすべて心の奥に祕めたのでした。そして、ヴァーサヴァダッターが彼の側に來ましたとき、彼女とあれこれの打解けた話をしました後に、ヤウガンダラーヤナの語ったことを彼女に話しました。彼女は王の言葉に同意して王と同行することを決心し、アーシャーダカを呼び寄せて、象に乘る用意をさせました。そして、神殿參拜という口實で、象長官並びにすべての象使いに酒を飲ませて醉わせてしまったのでした。こうして、夕方になって、稻妻が閃き雷鳴の轟き渡る雲が天を被うと、アーシャーダカが象の用意を調えて引き出しました。すると、支度をしています間に、この雌象が叫び聲をあげました。象の聲に通曉する象長官がその聲を聞いて、

「象は今日六十三由旬行けるでしょう、と言っている。」

と、醉っているためにはっきり聞きとれない聲で言いました。しかし、彼は醉っていましたので、彼の心はそれが何故であるかを考えることが出來ませんでしたし、また象使いたちも醉うていましたので彼の言葉さえ聞きとれませんでした。そこで、ヴァツァ王はヤウガンダラーヤナから敎えられた呪文で鎖を切斷し、自分の琵琶をもち、ヴァーサヴァダッターが自らすすんで持ってきました劍を手にして、ヴァサンタカと一緒に雌象に乘りました。また、ヴァーサヴァダッターも、腹心の侍女カーンチャナマーラーと一緒に、その象に乘りました。こうして、ヴァツァ王は、象

使いのアーシャーダカを加えて五人で、夜闇にまぎれてウッジャイニーを出發し、發情期の象が踏みしだいて出來た道を進みました。その道筋には、ヴィーラバーフ及びターラバタという二人の勇敢な公子が警護にあたっていましたが、ヴァッァ王はこの二人を殺してしまいました。こうして、アーシャーダカが鉤で驅る象に愛人とともに乘って、ヴァッァ王は心いさんで出發しました。

ウッジャイニーに於いては、都城の警吏が二人の衞兵の殺されているのを見まして、驚いて、夜中にも拘わらず、王に報告しました。チャンダ・マハーセーナ王は取調べて、漸くにしてヴァッァ王がヴァーサヴァダッターを攫って逃げたことを知りました。城内は上へ下への大騒ぎとなりました。王子パーラカがナダーギリに乘って、ヴァッァ王の後を追いました。ヴァッァ王は後を追うてきましたパーラカを邀えて矢で戰いましたが、ナダーギリはかの雌象を見ると進撃しなくなりました。そのとき、父の所行を心にかけていました兄のゴーパーラカ王子が追ってきましてパーラカをとどめましたので、道理ある言葉を知る彼はヴァッァ王を追うのを思いとどまりました。

ヴァッァ王は大膽に旅行を續けました。その途中、次第に夜が明けて、その日の晝頃にはヴィンディヤ山の森林に到着しました。王の乘った象は六十三由旬の道程を旅しましたので、渇をおぼえました。そこで、ヴァッァ王は妃とともに象から下りて、象に水を飲ませましたが、水が惡かったために雌象はその場で死んでしまいました。ヴァッァ王とヴァーサヴァダッターとは途方に暮れましたが、そのとき天上から聲が聞こえてきました。

「王よ、わたしはマーヤーヴァティーというヴィディヤーダラの女です。呪詛のために、長い間、雌象でいました。ヴァッァ王よ、今日、わたしはあなたをお助けしました。更にまた、將來生れるべきあなたの王子をもお助けいたしましょう。あなたの妃ヴァーサヴァダッターは人間ではありません。或る理由で地上に化身した女神です。」

と。こうして、元氣づきましたヴァッァ王はヴァサンタカをヴィンディヤ山の豪地に派遣して、味方のプリンダカに自分の到着を告げさせました。自らは愛妃を連れて徒歩で旅を續けていますと、待伏せていた匪賊に取圍まれました。ヴァッァ王は弓だけでその百五人の者をヴァーサヴァダッターの面前で殺しました。そのとき、盟友プリンダカがヤウガンダラーヤナと一緒に、ヴァサンタカに案内させて、やって來ました。ビッラ族の王プリンダカは匪賊どもを押え、ヴァッァ王に平伏して、王を愛妃とともに自分の村に案内しました。ヴァッァ王はその夜を森の草の葉で足を傷めたヴァーサヴァダッターと一緒に其處で休みました。その翌朝になりますと、豫めヤウガンダラーヤナからの使者で王の脱出を知りました將軍ルマンヴァットが到着しました。そして、ルマンヴァットとともに四方を埋めつくすほどの全軍も到着しましたが、そのためにヴィンディヤ山の森林は慴伏を享樂しているかのようでありました。ヴァッァ王は自己の軍勢の幕營に移って、この森林でウッジャイニーからの情報を待ちました。そのとき、ヤウガンダラーヤナの友人の商人がウッジャイニーから來まして、その地に留まっていましたヴァッァ王に次のように報告

しました。

「王さま、チャンダ・マハーセーナ王はあなたさまを女婿にしたことを非常に悦ばれ、あなたさまの許に使節を派遣しました。使節は途中少し後方に宿りましたので、わたしは先廻りして、王さまに一時も早くお知らせしようと思い、祕かに急いで參りました。」

と、商人から聽きますと、ヴァツァ王は非常に悦び、すべてをヴァーサヴァダッターに話しましたので、彼女も非常に喜びました。自分の肉身の者たちを振り捨てて、結婚式のことを心配していました彼女は、そのことを聞きますと、恥ずかしく思うとともに、また心の中で何とはなしに不安でした。そこで、自分の氣持を紛らせるために、側に侍坐するヴァサンタカに

「何か物語を話しなさい。」

と言いました。すると、賢明なヴァサンタカはそのとき美しい瞳の彼女が夫に對して愛情を增さずには措かないような次の物語を物語りました。

〔貞女デーヴァスミターの物語〕

この世に、タームラリプティー*という有名な都城があります。其處にダナダッタという、非常に富裕な商人がいました。彼には息子がありませんでしたので、多くの婆羅門を集めて、恭しく彼等に

「わたしが間もなく息子をえられるようにして頂きたい。」

と言いました。すると、婆羅門たちが彼に言いました。

「それは決して難かしいことではない。何故なれば、この世に於いて、婆羅門は聖典に定められた儀式によって一切を成就するからである。嘗て、息子を持たぬ或る王があった。この王の後宮には百五人の妃妾がいた。息子を得る供犧によってこの王にジャントゥという王子が生れたが、この王子はすべての妃妾たちの眼には新月の昇天のごとくに見えた。あるとき、この兒が匍い廻っていたとき、蟻がその臀部を咬んだので、彼は愕いて大聲をあげて泣いた。そのため、後宮は大騷ぎとなり、王さえ普通の人と同じように『坊よ、坊よ。』と、叫んだ。間もなく蟻は取除かれ、王子は泣き止んだが、王は子が一人しかいないことが不幸の唯一の原因であることを苦にして、それを悲しむあまりに『余が多くの子を得る方便があるか。』と、婆羅門たちに諮問した。彼等は『王よ、この點に關して手段がある。あなたの息子を殺して、その肉を殘らず聖火に捧げなさい。その臭を嗅いで、王の妃妾たちはすべてあなたの子を生むであろう。』と、答えた。その言葉を聞いて、王はすべて言われた通りにした。そして、彼は妃妾と同數の息子をえた。從って、あなたのためにも、われわれは燒供によって息子を得るをえよう。」

と、ダナダッタに物語って、彼が布施の品をととのえますと、婆羅門たちは燒供を捧げて祭式を行いました。こうして、この商人に息子が生れました。グハセーナと名づけられた息子は次第に大きくなりましたので、父のダナダッタは彼のために嫁を探しました。

そこで、父は息子とともに商用に名を借りて嫁探しに海の向うの島（セイロン島）に出かけました。その地で、ダルマグプタという大商人に、娘のデーヴァスミターを息子のグハセーナの嫁に呉れるように頼みましたが、娘を熱愛していましたダルマグプタはタームラリプティーが遠いことを考えて、この縁談に同意しませんでした。しかし、デーヴァスミターはそのときグハセーナに會って、一目で彼の德に心を惹かれ、身内の者を捨てる決心をしました。そこで、信頼する侍女を通じて彼と約束をし、夜に紛れて愛人とその父と一緒にその島から去りました。そして、タームラリプティーに着きますと、彼等二人は結婚をしました。夫婦の心は互いに愛情の絆で結ばれて、仲睦じく暮しました。父ダナダッタが死にますと、グハセーナは商用のためにカターハ・ドヴィーパ*に行くことを親戚の者たちから慫慂されました。しかし、そのとき、妻のデーヴァスミターは夫が旅行中に他の女にたわむれることを怖れ、嫉妬心から彼の旅行に同意しませんでした。このように、妻は彼の旅行を喜ばず、親族の者たちは催促するままに、グハセーナは自分の義務の遂行を決心していましたものの心惑わざるをえませんでした。そこで、彼は神殿に赴き、

「神はまこと何等かの方便をわたしに示して下さるであろう。」

と考えて、斷食の行を行いました。デーヴァスミターもまた夫とともに戒行を行いました。すると、シヴァ神がこの夫婦の夢の中に現われ、彼等二人に赤い蓮華を與えて宣示せられました。

「そなたたちはお互いにこの蓮華を持っていよ。そなたたちが別れている間に、いずれかが操を捨てることがあれば、他方の手にある蓮華が萎むであろう。そういうことがなければ、萎むことはない。」

というシヴァ神の言葉を聞いて夫婦は眼を覺ましましたが、お互いに手に赤い蓮華を持っているのを見まして、お互いに心の中を見たように思いました。こうして、グハセーナは蓮華を持って出發しましたが、デーヴァスミターは家に留って赤い蓮華をいつも眺めていました。グハセーナはカターハへ直行して、その地で諸〻の寶玉の賣買を始めました。彼がいつも手に凋まない蓮華を持っていますのを、その地の四人の若い商人が見て怪しみ、策略を用いて彼を彼等の家に連れてきて、酒をしたたか飲ませ、赤い蓮華について一部始終を訊ねました。彼は醉うていましたので、それを話してしまいました。そこで、四人の若い商人たちは、グハセーナが寶玉などの賣買には長い間を要すると考え、惡者だった彼等は好奇心に驅られて彼の妻の貞節をそそのかそうと思い、またそれに成功しようと願って、相談して人知れずタームラリプティーに出かけました。この地に到着しました彼等は策略をめぐらしていましたが、佛教の靈場に住むヨーガカランディカーという尼僧と知合いになりました。彼等は彼女に

「尊尼よ、われわれの願があなたの援助で成就するならば、われわれはあなたに莫大な富を差上げましょう。」

と、懇に語りました。すると、彼女は

「お前さんがたは確かに此處で誰か女を欲しがっているのだね。お話しよ、望を適えさせて上げようよ。でも、わたしはお金を欲しがっているのではないのだよ。わたしの弟子にシッディ

カリーという智慧をもつ女がいて、そのお蔭でわたしは量り知れないほどの財産を得たのだからね。」

と答えましたので、若い商人たちが

「あなたはどんなにしてお弟子のお蔭でそのような財産を得られたのですか。」

と訊ねますと、尼僧は語りました。

「それが知りたいのなら、伜たちよ、よくお聴き。話してあげよう。」

〔狡猾なシッディカリーの物語〕

「むかし、北方からこの土地に一人の商人がやって來た。この男が此處に逗留している間に、わたしの弟子のシッディカリーが姿を變えて、策略を用いてこの男の家の下女になったのだ。その商人に信頼させておいて、シッディカリーはその家から黄金の塊をみな盗み出して、夜の明けがたにこっそり脱け出した。都城を出て、追跡を恐れて急いでいるあの女を見て、太鼓を手にした一人のドムバ(賤民の一種)があの女から掠奪しようとして急いであの女の後を追うたのさ。城外の榕樹の根元に着いたとき、ドムバが近づいてくるのを見て、狡猾なシッディカリーは訴えるように言ったんだよ。『わたしは夫と喧嘩して、死のうと思って家を出てきたのです。だから、旦那、わたしが首をくくる縄をくくりつけて下さい。』とね。そのドムバは『この女が首をくくって死

んでも、俺が女を殺したことにはならない。』と考えて、其處の樹に縄をかけた。そこで、シッディカリーは馬鹿を裝うて、ドムバに言ったわけさ。『どんなにして首をくくるんですか。どうか教えて下さい。』とね。そこで、ドムバは太鼓を踏臺にして、『こうするんだ。』と言って、自分の頸に縄をかけた。すると、シッディカリーはその途端に太鼓を足蹴にして毀したので、ドムバは縄にぶら下って死んでしまった。そのとき、財産を殘らず盗んで逃げたシッディカリーを追うてきた商人が、遠くから、樹の下に彼女がいるのを見た。彼女もまた商人のやってきたのを見て、こっそりと樹に登った。樹に登って、葉の繁みの中に身體を匿していた。下男を連れて商人が樹の下に來ると、首をくくったドムバだけが見えて、シッディカリーの姿は何處にも見られなかった。すると、下男の一人が『あの女は樹に登ったのでしょう。』と、樹に登った。シッディカリーは『わたしはいつもあんたに惚れていたんですよ。あんたは此處に登ってきたのじゃないか。だから、色男さん、この財寶はあんたの意のままになるんだし、こっちへ來て抱いておくれよ。』と言ってさ、その男を抱いて、その口に接吻しながら歯でこの馬鹿者の舌を噛みきったんだよ。この男は痛さに堪えかねて、口から血を吐き、ララッラと何か判らぬ言葉を言いながら樹から落ちた。それを見て、下男が悪魔に襲われたと思い、商人は怖れて伴の者たちを連れて、その場を逃げ出して自分の家に歸ってしまった。尼僧シッディカリーも恐ろしくなって樹から下りて、家に財産を持って歸ったのさ。わたしの弟子はこのように智慧分別のある女なんだよ。このように、伜たちよ、わたしは彼女のお蔭で財産を得たんだよ。」

と、尼僧は若い商人たちに語って、丁度そのときやってきました弟子のシッディカリーに會わせました。そして、彼等に

「さて、伜たちよ、本當のことをお話しよ。お前さんがたはどの女を欲しがっているのかね。お前さんがたに早速その女を手にいれてあげようよ。」

と言いました。その言葉を聴きますと、彼等は

「デーヴァスミターという商人グハセーナの妻に會わせて貰いたい。」

と語りました。この言葉を聴きますと、尼僧のヨーガカランディカーはそのように取計うことを約束し、若い商人たちを自分の家に逗留させました。彼女はそこでグハセーナの家にいる召使に食物などの贈物をして悦ばせておいて、弟子を連れて家に這入りました。そして、デーヴァスミターの私室に近づきますと、鎖に繫がれた牝犬が尼僧たちの這入るのを今までになく激しく吠えてさえぎりました。そこで、デーヴァスミターはそれを見て

「あの尼僧は何のために來たのだろうか。」

と、いぶかしく思いながらも、召使を遣わして彼女を親しく迎えて部屋に這入らせました。この性悪な尼僧は部屋に這入りますと、貞淑なデーヴァスミターに祝福の言葉を述べ、僞りの親密な態度で彼女に話しかけました。

「わたしはいつもあなたにお目にかかりたかったんですのよ。今日あなたを夢の中で見ましたので、あなたにお會いしたくてたまらなくなって、やって參りましたの。旦那さまと別れて暮し

ていらっしゃるあなたにお目にかかって、わたしの心はとても悲しいのです。容姿も、若さも、愛する人の愛撫を受けない間に衰えてしまいますからね。」

などと數々の言葉を述べて、長い間空閨を守っている貞淑なデーヴァスミターを慰めて、尼僧は別れの言葉を述べて自分の家に歸りました。

次の日、胡椒粉をまぶした肉片を持って、尼僧ヨーガカランディカーは再びデーヴァスミターの家に行きました。そして、戸口にいる犬にその肉片を與えますと、牝犬は胡椒のついた肉片を忽ちに食べました。すると、胡椒のために牝犬の眼から涙が流れ、鼻水が流れ出はじめました。悪者の尼僧は直ちにデーヴァスミターの部屋に這入って、鄭重に出迎えました彼女の前で泣きはじめました。デーヴァスミターがその譯を訊ねますと、尼僧は咽びながら言いました。

「娘よ、部屋の外で涙を流している牝犬を御覧なさい。あれは今日わたしが前生に於いて仲間であったことを知って、涙を流しはじめたのです。ですから、可愛そうになって、涙が流れたのです。」

と聴きまして、デーヴァスミターが部屋の外を見ますと、牝犬があたかも泣いているかのように涙を流していましたので、

「これは何という不思議なことだろう。」

と、一寸不思議に思いました。すると、尼僧が

「娘よ、前生に於いて、わたしとあの牝犬とは或る婆羅門の妻でした。そして、わたしたちの

夫は王命によって使節となって度々遠い外國に旅行しました。夫が出かけています間、わたしは欲するままに男と交りましたので、わたしの五大*と五感*の聚りは享樂を紛らされるということはなかったのです。何故なれば、五大と五感とを適當に享樂せしめることは最高の義務と考えられているからです。ですから、娘よ、わたしは此の生に前生の思出をもって生れてきたのです。それに反し、あの牝犬はそのとき無智なために貞操だけを守っていましたのです。その故に、彼女は牝犬の胎に墜ちて、此の世に牝犬となって生れたのですが、それでもわたしを見て漸く前生を思い出したのです。」

と申しました。賢明なデーヴァスミターは

「どうしてこういうことが不變の正義であろうか。この人は惡だくみを企んでいるのに相違ない。」

と考えて、尼僧に

「尊尼さま、まことわたくしは長い間この義務について存じませんでした。誰か容姿勝れた男の方と會わせて下さいませ。」

と申しました。すると、尼僧は

「外國から若い商人たちが來て、當地に逗留しています。その人たちをあなたのところへ連れてきましょう。」

と言って、喜んで自分の家に歸りました。デーヴァスミターは召使の女たちに打明けて話しました。

「その若い商人たちというのが誰か判らないが、惡者で、きっとわたしの夫が手にしている、あの凋まぬ蓮華を見て好奇心を起し、お酒を飲んでいる夫に仔細を訊ね、わたしを誘惑するために此處に來たのに相違ない。そして、あの惡い尼さんはその男たちに雇われたのだ。だから、急いでダットゥーラ*の實を入れたお酒を持ってきておくれ。それから、鐵で作った犬の足を造らせておくれ。」

と、デーヴァスミターから言われました召使の女たちは命ぜられた通りにしました。そして、デーヴァスミターの命令で、ひとりの召使の女がそのとき彼女の姿をしました。

さて、四人の若い商人たちは各自に

「自分がさきに行きたい。」

などと言いましたけれども、尼僧はその中の一人を連れて出かけました。その男に自分の弟子の衣裳を着せて、夕方になるとデーヴァスミターの家に這入らせて、自分はひそかに脱け出して歸りました。そこで、デーヴァスミターの姿をしました召使の女が、この商人にダットゥーラの實を入れた酒を飲ませました。この酒は、彼の不道徳な所行と同様に、彼の意識を痲痺させてしまいました。召使の女たちは彼の衣服などを脱がせて眞裸にし、しかもその額に犬の足の烙印をつけ、夜の間に引きずり出して、汚物の充満した溝の中に放りこみました。第五更になって正氣を取戻しましたこの男は、自分が自らの惡行のために墜ちた阿鼻地獄にも似た溝の中に落ちこんで

いるのに氣がつきました。彼は立上って身體を洗い、額の烙印をさすりながら、裸のままで尼僧の家に歸りました。彼は「自分だけが笑われたくない。」と考え、

「歸る途中で追剝に遭ったのだ。」

と、他の友だちに語り、朝になりますと、

「徹夜で飲みすぎたために頭痛がする。」

と言譯して、烙印をつけられた頭に布を巻いていました。そして、その日の夕方になりますと、他の若い商人が同じようにデーヴァスミターの家に行き、散々な目に遭いました。この男もまた裸で歸ってきまして、

「寶石の類はあそこに置いてきたのだが、あの家を出てから追剝に取られてしまったんだ。」

と語り、朝になると彼もまた頭痛を口實にして鉢卷をし、額に押された烙印をかくしていました。このようにして、若い商人たちはみな烙印をつけられて散々な目に遭いましたが、恥じて本當のことを隠していました。そして、

「あの尼もこんな目に遭うがよい。」

と考えて、自分たちが散々な目に遭ったことを尼僧に打明けないで、その地を去りました。

さて、尼僧は

「わたしは約束を果したわい。」

と大喜びで、デーヴァスミターの家に弟子を連れて出かけました。デーヴァスミターは鄭重に迎

えて、尼僧の計らいに滿足したような顔をして、ダットゥーラ入の酒を持ってこさせて、尼僧に飲ませました。貞淑な妻は尼僧とその弟子とがこの酒に酔うて前後不覺になりますと、彼女等の耳と鼻とをそいで、汚物の滿ちた溝の中に投げこみました。デーヴァスミターは

「あの若い商人たちが歸って行って、夫を殺すようなことはないだろうか。」

と思い惑って、姑のところへいって一部始終を話しました。すると、姑は

「娘や、そなたは本當にうまくおやりだったね。でも、伜に何かよくないことが起るかも知れないよ。」

と申しましたので、賢明なデーヴァスミターは

「わたしも彼地に行きまして、策略をめぐらせて夫を護ります。」

と、姑に言いました。そして、自分の召使の女たちと一緒に商人に變裝し、商用を口實に乘船し、夫のいるカターハ・ドヴィーパに行きました。その地に着きました彼女は夫のグハセーナの姿を商人の中にみとめました。彼女にとっては、夫の姿はまこと安堵がこの世に化身して姿を現わしたかのように見えました。グハセーナもまた男の姿をしたデーヴァスミターを遠くから見まして、貪るようにその姿を眺めながら、

「愛しい妻によく似たあの商人は誰だろうか。」

と考えました。デーヴァスミターはその土地の王の許に赴いて、

「お願いの筋がございます。何卒、凡ての人を集めて下さい。」

と、願い出ました。王は好奇心を起して、市民を一人のこらず召集し、

「そなたの願いとは何か。」

と、商人の姿をした彼女に申しました。そこで、デーヴァスミターが

「わたくしの四人の奴隷が逃げて、この人々の中にいます。王さまは何卒彼等をわたくしにお引渡し下さい。」

と申しましたので、王は彼女に

「市民はすべてここに集っている。だから、皆の顔を見て自分の奴隷を探し出し、連れ歸るがよい。」

と言いました。デーヴァスミターは早速に、自分の家で散々な目に遭わせたために、その時もなお頭に頭布を卷いていました四人の若い商人を摑まえました。すると、そのとき、其處にいました多勢の商人たちが怒って

「これらの人々は豪商の子だ。どうしてお前の奴隷などでありえよう。」

と、彼女に言いましたので、彼女は

「あなたがたがわたしの言うことをお信じになれないのでしたら、この人々の額をお檢べになって下さい。そこに犬の足の烙印をわたしは燒きつけておきましたから。」

と答えました。人々が

「よかろう。」

と言って、四人の者の頭布をとり去りますと、其處に居ました人々はみな彼等の額に犬の足痕があるのを見ました。彼等は恥ずかしくなりました。王は驚いて、

「これはまた何としたことだ。」

と、デーヴァスミターに親しくたずねました。彼女が一部始終を物語りますと、皆の者は大笑いをしました。王が彼女に

「これらの者はまさしくそなたの奴隷である。」

と申しましたので、商人たちはこの四人の者を奴隷の境遇から救うために彼女に夥しい財貨を與え、また王の寶庫にも罰金を納めました。デーヴァスミターはこの財貨を受取り、また自分の夫を取戻し、皆の人々から尊敬せられて、故郷のタームラリプティーに歸りました。そして、その後二度と再び愛する夫と離れることはありませんでした。

「お妃さま、このように大家の生れの婦人は貞淑で、しかも斷乎たる行動によって、いつも夫に仕え、他の男に眼もくれません。まこと、貞淑な婦人たちにとっては、夫は至高至上の神であるからです。」

と、旅の途中でヴァサンタカの口からこの氣高い物語を聴きました、ヴァーサヴァダッターは、父の宮殿を、少し前に捨ててきたことを羞ずかしく思いました。彼女の心は既に強い愛情で夫のヴァツァ王に結びつけられていましたが、改めて夫に對する信頼と愛情とが心に滿ち溢れるので

した。

六

さて、ヴァッツァ王がヴィンディヤ山中に逗留していました間に、チャンダ・マハーセーナ王の使節がヴァッツァ王の許に到着しました。使節は到着しますと、王に敬禮して、次のように語りました。

「チャンダ・マハーセーナ王が陛下にこの口上を申し送られました。『あなたがヴァーサヴァダッターを自ら連れ去られたのはまことに好都合でした。余があなたをわが國にお連れしたのは、まことにそのためであったからです。あなたが捕われていられた間に、余が娘をあなたに嫁がせなかったのは、もしそうすればあなたがわれわれに好意を持たれないであろうと心配したからです。さて、王よ、余の娘の結婚式が正規の儀式に則って執り行われるまで、暫くの猶豫をせられたい。太子ゴーパーラカが間もなくあなたのところに參り、掟に従って妹の結婚式を執り行うでありましょう。』」

と、ヴァーサヴァダッターの父の口上をヴァッツァ王に傳え、使節は更にヴァーサヴァダッターに色々のことを語りました。こうして、非常に喜びましたヴァッツァ王は和みよろこぶヴァーサヴァダッターを連れて都城カウシャームビーへ歸還する決心をしました。大王は舅の家臣である使節

と盟友プリンダカとに

「卿等はゴーパーラカ太子の到着をこの地で待たれよ。太子とともに、後からカウシャームビーに來られよ。」

と語って、二人をその地にとどまらせました。こうして、雄々しき王はその翌日の朝ヴァーサヴァダッター妃と一緒に自分の都カウシャームビーに向けて出發しました。彼に従う象群はマダ*を滴らし、その動くさまはあたかもヴァッツァ王に對する敬愛の情から彼の後を追うて動くヴィンディヤ山脈の頂に似ていました。馬の蹄や兵士の足音に轟く大地の響は、王の樂人の歌にも勝って彼を讃美するかのようでありましたし、軍勢の擧げる土埃は天に冲して、山が翼で天空を飛びたわむれるかとインドラ神を驚かすほどでありました。

こうして、王は二三日にして彼の國土に到着し、一夜をルマンヴァットの館で休息しました。そして、その翌日、王は愛妃を伴うて、人々が顔を擧げて王の入城を待ち焦れているカウシャームビーに、久し振りに入城する悦びにひたりました。そのとき、都城はあたかも久しぶりに夫の歸宅したとき召使の女たちの手を借りて齋戒沐浴して裝飾品を身に飾る女のように輝き、市民はもはや憂いもなくなり、孔雀が稻妻をともなう雨を喜ぶように、花嫁を伴うたヴァッツァ王を仰ぎ見るのでした。都城の婦女子は高臺の端に立ちならんで、天上のガンガー河の岸に咲く黄金の蓮華さながらに、美しい顔容で空を埋めつくしました。こうして、ヴァッツァ王は王位の吉祥の女神の化身にも似たヴァーサヴァダッターと一緒に王宮に這入りました。そのとき、王宮にはヴァ

ツァ王に忠誠を示すために集った諸王侯が堂に滿ち、伶人の唱う歌聲に湧き立って、あたかもいま睡りからめざめたかのように輝きわたりました。

間もなく、ヴァーサヴァダッターの兄ゴーパーラカが使節とプリンダカの二人を連れて到着しました。王がゴーパーラカ太子を招じ入れますと、ヴァーサヴァダッターは喜びの眼をみはって、兄を喜悦の化身であるかのように迎えました。そのとき、彼女が兄をみつめていますと、彼女を羞かしがらせぬようにするかのように、彼女の兩眼に涙がにじみでてきました。父からの傳言の言葉とともに、兄に慰さめはげまされ、身内の者と再會した今となって、彼女は此の世の望は滿されたと思うのでした。そして、その翌日、ゴーパーラカは心こめてヴァッツァ王と妹の結婚の式典を掟に從って擧行し、ヴァッツァ王は愛の蔓草に新らしく萠えでた美しい若芽のようなヴァーサヴァダッターの手をとりました。彼女も愛する夫の手を握る大きな喜びに眼をとじ、喜びにおののく全身は汗もしとどに身の毛をよだたせていました。そのときの彼女は、花の弓を持つ神（戀の神カーマ）に、喜びの困惑という風と水の矢で、絶え間なく射られているかのようでありました。彼女が聖火を右遶しましたとき、彼女の眼は煙のために赤くなりましたが、そのさまはあたかも酒と蜜とを飲みくらべて醉うているかのようでありました。そのとき、王庫はゴーパーラカが持參した寶玉と諸王の贈った慶祝の品で溢れ、ヴァッツァ王は眞に王者中の王者となりました。結婚式が終りますと、花婿と花嫁の二人は人々の前に姿を現わし、その後に自分たちの部屋に引きとりました。

さてヴァッツァ王はこの目出度い日にゴーパーラカとプリンダカの兩人に寶冠などを贈って敬意を表しました。また、諸王侯や市民たちに適當に敬意を表することを大臣ヤウガンダラーヤナと將軍ルマンヴァットに委ねました。そこで、ヤウガンダラーヤナがルマンヴァットに相談しました。

「王はわれわれに難かしい仕事をまかせられた。世間の人々の心は把えがたい。われわれはこの服屬した人々をのこらず十分に慰めねばならない。」

と語って、ヤウガンダラーヤナはルマンヴァットと一緒にヴァッツァ王の祝典のこの當日に集ってきました人々にそれぞれ敬意を表しました。彼等兩人は王侯たちを十分に滿足させましたので、王侯たちはみなそれぞれに

「この二人は余のみに傾倒している。」

と考えたほどでした。ヴァッツァ王はこの兩人とヴァサンタカに親しく衣服、香油、裝飾品を贈り、村落を下賜して、彼等の勞を犒いました。

さて、結婚式の祝典を擧行して、ヴァーサヴァダッターと正式に結ばれましたヴァッツァ王は彼の願望が滿たされたと考えました。二人の愛情は長い憧れの後に花が開いただけに深く、彼等の心はさながらいつも夜間には雌雄互いに離れて嘆き悲しむといわれるチャクラヴァーカ鳥が夜の明け方に抱く思にも似ていました。夫婦の間がなじめばなじむほど彼等の愛情はいやましに新らしくされるかのようでありました。そこで、ゴーパーラカは彼の結婚式の準備をしました父王か

らの命で、またヴァツァ王も慫慂しましたので歸途につきました。

　さて、暫くして、ヴァツァ王は嘗て關係のあったヴィラターという後宮の侍女をひそかに寵愛しました。あるとき、王は誤って王妃を呼ぶのにこの女の名で呼びましたが、彼は王妃の足に縋って彼女をなだめ、彼女の涙を灌がれて幸運という覇王の位を得ました。また、王はバンドゥマティーという王女ともひそかに通じたのでした。この王女はゴーパーラカが臂力に物言わせて奪い去り、贈物として王妃に贈った女でしたが、王妃はその名をマンジュリカーと改めて、美の大海から現われたラクシュミー（美の女神）の化身のような彼女を人の眼から隠していたのでした。王はヴァサンタカと一緒に散歩をしていましたときに彼女をみとめ、遊苑の中の蔓に蔽われた四阿でガンダルヴァ式によってひそかに通じたのでありました。木蔭にかくれていましたヴァーサヴァダッターはそれを見て怒り、ヴァサンタカを連行させて捕縛しました。そこで、王は王妃の親友で、彼女の父の宮廷から隨行してきていましたサームクリティヤーヤニーという尼僧に縋ってとりなして貰いました。彼女が王妃をなだめましたので王妃も許し、バンドゥマティーを王の妃妾の一人にしました。貞淑な婦人の心はまことに優しいからです。そこで、王妃はヴァサンタカの縛を解きました。彼は王妃の前に伺候して、笑いながら彼女に

「王妃さま、バンドゥマティーはなるほどあなたさまのお心を損じましたけれど、わたしはあなたさまに何をしましたでしょうか。あなたさまは毒蛇に憤慨せられて、無毒の水蛇を殺すというものです。」

と言いましたので、王妃は好奇心を起して、

「その比喩をわたしに説明して頂きたい。」

と、ヴァサンタカに求めましたので、彼は言葉をつづけて、次の物語をしました。

〔毒蛇に憤慨して無毒の水蛇を殺そうとしたルルの物語〕

　むかし、ルルという聖仙の子が思いのままに諸國を遍歴していましたとき、素晴らしく美しい娘を見ました。彼女は天女メーナカーとヴィディヤーダラ族の一人の男との間に生れた娘で、ストゥーラケーシャ仙が自分の隱棲處で育てたのでした。彼女はプラマドゥヴァラーといい、ルルは彼女を一目見て彼女に心を奪われてしまいましたので、ストゥーラケーシャ仙の許に赴いて彼女との結婚を懇願しました。ストゥーラケーシャはこの娘を彼と婚約させました。そして、結婚式が間近にせまりましたとき、突然に彼女を毒蛇が嚙みました。ルルは絶望しましたが、そのとき彼は

「婆羅門よ、壽命の終りたる彼女に汝の壽命の半分を與えて、彼女を生きかえらせよ。」

という天上の聲を聞きました。この言葉を聞きますと、彼は彼女に自分の壽命の半分を與え、彼女が蘇生しますと、直ちに彼女と結婚しました。そこで、蛇に對して怒をもちましたルルはいつも蛇を見るたびに

「こいつらがわたしの妻を噛んだのだ。」

と、どの蛇も殺したのでした。あるとき、彼が無毒の水蛇を殺そうとしますと、その水蛇は人間の言葉で彼に申しました。

「婆羅門よ、毒蛇に憤慨しているあなたが何故に無毒の水蛇を殺されるのですか。あなたの奥さんを咬んだのは毒蛇で、毒蛇と水蛇とは別種です。彼等はすべて有毒ですが、水蛇は無毒なのです。」

この言葉を聞きまして、彼がその返事に

「友よ、あなたは一體誰ですか。」

と言いますと、その水蛇は

「婆羅門よ、わたしは呪詛のためにこの境遇に墜された聖仙です。わたしにかけられたこの呪詛はあなたと話をするとき終ることになっていました。」

と言って、姿を消しました。その後、ルルは決して水蛇を殺しませんでした。

「王妃さま、わたしが喩え話で『あなたさまは毒蛇に憤慨せられて無毒の水蛇を殺すというものです。』と申上げたのはこのことなのです。」

ヴァサンタカがこのように機智と諧謔に富んだ言葉を述べおわりますと、夫の側にいましたヴァーサヴァダッターは彼に満足しました。好色なヴァツァ國王ウダヤナはこのようにヴァサンタカが得意とする數々の面白く樂しい物語を用いて、王妃が怒りましたときには、いつも彼女の足許にひれ伏しながら、彼女の心を和げたのでした。この幸福な王の舌は美酒の香味をいつも味わい、彼の耳は琵琶の美しい音色をいつも樂しみ、彼の眼は愛妃の顔を絶えず眺めていました。

七

このようにして、ヴァーサヴァダッター妃をえて、かのヴァツァ王は漸く彼女との愛慾に溺れるようになりました。そして、國家の重責は夜となく晝となく宰相ヤウガンダラーヤナと將軍ルマンヴァットの擔うところとなりました。あるとき、宰相ヤウガンダラーヤナは心痛して、ルマンヴァットを夜間に自邸に招いて、言いました。

「わがヴァツァ王はパーンダヴァ族の出である。そして、全世界と都城ハスティナー・プラ*とは代々世襲によってその領有したもうたところである。しかるに、王は征服を望みたまわず、これらの凡てを捨て去られ、かくて領土は世界の片隅に限られるに至った。王は女と酒と狩獵にのみ心を奪われて、王國の經營に關する凡てをわれわれに委ねられている。われわれは、われわれの一存によって、王が世襲の權利を有せられる全世界を領有せられるように畫策すべきである。何となれば、われわれがこのように取りはからうとき、われわれは忠誠のまことを致し、宰相たるの責務を果すことになろう。萬事は智力によって成就せられる。まず、こういう話を聽かれ

よ。」

〔王の危急を救うた賢明な醫師の物語〕

昔、マハーセーナという王があった。そして、この王は遙かに威勢のある他王から襲撃せられた。そのとき、大臣たちは集って、王の治績をまもるために王を説いてその敵に貢物を贈らせた。しかし、王は貢物を贈った後、

「どうして自分は敵に屈服したのか」

と考えて、非常に心を惱ました。そして、この王はこの心痛のために體内に膿瘍が生ずるに至り、しかもこの膿瘍によって衰弱をきたして、まさに瀕死の状態となった。そのとき、一人の賢明な醫師がこの病は藥によっては治療しえられないと考えて、王にいつわって

「王さま、お妃さまが亡くなられました。」

と告げた。王はこの言葉をきくと急に卒倒してしまった。その衝動が非常に激しかったので、膿瘍は自然と潰えた。かくて、病の癒えた王は再び敵を征服して、妃とともに彼の冀っていた幸福をたのしんだ。

「この醫師がかく機智によって王のためを計ったように、われわれも王のためを計ろう。王の

ために、われわれは世界を征服しよう。さて、この場合、われわれの唯一の敵はマガダ國王*プラディヨータである。何となれば、彼は常にわれわれの背後を襲う敵である。そこで、われわれはかの王が掌中の寶といとしむ王女パドマーヴァティー姫をわれわれのヴァッツァ王の妃に懇請しよう。そして、計略を廻らして、われわれはヴァーサヴァダッターを何處かに隱し、宮殿に火を放って、お妃は燒死したと諸方に言いふらそう。そうしなければ、マガダ王は姫をわが王に嫁がせないからである。と言うのは、嘗て私がかの王にそのように懇請したとき、彼は『私は娘を自分自身よりも愛している故に、ヴァッツァ王には嫁がせない。それに、ヴァッツァ王はヴァーサヴァダッターに愛著しているから』と、答えた。それに、お妃が生きていられるかぎり、ヴァッツァ王は他の誰とも結婚せられないであろう。しかし、お妃が燒死せられたという噂がひろがれば、萬事うまく運ぶであろう。そして、パドマーヴァティー妃がえられるならば、マガダ王はわが姻戚となり、背後を脅かすこともなくなり、そしてわが同盟國となる。かくして、われわれは東方の征服に軍を進め、更にその他の方面に順次に進出することが出來よう。このようにして、ヴァツァ王のために全土を贏ちえよう。われわれが努力しさえすれば、王は嘗て天上の聲が宣べたとおりに世界を統治するに至るであろう。」

大宰相ヤウガンダラーヤナからこの言葉をききますと、ルマンヴァットはその計畫が餘りにも向うみずなのを怖れて、彼に言いました。

「パドマーヴァティー姫をうるために計略をめぐらすとしても、それが他日われわれの破滅と

なるやも知れぬ。今の場合、こういう話がある。聴きなさい。」

〔偽善者であった苦行者の物語〕

ガンジス河の岸に、マーカンディカー*という都市がある。その都市に、むかし、無言の戒行をまもる或る苦行者がいた。彼は數多くの弟子に取卷かれて、神殿の境内にある庵室に住み、乞食して暮していた。あるとき、食物を乞うために或る商人の家に這入っていった。そのとき、彼は施しの食物を持って出てきた美しい娘を見た。この悪者はこの世にも稀な美しい娘を見ると、途端に情慾の虜となって、思わず「ハー、ハー、アー」と叫んだ。その聲を主人の商人が聞いた。この苦行者はその施物を受取ると、自分の住居にかえっていったが、商人は驚いてひそかに彼のところに行って、

「何故、今日、あなたは突然に無言の戒行を捨てて、ものを言ったのか。」

と尋ねた。その言葉をきくと、その苦行者はかの商人にこのように答えた。

「貴方の娘さんには不吉の相が現われている。貴方が娘さんを嫁がされるならば、貴方は必ずや妻子ともども破滅するであろう。貴方は私の熱烈な信者なので、私は娘さんを見て吃驚したのです。それで、貴方のために私は無言の行を破って、あのように言ったのです。ですから、貴方は娘さんを夜間に籠に入れ、籠の上には燈火を置いてガンジス河に流しなさい。」

商人は「では、そう致します。」と言って家に歸り、恐怖の念から夜になると萬事言われたとおりにした。まこと、臆病というものは無思慮なものである。

さて、苦行者はその頃自分の弟子たちに

「ガンジス河へ行け。そして、河中を流れているものを探せ。上側に燈火の置いてある籠を見つけたならば、それを祕かに此處に運べ。若しお前たちが籠の中に聲がするのを聞いても、決して開けてはならない。」

と言いつけた。彼等は「そう致します。」と言って出かけたが、彼等がガンジス河に行き着かないうちに、或る王子がたまたま水浴をするためにその河に行った。商人が投げこんだ籠を、その上に燈火があったので彼は見つけ、從者にそれを引き上げさせ、好奇心に驅られて直ぐに開いて見た。そして、その中にあの心を魅惑するような美しい娘がいるのを見て、彼はすぐさま彼女とガーンダルヴァ式の結婚をした。しかも、彼は籠の中に怖ろしい猿を入れ、以前の通りにその上に燈火を置いてガンジス河に流した。

さて、王子がこの寶石のような娘を連れて立去ると、かの苦行者の弟子たちが籠を探しにやって來た。彼等は籠を見つけて引き上げ、それを庵室に持って歸った。すると、苦行者は喜んで、彼等に

「私はこれを階上に持って上り、獨りで呪いを行うゆえ、お前たちは今夜は靜かに寢むがよい。」

と語った。彼はこう言って、その籠を庵室の階上に持って上り、あの商人の娘を見ようとしてそれを開いた。すると、彼の不倫な行爲の權化とも言うべき怖ろしい姿の猿が跳びだしてきて、彼に跳びかかり、あたかも熟練した刑吏が罪人の鼻や耳を削ぐように、歯で彼の鼻をくいきり、爪で彼の耳を引きちぎった。散々な目に遭った苦行者は階下に轉げ落ちた。彼の弟子たちは彼を見て、笑いをおさえることが出來なかった。そして、翌朝、その凡てを知って、町の人は皆嘲り笑った。かの商人は大いに喜んだが、彼にもまして彼の娘は好い夫をえてうれしかった。

「このように、この苦行者は自ら嘲笑を招いたが、われわれも策略をめぐらして、しかも失敗したときには必ずや嘲けられよう。それに、王とヴァーサヴァダッターを引き離すことは極めて困難である。」

ルマンヴァットがこのように言うのを聴いて、ヤウガンダラーヤナは答えました。

「このようにするのでなければ、われわれの計畫は決して成就するものではない。しかも、われわれがこの計畫を實行しないならば、逸樂に耽るわが王は現在の領土をさえも失うであろう。また、われわれが今日までにかちえた政治家としての名聲も汚されるであろうし、われわれは主君に忠誠を盡す人間とは言われなくなるであろう。何故なれば、王が自ら經綸して成功したときには大臣は王の智慧の道具と考えられて、その成功・不成功に特に責任を問われることはないであろうが、王が大臣に經綸を委ねているときには、その目的を成就させるのは大臣の智謀によるものであり、大臣に手腕のないときには王者の繁榮は永遠に去ってしまうからである。しかし、若し貴方がお妃の父君チャンダ・マハーセーナ王を怖れているとすれば、かの王も、太子も、またお妃も、『わたしの言葉に從う』と仰せられている。」

大膽不敵な人々の中でも最も豪膽なヤウガンダラーヤナはこのように言いましたが、ルマンヴァットはなおも心中に不測の失敗を怖れて、彼に再び言いました。

「聰明な貴公子でさえも愛しい女との別離には心を傷ませるものである。ましてわがヴァツァ王に於いてはなおさらのことである。こんな話がある。聽きなさい。」

〔戀の焔に燒かれて死んだデーヴァセーナ王の物語〕

むかし、デーヴァセーナという王がいた。聰明のきこえ高い王で、シュラーヴァスティー*が彼の都城であった。その都に非常に裕福な一人の商人がいて、彼にまことならぶ者のない程に美しい娘が生れた。この娘はウンマーディニー*という名で知られるに至ったが、それはこの娘の容色を見た人は誰でも氣が觸れたからである。父の商人は

「わたしは娘を王さまに話さないで誰にも嫁がせてはならない。さもなくば、王さまは激怒せられるだろう。」

と考えて、デーヴァセーナ王のところへ伺候して

「王さま、わたしに寶といとしむ娘があります。若しお目にとまりますならば、何卒お召し下さい。」

と申上げた。王はその言葉を聞くと、信任深い大臣である婆羅門たちに

「行って、その娘が吉祥の相を有するか否かをしらべよ。」

と命じた。婆羅門たちは

「御意。」

と答え、行って商人の娘を見た。ウンマーディニーを見ると、彼等は途端に惚れこみ、全く惱殺されてしまった。

「王がこの娘を召されるならば、王はこの娘に溺れて國事を忘れられるであろう。そして、萬事はお終いだ。」

と、我にかえった婆羅門たちは互いに相談をして

「あの娘は不吉の相を有しています。」

と、偽りの復命をした。

かくて、商人はウンマーディニーが王からことわられたので、王に對して心中に憤りを抱くに至った彼女を王の將軍に嫁がせた。

さて、ある日、王が邸前の道を通るのを知って、彼女は邸宅の露臺に上って、自分の容色を王に誇示した。王は愛の神（カーマ）が用いる世間惱殺の薬にも似た彼女を見た瞬間に、精神が錯亂し

たかのように思われた。王は宮殿に還御して、彼女が嘗て召さなかった娘であることを知り、悲しみ嘆き、遂に激しい熱病にかかった。彼女の夫である將軍は王に

「彼女は奴隷です。他人の正妻ではありませぬ。お召しになられるのでありますれば、私はあの女を捨てて神殿に仕えさせます。そのとき、王さまには御意のままになされませ。」

と申上げて、王を熱心に慰めたが、王はこのように答えた。

「余は人妻を召しはせぬ。若し汝があの女を捨てるなれば、汝は人としての道を踏みはずすであろう。そして、汝は余の手によって所罰せられよう。」

この言葉を聞いて、他の大臣たちは一言も言いえなかった。かの王は戀の焰に燒き燼されて次第に弱り、遂に死んで仕舞った。

「この王は心猛き方ではあったが、ウンマーディニーを失って、このように亡くなった。ヴァーサヴァダッターを失ったとしたら、ヴァツァ王はどんなことになるであろうか。」

ルマンヴァットからこの言葉を聞きますと、ヤウガンダラーヤナは再び言いました。

「國事に專念する王者には、悲痛は堪えられるものである。ラーヴァナ*を仆すために干戈に訴えねばならなくなって、神々がラーマに凡てを委ねたとき、彼は妃シーターとの別離の悲しみを堪えたではないか。」

この言葉を聞きますと、ルマンヴァットは再び言いました。

「ラーマのごときはまこと神である。彼等の心は一切に堪えることが出來る。併し、人間にとっては堪えられないことである。」

と言って、ルマンヴァットは心配のほどを顔に浮ばせるのでした。しかし、冷静な決斷力の海にも譬うべき賢明なヤウガンダラーヤナは言いました。

「私は凡ての計畫を取計った。王者の經綸にはこのような手段も必要である。こういう話も聴きなさい。」

〔大臣の智謀によって國を回復したプニヤセーナ王の物語〕

むかし、ウッジャイニーにプニヤセーナという王があった。あるとき、有力な他王に襲撃せられた。賢明な彼の大臣たちは敵のうち破りがたいことを知って、プニヤセーナ王をかくまい、偽って、王が死去したという噂を諸方に擴がらせ、しかも他人の屍を王者に相應わしい儀式を營んで燒いた。そして、使者の口を通じて、「われわれは現在王を有していないから、來てわれわれの王となって貰いたい。」と、敵王に申入れた。敵王は喜んで、それに同意した。そこで、彼等は集って、兵をあつめ、敵王の陣を次々にうち破った。敵軍を滅すと、彼等はプニヤセーナ王を連れ出してきて勢力を回復し、敵王を殺したのである。

「このようなことは王事には屢〻見られることである。從って、われわれは王妃が燒死したという噂を擴らせて、堅い決心をもってこのことを斷行しよう。」

ヤウガンダラーヤナからこの言葉を聞きますと、ルマンヴァットも遂に決心して

「それではお妃の敬愛せられる兄王子ゴーパーラカに使をだして來て貰って相談し、彼と萬事手落なく手筈をきめよう。」

と言いましたので、ヤウガンダラーヤナは

「そう、しよう。」

と答えました。そして、ルマンヴァットが信頼せられて一切を取計うべき旨の決定をしました。

その翌日、この善謀の二人の大臣は、ヴァーサヴァダッターが會いたがっているという口實で、ゴーパーラカを連れてくるために使をだしました。ゴーパーラカは丁度急用のためにそれ以前にウッジャイニーを出發していましたので、使者の願を聴くとすぐ到着しました。彼は二人の大臣にとってあたかも待ち設けていた祭典の化身のように思われました。王子が到着しましたその日の夜、ヤウガンダラーヤナはルマンヴァットと一緒にゴーパーラカを自分の邸に招いて、ルマンヴァットと豫め相談していた自分の計畫を話しました。ゴーパーラカはそれが妹に悲しみを與えることは知っていましたが、ヴァッツァ王のためを思って、その計畫に贊成しました。まこと、勝れた人々の言葉は實行すべきことであるからです。

そのとき、ルマンヴァットが

「これで萬事うまく相談はまとまったが、お妃さまが燒死されたと聞いてヴァツァ王は生命を捨てようとせられよう。それをどうしてとめるか、よく考えねばなるまい。勝れた手段が好都合に運ばれるとしても、國家統治の基本策は不幸を未然に回避することである。」

と言いました。すると、萬端に至るまで考慮していましたヤウガンダラーヤナは

「その點に心配はない。ヴァーサヴァダッターさまはゴーパーラカ太子の妹姫で、太子にとっては御自分の命よりも愛しい方である。ヴァーサヴァダッターさまが燒死せられたと聞かれても、太子がさほど悲しんでいられないのを見られたならば、ヴァツァ王は『いずれにせよ、妃は生きている』とお察しになって、平靜になられるであろう。それに、王は氣性勝れた方である。パドマーヴァティー姫との結婚がすみやかに行われよう。そのときはお妃をすぐにお連れすることが出來よう。」

と答えましたので、彼等三人は更に相談をしました。

「ラーヴァーナカ*はマガダ國に近い國境の土地であるから、われわれは王と王妃と一緒に其處に行くという策をとろう。それに、あの土地は狩獵に好適の土地であるから、王は屢〻宮殿を離れられるであろう。そのとき内宮に火を放って、計畫通りに事を運ぼう。そして、計略を用いて、お妃をパドマーヴァティー姫の宮殿に連れてゆき、パドマーヴァティー姫をお妃が匿われている間の貞節の證人にしよう。」

その夜彼等はこのように相談をしまして、翌朝ヤウガンダラーヤナを先頭にして王宮に參入しました。そのとき、ルマンヴァットが

「陛下、われわれが前にラーヴァーナカに參りましてから、かなり經ちます。あそこは景勝の土地であるばかりでなく、狩獵に好適の土地であります。また、馬によい青草をたべさすことも出來ます。それに、あの土地はマガダ國に近いので、マガダ國王はあの土地全體に垂涎しています。從って、われわれの遊び樂しむためのみではなく、あの土地を守るためにも參りましょう。」

と言上しました。この言葉を聞きますと、ヴァツァ王はいつも逸樂を心がけていましたので、ヴァーサヴァダッターと一緒にラーヴァーナカに行くことにしました。

その次の日、行幸が決定せられ、占星者が出發に吉祥な時間を占い定めたとき、突然にナーラダ仙が王を訪れてきました。彼は輝きであたりを照らし、あたかも子孫を嘉するために中天から降臨して、あたりの人々の目を喜ばしめる月輪のようでありました。賓客としての挨拶を受けました聖仙は、前にひざまずく王に親しく天國に咲くパーリジャータ樹*の花環を授けました。仙はまた彼を鄭重にもてなしたヴァーサヴァダッター妃に、彼女は愛の神の分身ともいうべき王子を得て、その王子はヴィディヤーダラ族の王となるであろう、と祝福の言葉を述べました。そして、ナーラダ仙はヤウガンダラーヤナの侍立しているところでヴァツァ王に

「王よ、ヴァーサヴァダッターを見て、奇しくも余は思い出したことがある。古昔、そなたの祖先にユディシュティラ*並びにその四人の兄弟があった。彼等五人に、ドラウパディー*という妃がひとりいたのみであった。彼女はヴァーサヴァダッターのように、美しさに於いては他になら

ぶ者がなかった。そこで、彼女の美しさが災いの基となるのを怖れて、余は彼等に『そなたたちは嫉妬を愼まねばならぬ。嫉妬はまこと災いの種子である。このような話を聴くがよい。』と言ったことがある。それを今そなたに話して聞かせよう。」

〔戀の虜となったスンダとウパスンダの物語〕

スンダとウパスンダという二人の兄弟がいた。彼等二人はアスラで、その膂力は三界を凌いでいたので、誰も彼等をうち破るをえなかった。梵天は彼等を滅ぼそうと思って、ヴィシュヴァカルマン（造一切者、天上の技術者にして藝術家）に命じてティロッタマーという天女をつくらしめた。彼女が歩き廻っているときにいつも彼女の美しさを見ようとして、シヴァ天さえ四つの顔を有するに至ったというほどに、彼女は美しかった。そして、彼女は梵天の命令によりカイラーサの遊園に遊んでいたスンダとウパスンダを誘惑するために、彼等のところへ行った。二人のアスラは彼女を見て戀の虜となり、彼女の兩腕を同時に掴んだ。彼等は互いに彼女を引張りあったので忽ちに息が喘ぎ、そのために二人は破滅してしまった。女という人目を惹くものは、如何なる人にも破滅の原因となるものである。

「『そなたたちは多勢でドラウパディーただひとりを愛している。従って、そなたたちは間違

っても彼女を爭ってはならぬ。そなたたちは余の忠告に從って、彼女については次の掟をまもるがよい。即ち、彼女が長兄と一緒にいるときは、末弟は彼女を母と思うべきである。また、彼女が末弟といるときには、長兄は彼女を嫁と思うべきである。』と、余は彼等に言ったのであるが、王よ、そなたの祖先の者たちは余の言葉を遵奉して互いに睦じく心をあわせたのである。彼等は余の親友であった。余が今玆にそなたに會いに來たのはその友情からである。ヴァッツァ王よ、余はそなたに忠告しよう。聽くがよい。そなたは彼等が余の忠言に從ったごとく、そなたの大臣たちの言葉に從うべきである。そうすれば、遠からずそなたは大成功をおさめるであろう。暫くの間は悲しみを忍ばねばならぬやも知れぬ。しかし、それは必ず結果に於いては幸いとなるものゆえ、その際そなたは決して悲しみすぎてはならない。」

ナーラダ仙は未來の繁榮を巧みに諷してヴァッツァ王に告げ知らせた後、たちまちに消えうせました。ヤウガンダラーヤナを始め大臣たちは、この大仙人の言葉によって、彼等の計畫が成功することを知り、それを遂行しようと非常に熱望するに至りました。

八

そこで、ヤウガンダラーヤナたちは、前に述べた策謀に從って、愛妃とともにヴァッツァ王をラーヴァーナカに案内しました。王がその地に到着しましたとき、軍勢のあげる歡聲はあたかも大

臣たちの目的が成就することを告げるかのようでありました。マガダ王はヴァッツァ王が多くの扈從をともなってその地に到着したことを聞きますと、來襲を豫期しておののきました。しかし、賢明な彼はヤウガンダラーヤナの許に使節を派遣しました。この大臣は義務を知っている人でありましたので、使節を快く引見しました。ヴァッツァ王はというと、その地に滯留すると毎日毎日狩獵のために廣い森林を驅けまわっていました。

ある日、王が狩獵に出御していましたときに、賢明なヤウガンダラーヤナは相談をしてゴーパーラカを連れてルマンヴァット及びヴァサンタカと一緒に、ヴァーサヴァダッター妃の許にひそかに伺候しました。彼はそこで淑かな彼女に、王の覇業を成就せしめるために、色々と苦衷を述べました。彼女は既に兄ゴーパーラカから凡てのことを聞き知っていましたので、王と暫くでも別れていることは悲しいことでありましたけれども、その申出に同意しました。夫に貞節を捧げる貞淑な女として、夫のために堪えられないことがありましょうか。そこで、世故に長けたヤウガンダラーヤナは、彼女の姿を變える祈頌を念じて、彼女に婆羅門の姿をさせました。また、ヴァサンタカを片眼の婆羅門の若者に變裝させ、しかも自らも同じく老婆羅門の姿に變裝しました。このような姿に身をやつした王妃を連れて、志の高いヤウガンダラーヤナはヴァサンカとともに悠々とマガダ國にむかって出發しました。このようにしてヴァーサヴァダッターは自らの家を出ましたが、身體は道を歩んではいましても、心はいつも夫の許に飛んでいっていました。

ヴァーサヴァダッターたちが出發しますと、ルマンヴァットは彼女の宮殿に火を放って、

「嗚呼、お妃さまとヴァサンタカは燒死した。」

と、大聲で叫びました。すると、其處に、火焔と同時に悲しみ嘆く聲があがりました。火焔は次第におさまりましたが、泣き悲しむ聲はなかなかにおさまりませんでした。

さて、ヤウガンダラーヤナはヴァーサヴァダッター妃とヴァサンタカと一緒にマガダ國王の都城に到着しました。彼等は王女パドマーヴァティー姫が遊苑にいるのを見まして、近づいてゆきますと、彼等が王女に近づくのを警護の者たちが阻みました。パドマーヴァティー姫は婆羅門の姿をしましたヴァーサヴァダッター妃を見ると、一目見ただけで親愛の情が湧いてきました。王女は警護の者たちを退けて、婆羅門の姿をしたヤウガンダラーヤナを傍に案内させました。そして、彼女が

「婆羅門さま、貴方が連れていられる方は誰方ですか。また、貴方は何故に此處に來られましたか。」

と尋ねましたので、彼は彼女に答えました。

「王女さま、この女は私の妹で、アーヴァンティカーと申します。この妹の夫は惡業に溺れ、この女を捨てて何處かに行ってしまいました。それで、私がその男を探しに行って參ります間、お姫さま、暫くの間この女を貴女さまの御手許において下さるようお願いしとう存じます。そして、この片眼の若者も兄弟でございますが、この女がひとりになって歎き悲しみませぬよう、ここに留まらさして頂きとう存じます。」

ヤウガンダラーヤナが王女にこのように申し述べますと、王女は彼の申出を許しましたので、彼は王妃をのこして急いでラーヴァーナカに歸りました。そこで、パドマーヴァティーはアーヴァンティカーという名で呼ばれることになりましたヴァーサヴァダッターと片眼の若者の姿で彼女に附添うたヴァサンタカを連れて、彼女たちを親切にあつかい、愛情濃かにもてなして、自らの華麗な宮殿に歸りました。ヴァーサヴァダッターがパトマーヴァティー姫の宮殿に這入りますと、壁畫にラーマ物語のシーター妃の姿が描かれているのを見まして、自分の悲しみを堪え忍ぶことが出來ました。

パドマーヴァティーはヴァーサヴァダッターの容姿といい、彼女のしとやかさといい、彼女の坐ったり食事したりするさまの優雅さといい、また蓮華の香のように芳ばしい體臭といい、凡てがひときわ勝れていることから、彼女が高貴の生れであることがわかりましたので、自分と同じ贅澤な生活をさせて、彼女の望みのままにさせました。そして、

「あの方はたしかに身を隠してここに居られるのに相違ない。ヴィラータ*王の宮殿に隠れたあのドラウパディーではないのだろうか。」

とさえ考えました。ヴァーサヴァダッターは以前にヴァッツァ王から教えられました不凋花の花環と眉飾を造って、敬愛のしるしに姫に差上げました。パドマーヴァティーの母は彼女がこれらの飾をつけているのを見まして、この花環と眉飾を誰が造ったのかとひそかに尋ねましたので、パドマーヴァティーは

「妾の宮殿にアーヴァンティカーという方が住んでいます。その方が造ってくれたのです。」

と答えました。この言葉を聞きますと、パドマーヴァティーの母は

「姫、その方にこのような知識があるとすれば、その方はきっと人間ではありません。鬼神です。鬼神や仙人が善良な人々を迷わすために、こういう人々の家によく滯在するものです。姫、こういう話をお聽きなさい。」

〔ドゥルヴァーサス仙に苦しめられたクンティー姫の物語〕

むかし、クンティボージャという王がありました。彼の王宮に、人を迷わすことが非常に好きなドゥルヴァーサスという仙人が滯在していました。王は仙人をもてなすように王女クンティーに命じましたので、王女はまめまめしく仙人に給仕しました。あるとき、この仙人は王女をためそうと思って、王女に

「私が水浴している間に、速かに、牛乳と砂糖のはいった御飯を煮いて貰いたい。水浴して歸って、すぐ頂戴致したい。」

と言いつけました。彼は急いで水浴して、それを食べようと歸ってきました。クンティーはその食物の一杯になった器を彼の前にもってきました。その器は煮えた食物のために熱くなっていまして、クンティーが彼の食事の間それを持っていることが出來ないと考えて、彼女の背に眼を注

ぎました。彼女は仙人の意中を覺って、器を自分の背に載せました。仙人は心ゆくばかりそれを食べましたが、クンティーの背はそのために灼けただれてしまいました。彼女は火傷を負いましたけれども、少しも姿勢をくずさずにいましたので、仙人は喜んで、食後彼女に贈物を惠みました。

「この仙人はこのように其處に滯在していたのですが、同じように貴女の宮殿に滯在しているアーヴァンティカーもきっと普通の人間でない誰かです。ですから、貴女はあの方を心から慰めるようになさい。」

と言いました。母の口からこの言葉を聞きますと、パドマーヴァティーは姿をかえているヴァーサヴァダッターを一層心してもてなしました。ヴァーサヴァダッターは夫と別れて、あたかも夜間に花を閉じた蓮華のように、別居の悲しみに顔色が勝れませんでした。それでも、ヴァサンタカが演ずる子供らしい數々の可笑しい仕草に屢〻顏をほころばせるのでした。

話かわって、ヴァツァ王は遠くまで狩獵に出かけて、その日の夕方遲くラーヴァーナカに歸還しました。そして、內宮が火事のために灰燼に歸したのを見ただけでなく、王妃がヴァサンタカと一緒に燒死したことを大臣たちから聞かされました。そのことを聞きました途端に、彼は氣を失って地上に倒れてしまいました。そのさまはあたかも悲痛の念を忘れ去ろうと欲しているかのようでありました。彼はすぐ正氣を取戻しましたが、彼の心の中には悲しみの焰が燃えさかり、

心に刻まれている王妃の姿を燒きつくそうとする火焰にさいなまれているかのようでありました。

王は悲しみ嘆いて自殺のことのみを考えましたが、不圖ナーラダ仙の豫言を思い出して考えました。

「妃からヴィディヤーダラ族を統治する王子が生れるであろう。これはナーラダ仙が余に語った言葉で、僞りであるべき筈はない。更に、かの仙は余が暫く悲しみに堪えねばならぬと告げた。それにゴーパーラカの悲しみは妹を失ったというにしては、それほどでない。ヤウガンダラーヤナたちもそれほど悲しんではいない。いずれにしても、妃は生きていると思われる。大臣たちはこれで何等かの政治的手腕を揮おうとしているのであろう。だから、余はいつかきっと妃と再會できるであろう。兎に角、この場合、結末を見てみよう。」

と、王は思案して、大臣たちに慰められるままに、氣を取直しました。ゴーパーラカは直ちに誰にも知られずに祕密の使を妹の許に遣わし、事態を正しく報らせて彼女を慰めました。ラーヴァーナカに於ける狀勢がこのようでありましたので、その地にいましたマガダ王の密偵は王の許に還って、凡てを報告しました。この報告を聞きますと、王は嘗てヴァツァ王の大臣から懇請せられた王女パドマーヴァティーをヴァツァ王に嫁がせようと焦りました。そこで、彼はヴァツァ王並びにヤウガンダラーヤナの許に使節を送り、このことに關して自分の希望するところを申述べさせました。ヴァツァ王はヤウガンダラーヤナの助言によってこの申込を承諾しましたが、これが恐らく妃がかくまわれた理由に相違ないと考えました。

そこで、ヤウガンダラーヤナはすぐさま吉祥の日をたしかめて、マガダ國王に答禮の使節を遣わし、

「貴方の御申出は委細われわれの承諾申上げるところであります。今日より七日目に、ヴァツァ王はパドマーヴァティー姫と御結婚のために貴宮廷に到着せられるでありましょう。王はこれによってヴァーサヴァダッター妃のことを忘れられることでありましょう。」

との口上を披露させました。使節はマガダ王の許に行って、命ぜられた通り申述べました。マガダ王は非常に喜んで使節を引見しました。

そこで、マガダ王は王女に對する愛情、自身の希望並びに自分の財産に相應わしい婚禮の祭典の準備を進めました。また、パドマーヴァティーも望み通りの夫を得ることになりましたので非常にうれしく思いました。しかし、ヴァーサヴァダッターはそのことを聞くと心のつぶれる思いでありました。この報せを聞きましたとき、彼女は顔色を變えましたけれども、姿を變えていましたために誰にも覺られませんでした。

「このようにして敵は盟友となるのです。王さまのお心が貴女を離れることは決してありません。」

というヴァサンタカの言葉は、親しい幼友達の言葉のように、彼女に安心と勇氣を與えました。

そこで、愼み深く分別のある彼女はパドマーヴァティーの結婚式のために神々しいばかりに美しい不凋花の花環と眉飾とを再びつくりました。

こうして、七日目の當日になると、ヴァツァ王は結婚のために大臣たちを伴ない軍勢を率いてマガダ國に到着しました。ヴァーサヴァダッター妃と別れている王があの妃を何とかして取戻したいと願わないのであったならば、どうして彼はこのような企てを敢てなしえたでありましょうか。マガダ國王は喜んで急ぎヴァツァ王を出迎えました。そのさまは大海が昇りゆく月を迎えに進みゆくようでありました。

ヴァツァ王がマガダ國王の都城に這入りますと、到るところに市民の心は歡喜にどよめきました。ヴァツァ王は王妃との別離のために憔悴していましたけれども、町の女たちは愛妃ラティーと別離した愛の神(カーマ)にも見紛うばかりの彼を惚れ惚れと仰ぎ見るのでした。

ヴァツァ王はマガダ國王の宮殿に這入って、結婚式の行われる大廣間に進みました。そこには夫と未だ死別していない婦人が滿堂に溢れていました。その大廣間に這入って、王は結婚の裝いを凝らして滿月の月輪にも勝って輝くばかりの顔容のパドマーヴァティー姫を見ました。そして、彼だけしか造りえないような花環と眉飾をしているのを見まして、彼女がそれらを何處から手に入れたのか、と王はいぶかしく思いました。彼は壇上に登ってパドマーヴァティーの手を把りましたが、これこそ實に彼が世界の貢物を受取る第一歩でありました。壇上に燃える聖火の煙はヴァーサヴァダッターを愛する彼がこの光景を見るに堪えられないと察するかのように、彼の眼を涙で曇らせるのでした。聖火を遶る儀式のときにパドマーヴァティーは顔をあからめましたが、それは新夫の心の中を知って怒っているかのようでありました。

結婚の式典が終ると、ヴァッァ王は新婦の手を離しました。しかし、ヴァーサヴァダッターのことは瞬時たりとも心から離しませんでした。マガダ王はヴァッァ王に、あたかも大地がその凡ての寶石を奪われてしまったかと思われるほどに、夥多の寶石を贈りました。そして、ヤウガンダラーヤナはそのとき結婚の聖火を證としてマガダ王が彼の主君の脅威とならないように誓わせました。花環や飾がまき散らされ、勝れた樂人が音樂を奏で、美しい舞姫が踊るうちに、豪奢な大饗宴はすすめられました。その間、夫の繁榮を祈りつづけるヴァーサヴァダッターは、あたかも日中に於いては月の美しさが睡っているように、誰にも覺られませんでした。

ヴァッァ王がパドマーヴァティーを連れて内宮に這入りますと、世事に長けたヤウガンダラーヤナは、そこで王がヴァーサヴァダッター妃を發見して策謀が失敗してしまうのを怖れて、マガダ國王に

「ヴァッァ王は今直ちにこの御殿を出發しなければなりません。」

と言いましたので、マガダ國王はそれを了承し、ヴァッァ王にその旨を告げさせました。ヴァッァ王もそれを承諾しました。

そこで、ヴァッァ王は扈從の者たちの飲食が終ると、新婦パドマーヴァティーを伴ない、大臣百官を從えて出發しました。そして、ヴァーサヴァダッターはパドマーヴァティーが提供した心持のよい車に乘り、彼女が命じた扈從を從えて、姿を變えたヴァサンタカを嚮導として、軍勢の後から祕かに隨行しました。ヴァッァ王は新婦をともなって遂にラーヴァーナカに到着し、自身

の營舍に這入りましたが、心はいつもヴァーサヴァダッター妃のことで一杯でした。ヴァーサヴァダッターもその後からこの地に着き、夜になってからゴーパーラカの宿所に這入り、その周圍には扈從の者たちを立たせてかためさせました。彼女は喜んで迎えてくれる兄のゴーパーラカ太子を見まして、涙を流しながら兄の頸に抱きつきました。太子もまた眼に一杯涙をためていました。丁度そのとき、以前の約束に忠實なヤウガンダラーヤナがルマンヴァットと一緒にやって來ました。王妃は彼等を喜んで迎え入れました。

さて、王妃が王との別離のために堪え忍ばなければならなかった悲しみをヤウガンダラーヤナが慰めていました間に、ヴァーサヴァダッターに扈從していました者たちがパドマーヴァティーのところへ行って

「王妃さま、アーヴァンティカーさまも到着されましたが、どうしたことかわれわれを退けられて、ゴーパーラカ太子さまのお館に入られました。」

と申上げました。パドマーヴァティーはこのことを聞きますと非常に愕いて、ヴァッァ王の面前で

「行って、『貴女は妾がお預りしている方です。何用あって、其處に居られるのですか。妾の居るところにお出でなさい。』と王妃が言っている、とアーヴァンティカーに傳えなさい。」

と、彼等に命じました。この言葉を聞きまして扈從の者たちが退去しますと、ヴァッァ王はパドマーヴァティーに祕かに彼女の着けている花環と眉飾は誰が造ったのかと尋ねました。

或る婆羅門が妾の家に預けていったアーヴァンティカーという婦人が造ったものだと答えました。

このことを聞きますとすぐ王はその婦人こそヴァーサヴァダッターに相違ないと考えて、ゴーパーラカの宿舎に急ぎました。その入口には扈従の者が立っていました。王が宿舎の中に這入りますと、そこにはヴァーサヴァダッター妃とゴーパーラカ太子と二人の大臣とヴァサンタカとがいました。王はそこに逃避の旅から歸ってきましたヴァーサヴァダッターの姿を見ました。彼女はあたかも月蝕から逃れた月輪のようでありました。すると、王は悲しみの毒のために氣を失って倒れてしまいました。ヴァーサヴァダッターの心にも動悸がきて、別離のために生色のなくなった四肢をふるわせながら、地上にくずおれました。そして、自分の行爲を責めながら泣きつづけました。こうして夫と妻とが悲しみ嘆いているのを見まして、ヤウガンダラーヤナの顔にも涙が流れました。

パドマーヴァティーはそういう場合に相應わしくない泣聲を聞いて、不思議に思ってその場へやって來ました。そして、王とヴァーサヴァダッター妃とのことがだんだんと判ってきまして、貰い涙にむせぶのでした。まこと、善良な婦人は愛情深く、心やさしいからであります。ヴァーサヴァダッターは泣きながら

「夫に悲しみしか與えることの出來ない妾の生命などどうなってもよい。」

と、たびたび言いました。そのとき、冷靜なヤウガンダラーヤナがヴァツァ王に

「王さま、貴方がマガダ國王の王女と結婚せられることによって貴方が大王となられることを

冀ったわたしが萬事をとり計ろうたのであります。王妃にはいささかの過もありませぬ。それに、王妃の御不在中の貞節のほどはこのパドマーヴァティーさまが證人です。」

と言いました。パドマーヴァティーも、もはや嫉妬の氣持など全くなくなり、

「この方の無實を證すためには妾は火の中にでも這入りましょう。」

と言いました。王も

「余こそ間違っていた。余のために妃はこの大きな悲しみを堪え忍んでくれたのだ。」

と言いましたが、ヴァーサヴァダッターは

「王さまのお心からお疑いを取除くためには、妾は火に這入らねばなりませぬ。」

と、堅く決心して言いました。そこで、有徳な人々の中で最も勝れた賢明なヤウガンダラーヤナは、口を漱ぎ、東方を向いて、清淨な聲で

「われこそ王のためを思う者であり、また王妃に汚れなければ、おお護世の神々よ、言葉を垂れたまえ。若し然らざれば、われは生命を捨てん。」

と言いました。彼がこう言い終ると、天から聲が聞えてきました。

「王よ、ヤウガンダラーヤナを大臣とする汝は幸いなり。前世に女神たりしヴァーサヴァダッターを妃とする汝は幸いなり。彼女に一點の汚れなし。」

と言うと、その聲は聞こえなくなりました。そこに居ました凡ての人々は、四方に轟くその聲を聞きますと、雨雲が初めて來て雷が鳴りはじめたときに長い間暑さに苦んだ孔雀が頸をのばして

喜ぶように、喜びにつつまれて思わず孔雀の眞似をしました。そして、王とゴーパーラカとはヤウガンダラーヤナの所行を賞讃しました。ヴァッァ王は全世界を掌中に收めたと考えました。
そして、王は、歡喜と安樂とが化身して訪れてきたかのように、彼と起居をともにすることによって彌ましに愛情濃かとなった一人の妃と一緒に、この上ない幸福を樂しみました。

九

そして、次の日、ヴァッァ王は近侍の者たちを遠ざけて、ヴァーサヴァダッター及びパドマーヴァティーと饗宴を開いていましたが、ヤウガンダラーヤナ、ゴーパーラカ、ルマンヴァット及びヴァサンタカの許に使を遣わして召集し、歎談しました。そのとき、王は愛妃との別離について耳を傾けて聴く一座の人々に次の物語をしました。

〔プルーラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語*〕

むかし、プルーラヴァスというヴィシュヌ神の敬虔な信者である王があった。彼は何の妨げもなく天界並びに地界を席卷した。あるとき、彼が神々の遊苑ナンダナを散歩していたとき、愛神カーマの第二の魅惑の武器であるウルヴァシーという天女が彼の姿に目をとめた。彼女は彼の姿

を見た途端に氣を失ってしまったので、彼女の友達のラムバーたちの臆病な心を驚かせた。かの王もまた彼女を見て、彼女が美の甘露の奔流であることを知ったが、彼女が天女で人間である彼にとっては彼女を抱擁することが不可能なので、渇望のために氣が遠くなりそうであった。すると、乳海の眞中に坐したまう全知の神ヴィシュヌは丁度伺候のために參殿した聖仙ナーラダに
「神仙よ、いまナンダナ苑に滯在するプルラヴァス王はウルヴァシーに心を奪われて、戀慕の情から、別れることが出來なくなったままでいる。それ故に、仙人よ、汝はインドラの許に行き、余の言葉を傳えて、ウルヴァシーが速かにかの王に與えられるようにせよ。」
と命じた。ヴィシュヌ神からこの命令を受けたナーラダは
「よろしゅう御座います」
と言って、嚮に述べた狀態のプルーラヴァスのところへ行って、王に告げた。
「王よ、立ち上りなさい。私は貴方のためにヴィシュヌ神から遣わされた者です。かの神に僞りのない誠を捧げる者たちの苦惱を、かの神は見るに忍びられないからです。」
ナーラダ仙はこのようにプルーラヴァスに告げて彼を慰め、彼を連れて神々の王（インドラ）のところへ行き、ヴィシュヌ神の命令を告げた。インドラはそれを恭しく承諾したので、仙人はウルヴァシーをプルーラヴァスに與えさせた。
ウルヴァシーをプルーラヴァスに與えたことは天界に住む者から生命を奪うものであったが、ウルヴァシーにとってはそれはまこと死人を甦えらす仙藥であった。そこで、プルーラヴァスは

彼女をともなって地界に歸ったが、彼女の姿は人間の眼に天界の花嫁の神々しい美しさを誇示するものであった。その後、ウルヴァシーとこの王の二人は互に睦みかわすまなざしの鎖に結びつけられたかのように、互に片時も離れることは出來なかった。

ある日、プルーラヴァスはインドラとダーナヴァ族（悪魔アスラの別名）との戰にインドラに援助のために招かれて天國に行った。その戰に於いてアスラ族の王マーヤーダラが殺されたので、インドラは大祝宴を催し、天女の群は踊を舞った。そのとき、師匠トゥムブルを介添としてラムバーがチャリタと稱する表情舞踊を踊るのを見て、プルーラヴァスは笑った。すると、ラムバーは

「人間よ、さては貴君はこの天界の踊を知っていなさいますね。」

と皮肉に言った。プルーラヴァスは

「ウルヴァシーと一緒に暮しているので、私は貴女方のお師匠トゥムブルさえ知らない踊を知っている。」

と答えた。この言葉を聞くと、トゥムブルは怒って、プルーラヴァスに

「汝がクリシュナ天*を宥める祭祀を行うまで、汝はウルヴァシーと別れるべし。」

という呪詛をかけた。この呪詛の言葉を聞くと、プルーラヴァスは急遽歸って、非時の雷のように怖ろしい、自分に振りかかった出來事をウルヴァシーに語った。すると、突如ガンダルヴァの群が王の知らぬうちに天から舞い下りて、ウルヴァシーを何處かに攫っていった。そこで、プルーラヴァスはこの不幸が呪詛によることを知って、バダリカー*の庵所に行ってヴィシュヌ神を宥

めるために苦行を行った。

しかし、ウルヴァシーはガンダルヴァ族の國に留められたが、愛する夫との別離を悲しんで、死んでいるかのように、ねむっているかのように、また繪に描かれた女のように、全く意識をなくしていた。それでも彼女は呪詛の終るのを期待して生きていたのであって、それは少しも不思議ではなかった。彼女はあたかも夜間には雄と別れていなければならない雌のチャクラヴァーカ鳥のようであった。プルーラヴァスは苦行によってヴィシュヌ神を宥め、ヴィシュヌ神が彼を嘉したもうたので、ガンダルヴァ群はウルヴァシーを彼にかえした。王は呪詛の終るとともに再び天女ウルヴァシーと會うをえて、地上に住みながらも天上の快樂を享受したのであった。

と、ヴァツァ王が話し終って口を閉じると、ウルヴァシーの夫に對する愛著の心ざしを聞きましたヴァーサヴァダッターは、長い間に亘って本意なくも夫との別離を堪え忍んだことを思いだして、顔にはじらいの色を浮べるのでした。

ヤウガンダラーヤナは王妃が王に暗に諷刺されてはじらったのを見まして、彼女にそんな思いをさせないように、王に向って言いました。

「陛下、こういうお話をお聴きになったことがありませぬならば、私のお話をどうかお聴き下さい。」

〔大臣の謀で生命の助かったヴィヒタセーナ王の物語〕

この世にティミラー*という都城があり、吉祥の女神（シュリー）の住處でありました。この都城にヴィヒタセーナという有名な王がいました。彼に地上の女神ともいうべきテージョーヴァティーという妃がありました。この王はいつも王妃の頸に抱きついていまして、彼女の抱擁に身を委ね、暫時も鎧を身にまとうに堪えられませんでした。あるとき、王は長引く熱病に罹り、日ましに衰弱してゆきましたので、醫者は王に王妃との交りを禁止しました。ところが、妃との交りを絶たれると、彼の心の中に藥も手當も何の效果もない病が生じました。醫者は大臣に

「王の病氣は恐怖か悲しみの發作で治るかも知れない。」

と、ひそかに言いました。大臣たちは

「王は、嘗て大蛇が頸筋に落ちかかったときにも慄えず、また敵軍が内宮に侵入したときにも恐れなかった、あの勇敢な王にどうしてわれわれは恐怖の念を起しえようか。」

と考えて、王妃と相談して、王妃を匿し、王に

「王妃は亡くなられた。」

と告げました。王が非常な悲しみにさいなまれていました間に、痛心の王の心の病は潰えてしまいました。王の病苦が癒えましたとき、大臣たちは第二の幸福の女神のような王妃を王にかえしました。

王は王妃が身を隠したことに怒ることなく、むしろ甦生の恩人として彼女を大切にしました。

この物語の後に、ヤウガンダラーヤナは

「王妃の王妃たる所以は夫のためを思うということにあります。夫の單なる樂しみとなるというだけでは王妃という名は得られないのです。そして、宰相としての責務は王事の重責に專念することであって、王の氣まぐれの心に服從するのは佞人の特徴であります。そのような譯ですから、われわれは敵マガダ王と和睦し、且つ陛下が全世界を征服せられるようにと努力をしたのであります。從って、陛下、お妃さまが陛下に對する深い愛情から堪えられない別居を敢えて堪え忍ばれたに拘わらず、それが陛下に對して惡事をなしたことになるというのはあたりません。むしろ、非常な利益を齎らされたのです。」

と言いました。ヴァツァ王は宰相のこの眞情を吐露した言葉を聞きまして、自分の誤っていたことを覺り、そして非常な滿足を覺えました。そして、

「そなたたちの策略に從い、妃があたかも政略の化身であるかのように振舞って、余に全世界を贈って呉れたことは余も知っている。余が言った言葉はあたらないことだったが、妃に對する深い愛情の言わせたことだ。だが、愛情のために心が盲となった人々はどうして冷靜に考えることが出來ようか。」

と言い、互に色々と談りあって、王妃の恥じらいの翳を晴らし、ヴァツァ王はその日を樂しく過

しました。

その次の日に、事の眞相を知りましたマガダ王の使節がヴァツァ王の許に到着し、

「われわれは貴國の大臣たちに欺かれた。從って、今後われわれの住む世界が不幸の場處とならぬように協定をしよう。」

というマガダ王の言葉を傳えました。この言葉を聞きますと、ヴァツァ王はこの使節を懇にもてなし、パドマーヴァティーから直接に返事を聞かせるために彼女の許に行かせました。ヴァーサヴァダッターに深く傾倒しているパドマーヴァティーは使節を親しく引見しました。謙讓は善良な婦人の美德であるからであります。使節は

「娘よ、そなたは策略によって嫁がされた。しかも、そなたの夫は他の女に愛著している。かくて、余は悲痛の念を以てかかる娘の父であるという果報を刈らねばならなくなった。」

という父王の言葉を傳えました。しかし、パドマーヴァティーは使節に申しました。

「歸って、父君母上に妾の言葉を傳えて頂きたいと思います。『何もお悲しみ下さいますな。わが王は妾を深く愛していられます。それに、ヴァーサヴァダッター妃は妾には愛情深い姉上とも言うべき方です。ですから、父上が御自身の固く誓われた信實と妾の生命を一度に害うようなことをお望みにならないかぎり、わが君に憤りを持たれてはなりませぬ。』」

パドマーヴァティーに相應しいこの返事を聽きますと、ヴァーサヴァダッターも使節を懇にもてなし、マガダ國に還らせました。使節が出發しますと、パドマーヴァティーは父の宮殿を憶い

出して、望鄉の念に堪えないかのように、少し茫然としていました。そこで、ヴァーサヴァダッターはヴァサンタカに命じてパドマーヴァティーを慰めさせました。參殿しましたヴァサンタカは次の物語を話しました。

〔人間の妻となった天女ソーマプラバーの物語〕

大地の飾りともいうべきパータリプトラという都城があります。そこに、ダルマグプタという大商人がいました。彼の妻はチャンドラプラバーといいましたが、あるとき妊娠して、容姿美わしい娘を生みました。この娘は生れるや否やその美しさで部屋を輝かし、はっきりと言葉を發し、しかも起き上って坐りました。彼女の生れた部屋に居ました女たちが驚き怖れているのを見まして、父のダルマグプタ自身も驚いてしまいました。そして、直ちに、その娘に恭しく禮拜して、祕かにたずねました。

「尊いお姬さま、わが家に權化したもうた貴方はどなたさまですか。」

すると、彼女は

「貴方は妾を誰にも嫁がせてはなりません。妾がこの家にいるかぎり、妾は貴方にとって祝福となりましょう。父上さま、その他のことをお聞きになってはいけませぬ。」

と答えました。この言葉を聞きましたダルマグプタは畏怖して、世間には娘は死んだと言って、

彼女を家の奥深くに隠して育てました。

こうして、ソーマプラバーと名づけられましたその娘は次第に大きくなってゆきました。彼女は人間の姿をしていましたけれども、神々しいばかりの美しい容姿でありました。ある日のこと、彼女が春の祭典を露臺から眺めて愉んでいましたとき、グハチャンドラという商人の息子が彼女を見染めました。彼は心臓を戀の矢で射貫かれたかのように氣が遠くなり、家に歸るのさえも困難なほどでありました。彼は戀病に悩まされたのです。彼の兩親が彼の病の原因を再三再四たずねますと、彼は友達の口を通して打明けました。そこで、彼の父グハセーナは息子に對する愛情から、その娘を貰いにダルマグプタの家にでかけました。ダルマグプタは娘を息子の嫁に貰いにきましたグハセーナに

「私の娘とは何處に居るのです。馬鹿な！」

と言いました。グハセーナはこの言葉で娘を嫁入らすのを斷ったと考えて家に歸りましたが、戀病に責めさいなまれている息子の姿を見まして、考えました。

「そうだ、このことを王にお頼みしよう。以前にお役に立ったこともあるから、王の力で何とかして戀病で死にかかっている伜にあの娘が嫁入してくるようにしてやろう。」

と決心して、王のところへ行き、この上ない寶玉を獻上して、王に自分の願いのほどを申出でました。王はこれを嘉せられて、警察長官にグハセーナを援助するよう命じましたので、グハセーナは警察長官とともにダルマグプタの家に赴きました。しかも、家の周圍を軍勢で包圍しました

ので、ダルマグプタは一家の破滅が到來したと思って、喉が呼吸でつまってしまいました。

すると、ソーマプラバーがダルマグプタに言った。

「お父さん、妾を嫁入らせて下さい。妾のために貴方を不幸に陥入らせはいたしません。妾はどんなことがありましても夫と同衾はいたしません。とにかく、このことについて先方の方々の同意を口頭でえて下さい。」

この言葉を聞きますと、ダルマグプタは娘を夫と同衾させないことを條件として結婚に同意しました。グハセーナは

「まあ、私の息子のところへ嫁入りさせなさい。」

と考え、心の中で笑いながら、この條件に同意しました。こうして、グハセーナの息子グハチャンドラは結婚式を擧げて、花嫁のソーマプラバーを自分の家に連れ歸りました。その夕方、父は息子に

「伜よ、花嫁を床入りさせなさい。自分の妻と同衾しない人が何處にある。」

と言いました。この言葉を聞きますと、花嫁のソーマプラバーは舅を怒ったまなざしで見つめて、あたかも死の判決を言いわたすかのように、人差指をまわしました。すると、この嫁の指を見ました瞬間に、商人は息絶えてしまいましたので、他の人々は怖れおののきました。グハチャンドラも父が死んだのを見まして、

「死の女神が花嫁となってわが家に舞いこんだのだ。」

と考えました。その後、ソーマプラバーはグハチャンドラの家に妻として暮してはいましたが、彼は彼女と夫婦の契を結ぶことが出來ず、白刃の上に立つような苦難の戒行をまもりつづけました。彼はその悲しみに心中を焼きつくされ、あらゆる快樂に對して無關心となり、戒行をまもりつづけて、毎日婆羅門を饗應しつづけました。天上の美しさを持つ彼の妻は終始口を開きませんでしたが、婆羅門たちを饗應した後にはいつも彼等に布施を與えました。

あるとき、老齢の婆羅門が饗應に招かれてきまして、天賦の美貌を具えて世間の驚嘆をあびている彼女を見ました。この婆羅門は好奇心をおこしてグハチャンドラにひそかに

「貴方の若奥様は一體どういう方ですか、私に話して下さい。」

とたずねました。そこで、婆羅門に再三再四たずねられましたグハチャンドラは悲痛な心で彼女のことをすべて物語りました。この勝れた婆羅門はそれを知ると彼に同情し、彼の望を遂げさせるために、心中の火焔を鎮める呪文を彼に授けました。そこで、彼がこの呪文をひそかに唱えていますと、祭壇の聖火の中から一人の婆羅門が彼の前に忽然と現われました。婆羅門の姿に化身した火神は、その前に額くグハチャンドラに

「今日、余はそなたの家で御馳走になり、今夜はここに留らして貰おう。そして、そなたに眞實を教示してから、そなたの願をかなえてとらそう。」

と言いまして、彼の家に這入りました。この婆羅門は他の婆羅門と同様に饗應を受けて、その夜はグハチャンドラの傍に臥床を設けて、夜番を疲れることなくつとめました。

そして、その夜更けて、家人が寢しずまると、グハチャンドラの妻ソーマプラバーは夫の家から出て行きました。婆羅門は直ちにグハチャンドラを起して、

「さあ、行って、お前の妻のすることを見よう。」

と言いました。そして、呪力で自分とグハチャンドラを蜜蜂の婆に變えて出かけ、家を出ていった妻を彼に見せました。その美しい女は都城の外に出て、かなり遠くまで行くのでした。婆羅門はグハチャンドラと一緒に彼女の後をつけてゆきました。すると、欝蒼と茂って美しい榕樹の大木が見えました。しかも、その樹下から、琵琶や笛の伴奏で美しい天上の音樂の奏でられているのが聞えてきました。そして、その樹上に自分の妻に似た天女が玉座に倚っているのをグハチャンドラははっきりと見ました。彼女の天賦の美しさは月光を凌ぎ、白いチャーマラ*であおがれている彼女は、月輪の美しさのすべての寶を主宰する女神のようでありました。しかも、グハチャンドラは彼の妻がその樹に登って、彼女とならんで玉座の片側に坐っているのを見ました。このように同じ美しさの二人の天女がならんで坐しているのを見ますと、彼にはあたかもその夜三つの月が照り輝いているかのように思われました。

そこで、彼は好奇心に驅られて、そのとき考えました。

「まこと、これは夢か幻か。いや、そのいずれでもない。これは善業の幹に萠え出る賢者との交わりの芽から花の咲くことである。そして、この花は私に相應わしい果實を約束するものだ。」

このように彼が相像を逞しくして考えています間に、かの二人の天女は彼女等の生れに相應わ

しい食事をして、花蜜酒を飲みました。そして、グハチャンドラの妻は別の天女に

「今日神々しい一人の婆羅門が妾どもの家に參りました。そのため、姉上さま、妾の心はふるえました。ですから、妾はもう歸ります。」

と言いまして、別れを告げて、その樹から下りました。それを見ましたグハチァンドラと婆羅門の二人は蜜蜂の姿をしたままで彼女に先立って歸り、その夜のうちに家に歸ってきました。その後から天女であるグハチャンドラの妻もまた歸ってきて、誰にも氣づかれずに自分の部屋に這入りました。そこで、婆羅門はグハチャンドラに穩かに語りました。

「貴方が見られたとおり、貴方の妻は天女であって、人間ではない。また、もう一人の女も貴方が今日見たとおり天女である。天女がどうして人間と契ることを望もうか。それで、彼女が貴方と契るようになるために、彼女の部屋の戸に書くべき呪文を私は貴方にお授けしよう。また、その效驗を增大するために戸外で行う術策をお教えしよう。火は煽られずとも燃え上るが、風で煽られるときは一層燃えたつものである。同樣に、呪文もそれだけで望ましい效果を擧げるけれども、術策を用いるときその效驗は一層あらたかである。」

この勝れた婆羅門は、このように言って、グハチャンドラに呪文を授け、また術策を教えて、夜の明けがたに姿を消しました。

グハチャンドラは妻の部屋の戸にかの呪文を書き、そして夕方に彼女の愛情を唆る術策を教えられたとおりに實行しました。彼は立派に着飾って出かけ、彼女の面前である遊女と語り合った

のです。それを見ると、天女は妬ましくなって彼を呼び、呪文のために呪縛された聲で

「あの女は誰ですか。」

と尋ねました。彼は

「あの女は遊女で、私に惚れています。今日、私はあの女の家に行こうと思っています。」

と、佯って答えました。すると、彼女は眉毛に皺をよせて、流し眼に彼を睨んで、左手で彼を引留めて言いました。

「ああ、判りました。それで貴方はおめかししたのですね。行ってはなりません。貴方はあの女と何の關係もありません。さあ、妾と一緒に寢ましょう。妾は貴方の妻なのですから。」

興奮のために心が動搖し、彼女が人間と契るのを引とめていました鬼靈は呪文によって退散させられていましたが、彼女はなお憑かれているかのように、このように言いましたので、この言葉を聞きました彼は歡喜のために身がふるえる思いでした。彼は直ちに彼女と一緒に部屋に這入って、人間ではありましたけれども想像を絶するような天上の快樂を樂しみました。このように、グハチャンドラは呪文の神通力によって天女の身分を捨てた愛妻をえまして、其後幸福に暮しました。

「このように、天女たちも善業者の呪文に打負かされて、祭祀の執行とか慈善などの德行の報酬として、彼等の妻となってその家に住むのであります。神や婆羅門を尊崇することは德行のす

ぐれた人々に凡ゆる望を満さしめる牛*と考えられているからです。それによって得られぬものは何もないのです。呪文による懐柔などというような他の術策は單なる補助手段に過ぎません。これに反して、悪業はあたかも大風が花を散らす原因であるように、非常に高貴な生れの夫人たちがその地位から墮ちる唯一の原因でさえあるのです。」

ヴァサンタカはこのように王妃に物語った後、更に言葉をつづけました。

「この場合、アハリヤーの身に起ったことをお聴き下さい。」

〔インドラ神とガウタマ仙の妻アハリヤーの姦通の物語*〕

昔、ガウタマという過去・現在・未來の三時に通曉する大仙人がいました。彼の妻はアハリヤーと言い、その美しきは天女をさえ凌ぐほどでありました。あるとき、天帝インドラは彼女に懸想して、祕かに彼女を誘惑しました。まこと、支配者の地位にある者の心は、自己の勢威を過信して、不法な目的を追求するものであります。愚かな彼女は、情熱の虜となって、シャチーの夫（インドラ神）の意に従いました。しかし、ガウタマ仙は神通力でそれを知り、その現場に赴きました。インドラは怖れて直ちに猫の姿となりました。ガウタマはアハリヤーに

「ここに居たのは誰だ。」

と詰問しました。すると、彼女は俗語で

「ここに居たのはまさくしく猫*ですよ。」

と、言葉の眞意を保ちながら、ごまかして答えました。すると、仙人は笑いながら

「お前の情夫がいたのが本當だ。」

と言って、彼女が眞實を遵奉した場合に解ける呪詛を彼女にかけました。

「悪性の女め、お前が森林の中を妃を探して歩き廻るラーマ王子の姿を見るまで、長い間岩石の姿となれ。」

ガウタマ仙は、また、そのとき

「汝の身體に汝の望んだ女陰が千箇つけられるであろう。造一切主がいつか天女ティロッタマーをつくられるであろうが、汝が彼女を見るとき、それらは千眼となるであろう。*」

と、インドラに呪詛をかけたのです。呪詛をかけますと、ガウタマ仙は望みのままに苦行をしました。アハリヤーは無慘にも岩石の姿となり、インドラもまた全身が女陰で蔽われてしまいました。不義は如何なる人にも屈辱の原因となるものであります。

「このように、如何なる人にも悪業は常にその人自身に報いるものであります。人が種子を蒔くとき、彼はその果實を自ら收穫するのです。從って、氣高い心の持主は他人の嫌厭することを爲そうとはしません。このことたるや勝れた人々の當然遵奉すべきことで、聖法の定めるところであるからです。貴女がたお二人は前生に於いては姉妹の天女であられたのですが、呪詛のため

に此の世に生れられたのです。ですから、貴女がたのお心の中にはいささかも爭いのお氣持はないのですし、お互いの幸福を願い合っていられるのです。』

ヴァサンタカからこの言葉を聞きますと、ヴァーサヴァダッターもパドマーヴァティーも嫉妬心の一片も殘らず消えてしまいました。しかも、ヴァーサヴァダッター妃は夫を二人の共有とし、パドマーヴァティーの幸福を冀って、自分自身と同樣にいとしみました。

マガダ國王はパドマーヴァティーの遣わした使節からヴァーサヴァダッターの非常に雅量のあることを聞いて大いに滿足しました。次の日、大臣ヤウガンダラーヤナはヴァッツァ國王の前に伺候し、王妃のいられるところで、他の近侍の侍立の下に王に奏上しました。

「陛下、經倫のために何故にカウシャームビーに還御せられませぬか。マガダ國王は瞞されましたけれども、最早かの王に對して懸念すべきことは何もありませぬ。かの王は、『娘を嫁入りさせることによる姻戚關係』という政略によって、完全にわが味方となったからです。自分の生命よりも愛する娘を捨てて、かの王はどうしてわれわれに戰を挑むことがありえましょう。かの王は約束を守るでありましょう。それに、かの王は貴方によって瞞されたのではありません。あれは私だけでやったことです。それに、かの王に不幸をもたらすことではありません。私が牒者どもから知りえましたところでは、かの王は決してわれわれに敵對は致しません。われわれがここに數日滯在していたのはまさしくそれを知るためでした。」

自らの掌中にある事業を達成しましたヤウガンダラーヤナがこのように王に奏上していました

とき、マガダ國王の使節がそこへ到着しました。使節は番兵によって取次がれて、直ちに王宮に入り、挨拶をして座につき、ヴァッツァ王に

「マガダ國王はパドマーヴァティー妃の報ぜられた消息に滿足せられ、貴王に次のごとき思召を傳えさせられました。『多く申述べる必要はない。余は一切を知り、貴王に滿足するものである。されば、ここに緒につかれたところを遂行せられよ。われわれは貴王に服する。』」

と、口上を傳達しました。ヴァッツァ國王はこの使節の明確な言葉を聞きまして、あたかもヤウガンダラーヤナの植えた政策の樹木に花の咲いたかのように、大いに喜んでこの言葉を嘉納しました。王はパドマーヴァティーをヴァーサヴァダッター妃と一緒に連れてこさせて、使節に贈物をし、厚く接待して歸らせました。

また、ヴァーサヴァダッターの父チャンダ・マハーセーナ王からの使節もそこに到着しました。使節は王宮に這入って、禮式に則って王に禮して

「陛下、王事の眞實を知るチャンダ・マハーセーナ王はこの度の事件の始終を聞こしめされて滿足せられ、この思召を傳えさせられました。『貴王の傑出せらるることは、貴王の大臣にヤウガンダラーヤナがいるという一事によって、明かに知られた。これ以上の多言は無用である。ヴァーサヴァダッターもまたまことに殊勝である。彼女は貴王に對する貞節からあの難事をなしとげたのであるが、彼女の所業によってわれわれは永く善業者の眞中に於いて頭を高く上げるをうる。余にとって、ヴァーサヴァダッターもパドマーヴァティーも何等差別はない。彼女等二人は同じ

心であるからである。従って、貴王は速かに經倫のために努力せられよ。』」と、使命の趣を語りました。ヴァッツァ國王は岳父の使節の口上を聽きましたとき、喜悦がたちまちに心に滿ち溢れました。また、王妃に對しては深く温い愛情が改めて增し、同時に勝れた大臣に對しては更に深い尊敬の念が湧いてきました。そこで、王は心中喜びに絶えず、王妃たちとともに、賓客の禮を以て使節を款待して歸らせました。王は速かに經倫の大業にたずさわろうとして、大臣たちと相談して、カウシャームビーへの還御を決心しました。

一〇

そして、次の日、ヴァッツァ國王は大臣並びに妃たちを伴って、ラーヴァーナカからカウシャームビーに向けて出發しました。還御の途上には、あたかも時ならず湧き溢れる大海の水のように鬨の聲が彼の軍勢から湧き起り、平原に轟き渡りました。大象に乘って進むかの王の威容は、もし太陽が東方の山々を伴って天空を行く場合があるとすれば、まことそれに譬うべきものでありました。白い傘蓋を翳されている王は、あたかも太陽の光耀を淩いだことを喜んでいる月に扈從せられているかのように、輝きました。一切の上に燦然と屹立する王の周圍には、あたかも北極星のまわりを群星が軌道によって運行するように、高官顯臣たちが扈從していました。そして、王の後から雌象に坐御して續く二人の妃は、あたかも愛情から王に隨行する大地の女神と吉祥の

女神が此の世に化身したかのように、光り輝いていました。彼の通過する路上の大地は躍り跳ねる軍馬の蹄の尖端で痕がつけられましたが、そのさまはまこと王の愛好した愛情の爪痕*のようでありました。

このようにヴァッツァ國王は威容堂々と進んで、絶えず樂隊の讃嘆するうちに、日ならずして、王の還御を祝うカウシャームビーに到着しました。赤色の絹の旗に埋まった都城は、彼女の夫ともいうべき君主が巡狩から還御しましたので、燦然と光り輝きました。城壁の圓窓は彼女の大きく開いた眼であり、城門の前の廣場にある水の滿ちた水甕は、彼女の膨らんだ二つの乳房でありました。民衆の歡喜の叫聲は彼女の樂しい囁きであり、白い宮殿は彼女の微笑でありました。王は二人の王妃を伴って都城に這入りました。都城の女たちにとっては、王の姿を見ることは無上の歡喜でした。天は華麗な宮殿に立つ數百の麗人の顏に滿たされ、あたかも王妃の美しい顏容のまえに光を奪われた月輪の兵士が侍衛のために參候したかのようでありました。窓邊に立って瞬きもせずに王の一行を見まもる婦人たちは、あたかも好奇心に驅られて天上の車に乘って見物に來た天女のようでありました。長い睫毛の眼を窓格子に押しつけて見まもる婦人たちは戀の矢を容れる箙を作っているかのようでありました。王を見ようと冀って眼を瞠った一人の女の眥は耳のそばまで達するかのようでありましたが、餘りにも瞠ったために王を見ることが出來ませんでした。急いで走ってきました一人の女の激しく波うつ兩乳房は、王を見ようと焦るあまりに、上衣から跳びでんばかりでした。他の女の頸飾は興奮のために切れ、散亂する眞珠の珠は喜びのあ

まりに彼女の心臓から溢れ落ちる歡喜の雫さながらでした。また、ヴァーサヴァダッター妃を見て、彼女が燒死したという嘗ての噂を思いだし、

「もしもラーヴァーナカに於いて業火がお妃さまを害ったのであるならば、太陽さえ暗くなり、此の世は暗黒に包まれたことであろう。」

と、まだ心配しているかのように語る女たちもいました。また、パドマーヴァティーを見て

「お妃さまはパドマーヴァティーさまのために恥をかかれることもなく、お二人はまこと親友のようなので、妾はうれしい。」

と、親しい人々に語る女たちもありました。また、他の女たちは二人の妃をまのあたりに見て、歡喜に瞠った、青蓮にも似たまなざしの花環を彼女等に投げかけて

「まこと、シヴァ神もヴィシュヌ神もお二方の美しさを御覧になったことはないに相違ない。さもなければ、あのように妃のウマー（シヴァ神妃パールヴァティー）やシュリー（ヴィシュヌ神妃、繁榮と美の女神）を崇め大切にせられはしないであろう。」

と、互いに語り合うのでした。

このように、ヴァッツァ國王は都民の目を娯ませながら、入城の嚴肅な祭典を執行しましたのちに、妃たちをともなって宮殿に入りました。そのとき、王宮の美しさは夜明けに於ける蓮華の池のように、また月の昇るときの海のように輝きました。王宮は忽ちに王の殊遇を冀う藩侯からの贈物で滿されましたが、このことは更に數多くの王侯から貢物の來ることを豫想せしめました。

ヴァッツァ王は藩侯を引見し、大饗宴を開いて、そこに出席したすべての人々の心に深い感動を與えた後、内宮に退りました。内宮にて二人の妃の間に座りました王はあたかもラティとプリーティ*との間に坐った愛の神（カーマ）のようでありました。そして、王はその日の殘りを飲酒など數數の歡樂のうちに過しました。

次の日、大臣たちの陪侍の下に王が政廳にいましたときに、一人の婆羅門が參候して、入口のところで叫びました。

「おお、王さま、婆羅門に對する非行です。兇惡な牧者が森で何の理由もないのに私の子の足を切斷しました。」

この言葉を聞きますと、王は直ちに二三人の牧者を逮捕して連行せしめ、訊問しました。*すると、彼等は答えました。

「王さま、われわれは牧畜を業としていますので、人の住まぬ地方を遍歷しています。われわれの間にデーヴァセーナと申す一人の牧人がいますが、その男は森の或る處で石の座に坐って、『俺はお前等の王だぞ。』と言いまして、われわれに命令を下しています。そして、彼の命令に從わない者はわれわれの間に一人もおりませぬ。このように、この牧人は森に於いて統治しているのであります。王さま。さて、今日、この婆羅門の息子があの道をやって來まして、牧人の王に敬禮をしませんでした。王の命令で、私どもが『王さまにお辭儀しないで行かないで下さい。』と言いますと、かの若者はわれわれを押しのけて、われわれの忠告にも拘わらず笑いながら行っ

てしまいました。そこで、牧人の王はこの傲慢な若者の足を切斷して罰するように私どもに命令しましたので、私どもは彼のあとを追いかけ、彼の足を切斷したのであります、王さま。われわれのような者で誰が支配者の命令に背くことが出來えましょう。」

　このように牧人たちが釋明しますと、賢明なヤウガンダラーヤナはこの言葉を篤と考え、王に祕かに

「確かにその場所には財寶が埋藏されております。その威力によって、その男は牧人でありながらも勢力をもっているのです。*そこへわれわれも行きましょう。」

と語りました。大臣の言葉を聞きますと、王は牧人たちを案内として、軍勢と扈從をともなって、森のその場所へ出かけました。

　その土地を調査して、土方たちがそこを掘ってみますと、山のような姿をした一人の夜叉が大地の下から出てきまして、

「王さま、私が永らく守護してきたこの財寶は、貴方さまの御祖先が埋められましたものゆえ、何卒御自由になさって下さい。」

と、ヴァツァ王に言いました。王の禮拜を受けて、夜叉は姿を消しました。そして、財寶が發掘されました。しかも、その中から寶玉を鏤めた無價の王座が得られました。繁榮のときには幸運な出來事が引續いて起るものであります。ヴァツァ王は喜び勇んで財寶をすべて手中に納めて、牧人たちを懲らしめたのち、自らの都城に歸りました。都城の人々は王が持歸りました黄金の王

座を見ましたが、それに鏤めた血のように赤い寶玉から發する輝きは、その流れによって王の四方に於ける征服を前兆するかのように見えました。また、銀の釘の尖端につけられた眞珠の鎖は、大臣の驚くべき智慧を思って再三再四微笑んであらわす彼の齒並のようでありました。都城の人人はそれを仰ぎ見て大いに喜び、喜悦の太鼓を打ち鳴らして喜びのどよめきを擧げました。大臣たちも王の勝利を確信して大いに喜びました。事を始める最初にあたって吉祥なことの起るのはその窮極の成就を豫示するものであるからです。天空が稻妻の閃きに似た旌旗に滿されたとき、王は雲が雨を降らすように臣下の者たちに黄金の雨を降らせました。

　その日を大饗宴のうちに過した翌日、ヤウガンダラーヤナはヴァツァ王の心の中を知ろうと思い、王に

「王さま、貴方が繼承によって得られたこの大王座に登って、それを飾って頂きとう存じます。」

と言上しました。しかし、王は

「世界を征服して榮光を得たときに、余はこの王座に登るべきである。四方を征服することなく余が登るとき、如何なる名聲が得られようか。四方の海に圍まれ、豐かに飾られた世界を征服したときにこそ、余は祖先たちの遺してくれたこの大寶座に登って、それを飾るであろう。」

と言って、王はその王座に登りませんでした。生れの貴い人々は精神の眞の氣高さを持っているからであります。

そこで、王の言葉に満足しましたヤウガンダラーヤナは王に言いました。
「陛下、よくぞ仰せられました。では、まず、東方征服を企てましょう。」
この言葉を聞きますと、王は大臣に熱心にたずねました。
「急所ともいうべき地點が他にあるにも拘わらず、諸王は何故にまず東方に進撃するのであろうか。」
この言葉を聞きますと、ヤウガンダラーヤナは再び王に言いました。
「陛下、北方は富裕ではありますが、蕃族との往來によって汚されております。また、西方は太陽などの沒する方角であります故に敬われておりません。また、南方も羅刹が住み、死の神の據る方角で汚れております。これに反し、東方に太陽は昇り、また天帝インドラは東方を支配しております。また、ガンジス河は東流しています。従って、東方が好まれるのであります。しかも南方のヴィンディヤ山脈と北方のヒマーラヤ山脈の間に挾まれ、ガンジス河の水の洗う中原の地が最も勝れていると考えられています。従って、成功を望む王者たちはまず東方に進軍し、更に神の河（ガンジス河）の流れる地方に居を定めます。まこと、御祖先の方々もまず東方へ進出して諸方を征服し、ガンジス河の岸にあるハスティナー・プラに居を定められました。しかし、覇王たるは人間によるものであって、土地に因るものでないことを覺って、シャターニーカ王はカウシャームビーが環境が勝れていますので、その地に據られたのであります。」
と言って、ヤウガンダラーヤナが口を閉じますと、王は彼の殊勳に對する尊敬の念から

「この世に於いて土地の條件が覇王たるの原因でないということは眞實である。勇氣ある人間にとって、自己の勇氣が成功の唯一の原因であるからである。勇氣のある人は、唯一人で支援がなくても、繁榮を獲得するものである。」
と、語りました。

二

そこで、ヤウガンダラーヤナがヴァッツァ王に言いました。
「陛下、陛下は運命の惠みとともに勇氣を持っていられます。われわれもまた政治の常道に於いていささか爲すところがありました。従って、逡巡することなく、速かに、諸方の征服を遂行なされませ。」
大臣の口から、このように言われましたヴァッツァ王は語りました。
「そうであるとしても、吉事の成就には常に多くの障礙がある。されば、余はそのために苦行をして、シヴァ神を慰め奉ろうと思う。かの神の恩寵なくして、何として所期の望を成就することが出來よう。」
この言葉を聞きますと あたかもラーマ王子が海上に橋を架けようと焦っていましたときに、猿族の王（スグリーヴァ）たちが王子に進言しましたように、大臣たちは王が苦行を行ずることに賛

意を表しました。

そして、王が妃たち並びに大臣たちと三夜の間苦行を行じましたとき、シヴァ神が夢の中で王に教を垂れました。

「余は汝に滿足じゃ。さあ、立ち上るがよい。汝は何等の障礙なく勝利をかち得よう。また、汝は間もなく將來一切のヴィディヤーダラ族の王者たるべき王子を得よう。」

王が眼を覺すと、彼の疲勞はシヴァ神の恩寵によって全く去り、彼はあたかも太陽の光によって輝きを增した新月のようでありました。そして、その翌朝、大臣たちや戒行を果すために苦行を行じて疲れ果てた、優美な花にも似た二人の王妃に、その夢を話して喜ばせました。耳を傾けて聽くに値する夢の話を王から聽きまして、二人の王妃は元氣を囘復しました。その話は王妃の體力の增進にはまこと良藥のごとき效驗がありました。王は苦行によって祖先の人々と同じ威力を得ました。また、二人の妃は夫に貞淑な婦人の殊勝な名聲を得ました。

翌日、苦行の終了を祝う祝宴が催されて、市民が歡喜に湧き立っていましたとき、ヤウガンダラーヤナが王に言上しました。

「陛下、シヴァ神がこのように滿悅したもうとは、まことに幸先よき次第であります。されば、今や敵を征服して、わが君の腕によって贏ちえた繁榮を享受せられよ。まこと、王者が自らの德によって繁榮を得たとき、それは永劫に續き、自己の德によって征服した人々の光耀は消ゆることはないからであります。祖先の方々が集められた財寶が永く地中に埋れて見失われていたにも

拘わらず、陛下によって得られたのはまこと如何なることでありますでしょうか。この點に關して、こういう物語をお聽き下さい。」

〔商人デーヴァダーサの物語〕

むかし、パータリプトラの市街に、大富豪の家に生れたデーヴァダーサという商人の息子がいました。彼はパウンドラヴァルダナ*の都城から或る富裕な商人の娘を妻に娶りました。彼の父が死にますと、デーヴァダーサは次第に身持がくずれ、全財產を博奕でなくしてしまいました。そこで、彼の妻は貧乏の苦しみに堪えられなくなりましたので、彼女の父がやって來まして、彼女をパウンドラヴァルダナの實家に連れ歸ってしまいました。彼も次第に自らの失敗に苦しみ、正業に立ちかえろうとして、その資本を欲し、舅に賴むためにパウンドラヴァルダナに行きました。その市街に夕方に到着しましたが、塵埃にまみれ襤褸を着た自分を見まして考えました。

「このような姿で、どうして舅の家に行けよう。まこと、誇をもつ人間にとっては、親族の前に貧乏を曝すよりは死ぬ方がましである。」

このように考えました彼は市場に行き、夜分には花を閉じる蓮華のようにわが身をうずくまらせて、とある店の外にいました。すると、そのとき、一人の若い商人がその店の戸を開けて、その中に這入るのを見ました。間もなく、一人の女が足音を忍ばせて近寄り、素早くその店に這入

ってゆきました。燈火のともされている店の内部を隙見しました彼は、その女が自分の妻であることに氣がつきました。デーヴァダーサは自分の妻が他の男の許に走って戸に閂をしているのを見まして、苦惱の稲妻にうちのめされて、考えました。

「財産を失った男は自分の肉體をさえ失う。まして、どうして女の愛情を止めることが出來よう。女たちにはその本來の性質からして稲妻のような浮氣心があるものだ。墮落の海に陷ちた男たちに振りかかる不幸はかくのごときものだし、また夫と別れて實家に歸った女の行狀もまたかくのごとしだ。」

このように考えながら戸外に立っていますと、彼の妻が情夫となれなれしく話し合っている囁きが聞えたように思いました。そこで彼は戸に耳を寄せて耳を欹てていますと、そのときその惡い女が情夫である商人にひそかに語っていました。

「まあ、お聽きなさいよ。妾は貴方に惚れてるんですから、貴方に祕密のことを話して上げましょう。妾の亭主にむかしヴィーラヴァルマンという曾祖父さんがいたのです。この人は屋敷内に黄金の甕を四つ、四隅の各〻に一つずつ埋めておいたのです。そして、そのとき、彼はその一つを妻の一人に知らせておいたのです。彼女が死ぬとき、そのことを嫁に知らせ、この人がまた自分の嫁に、言いかえれば妾の姑に話したのです。そして、姑が妾にそのことを話して具れました。これが妾の亭主の家で姑から嫁に順次に口傳されていることなんです。妾の亭主は貧乏でしたけれども、妾はそのことを話しませんでした。あの人は博奕に溺れていましたので、妾には憎

かったからです。でも、貴方は妾の本當に好きな方です。ですから、妾の亭主の町へ行って、あの人に金をやって家を買いとり、あの黄金を手に入れたら此處に歸ってきて、妾と樂しく暮しましょう。」

この陰險な女からこのような話を聞かされました情夫の商人は、造作なしに財寶が得られると思って、彼女が氣に入りました。デーヴァダーサは彼の性惡な妻の槍のように鋭い言葉に心臓を突き刺されたかのような思がしましたが、そのとき突然に財寶の希望が心に浮びました。そこで、彼は急遽パータリプトラの市街に引返し、わが家に歸って財寶を掘りだしてわが物にしました。また、彼の妻の內緒の情夫の商人もその財寶を手に入れようとして、商賣に名を借りてその土地に行きました。彼はデーヴァダーサからその家を買い取りましたが、デーヴァダーサは非常に澤山の金でそれを彼に賣ったのでした。デーヴァダーサは他に住居を構えて、策略を用いて妻を實家から急いで呼びもどしました。このようにしましたとき、彼の妻の情夫である性惡な商人は財寶が得られませんでしたので、彼のところに來て、彼に

「お前の家は古くて、私の氣に入らない。だから、私に金を返して、自分の家を買い戻してくれ。」

と言いました。

このようにその男は要求しましたが、デーヴァダーサが拒みましたので、二人は互いに言い爭って王の前に行きました。デーヴァダーサは王の面前で、彼の胸中にある毒のように有害な自分

の妻の行状を逐一洩らさず吐き出しました。そこで、王は彼の妻を召喚して眞相を糾明し、人妻と姦通した商人の全財產を沒收して處罰しました。デーヴァダーサは彼の惡妻の鼻を切り落し、他の女を娶って、得た財寶によって幸福に暮しました。

「このように、德によって得ました財寶はその人の繁榮のときに至っても變ることはありません。しかし、そうでない財寶は雨が降りだすと溶け去る雪片のごときものであります。從って、人は正道によって財寶を得るように努力すべきです。まして、財寶は王國という大木の根でありますゆえ、王者は更に一層これに努めるべきです。從って、大業達成のために、慣習に從ってまず凡ての大臣に榮譽を授けられ、然る後に德に勝る裕福を贏ち得るために四方の征服を遂行なさいませ。陛下が結婚によって二大國の王を舅にもっていられますことを無視して陛下に敵對する者はなく、多くの王者は陛下に加勢するでありましょう。しかし、バーラーナシー*のブラフマダッタという王は常に陛下の敵でありますゆえ、かの王をまず征討しましょう。この王を征服しました後に東方を征服し、漸次に全土を征服して、蓮華のように輝くパーンドゥ王家の名聲を高められよ。」

大臣のこの言葉を聞きますと、征服を熱望するヴァッァ王は直ちに同意して、臣下の者たちに征討の軍の準備を命じました。王は彼を援助した義兄弟のゴーパーラカの功を嘉して、ゴーパーラカをヴァイデーハ*の王位に即け、また軍勢を率いて彼を援けたパドマーヴァティーの兄シンハ

ヴァルマンを敬って彼にチェーディ*國を與えました。また、雨期に雨雲が天を蓋うように四方に軍勢を配置して彼を援けようとした盟友のビッラ族の王プリンダカを王は呼び寄せました。この大王の領土に於いて遠征の準備が進められていましたとき、敵どもの心中には奇妙な不安が萌しはじめました。

ヤウガンダラーヤナはブラフマダッタ王の意圖を探るためにまず間諜をバーラーナシーに派遣しました。こうして、吉祥の日をえらんで、勝利を豫言する前兆に喜びいさんだヴァッァ王はまず東方のブラフマダッタ王に對して軍を進めました。傘蓋を高くかかげて背高い勝利の軍象に乘りました彼は、あたかも滿開の花をつけた一本の樹木のある山に猛々しい獸王が登ったかのようでありました。大業達成の使者であるかのように秋が來ましたので、彼の遠征は好都合に進捗し、河川は減水して、彼の進擊の路を極めて容易にしました。彼は大地の表面を雄たけびする軍勢で滿しましたが、あたかも雲のない空に突然に雨季を出現せしめたかのようでありました。そして、そのとき、四方は彼の進軍を互いに語り合っているかのように、彼の軍勢の雄たけびの反響で轟き渡りました。また、彼の軍馬は黃金の馬飾に太陽の輝きを集めて進み、そのさまはまこと彼の執行した軍隊の不淨拂いの祭典を喜んだ祭火が隨行しているかのようでありました。白いチャーマラのごとき耳をもち、顳顬からは鉛丹のように赤いマダを出しながら路上に輝く彼の軍象は、彼の進擊を怖れた山々が彼の征討の軍に加わらせるために遣わした子が秋の白雲をたなびかせて、鑛分を含んだ赤い水を迸しらせているかのようでありました。塵埃はこの王が敵どもの威光に堪

ええないと考えているかのように、太陽の光輝を蔽い隠しました。二人の王妃は彼の政治的手腕に心惹かれて彼に随行した名譽の女神と勝利の女神のように、一歩一歩路上を彼に随行しました。風にはためく彼の軍旗の絹は敵軍に「降服せよ、さもなくば逃げよ。」と語っているかのようでありました。このように、この世の破滅を怖れた龍蛇シェーシャ*が高く擧げた頸部の斑紋のように見える滿開の白蓮の咲きみだれる四方を睥睨しながら、彼は進軍しました。

さて、話かわって、ヤウガンダラーヤナの命を受けました間諜は髑髏を捧持するシヴァ行者*に身を變裝して、ヴァーラーナシーの市街に到着しました。卜占の巧みな一人がその手腕のほどを示しながら先生の役割を演じ、他の者たちはその弟子を裝いました。これらの弟子たちは諸方を行乞しながら

「われわれの先生は過去・現在・未來の三時に通じていられる。」

と、贋の先生を褒めたたえてまわりました。そして、未來に關して彼にたずねる人々に彼が火などで占って語ったことを、これらの弟子たちが祕かにその通りに計らいましたので、彼は有名になりました。其の地に住む王族で王の寵臣の一人が彼の下らぬ手腕に深く惚れこんで、彼はその愛顧を受けるようになりました。そして、ヴァッァ王との戰が始まりますと、ブラフマダッタ王はこの寵臣の口を通じて、彼に相談をしましたので、彼は機密に通ずることが出來ました。

さて、ブラフマダッタ王の宰相ヨーガカランダカはヴァッァ王の進路に罠を設けました。進軍の道沿いの樹木、花の咲いた蔓草、水や草に毒などを塗りました。また、彼はヴァッァ王の軍勢の中に毒娘*を娼婦として送り、夜間に暗殺を行う刺客を放ちました。占師を裝うかの間諜はそれを知ると直ちに仲間の口を通じてヤウガンダラーヤナに報告をしました。そのことを知りましたヤウガンダラーヤナは毒を塗られた進路沿いの草や水などを解毒劑で淸め、また陣中に於いて見知らぬ女との交歡を禁じました。また、ルマンヴァットの助けをえて、刺客を捕えて殺しました。このことを知って計略の失敗しましたブラフマダッタ王は全土を大軍で埋めるヴァッァ王に到底勝つことが出來ないと考え、大臣等と相談をし、使節を派遣したのちに、降服のしるしとして組合せた手を頭上において、親しくヴァッァ王の幕營に赴きました。ヴァッァ王は貢物を携えて到着しましたブラフマダッタ王を懇に迎えました。英雄は降服を喜ぶからであります。

このようにブラフマダッタ王が屈服しましたので、ヴァッァ王は更に軍を進めて、慴服する者どもはこれを從え、抵抗する者どもはあたかも風が樹木を薙ぎ倒すようにこれらを根こそぎにして東方を平定しました。そして、遂に、ヴァンガ（現在のベンガール）地方が征服せられましたので、怖れおののいているかのように波立つ東海に達しました。その海岸に王は戰勝の記念碑を建てましたが、それはパーターラ（地下界）の征服をしないように王に懇請するため出てきた龍王のようでありました。次いで、カリンガ*の民衆が彼に服して貢物を捧げ、しかも彼の嚮導となりましたので、ヴァッァ王の名聲は高くマヘーンドラ山*の頂上にまで登りました。更に、王は、マヘーンドラ山の征服によって彼の威勢に怖れ靡いたヴィンディヤ山脈の諸高峯のように見える軍象により、諸王の據る森林を征服して、南方に軍を進めました。この地方に於いて、彼は敵どもの遠吠を屛息せし

めて、無力で蒼白となった彼等を、あたかも秋の季節が雨季の雨雲を拂うように、山地に潜む者としてしまいました。征戦をつづける彼がカーヴェーリー河*を渡り、また彼の威勢はチョーラ族*の王の光榮を凌駕しましたので、二つとも同時に汚されたのでした。ムーララ族*の者たちは最早頭を擡げることを許されませんでしたし、その女たちが身内の者たちの死を悼んで手で乳を叩いて嘆き悲しむのも許されませんでした。彼の軍象は七つの流れに分れたゴーダーヴァリー河の水を飲みましたが、水は象の顳顬から香液となって再び七筋に分泌するかのようでありました。かくて、ヴァツァ王はレーヴァー河を渡って、ウッジャイニーに行きました。彼は舅のチャンダ・マハーセーナ王に導かれて都城に這入りました。彼は其地で編んだ髪をとき花環を飾って二重の美しさに輝くマーラヴァ地方の女たちの好色なながし目の的となりました。彼は舅に歓待せられて非常に樂しく其地に逗留しましたので、長い間未練を殘していました故國の樂しさをさえ忘れるほどでありました。ヴァーサヴァダッター妃は始終父の側にいて子供の時代を憶いだして懐しがっていましたが、この幸福にも拘わらずなお失望しているかのようでありました。

チャンダ・マハーセーナ王はパドマーヴァティーに會って、自身の娘に再會したのにおとらずうれしく思いました。ヴァツァ王は樂しく數日の間休息した後に、舅の軍勢の加勢をえて、西方に軍を進めました。彼の細身の長劍はまこと彼の勇氣の火から出る煙でありました。それはラータ*の女たちの眼を流れ出る涙で曇らせました。マンダラ山*の樹木が彼の象に踏み倒されたとき、マンダラ山は彼が海をかき廻すために自分を根こそぎにするのではないかとおののいているよう

でありました。彼はたしかに太陽や其他の天體を凌ぐ發光體でありました。征服者たる彼は西方に於いてさえも赫々たる昇天を享受したからでした。ついで、ヴァツァ王は、クベーラ神(財寶の神)を飾りとし、そのアラカー城*に對する執着を賞讃し、カイラーサ山の微笑によって美しい方向(北方)に軍を進めました。彼はシンドゥ*王を征服して、あたかもラーマ王子が猿軍を率いて羅刹どもを討伐したように、騎兵を率いてムレッチャ族*を討ちました。トゥルシュカ族*の騎兵國は海濱の樹林が湧き立つ海浪にうち倒されるように、彼の象軍の大集團のために蹂躪せられました。また、彼は敵の貢物を受納して、あたかもヴィシュヌ神が悪魔ラーフの頭を刎ねたように、*パーラーシカ族の兇悪な王の頭を刎ねました。フーナ族*を敗退せしめた彼の名聲は四方に轟き渡り、ヒマーラヤ山中を第二のガンジス河のように流れました。彼の軍勢が鬨の聲を擧げると、敵は恐怖のために靜まってしまいましたが、なお岩の洞穴の中のみには時に敵對の聲が聞えました。カーマルーパ*の王がそのとき傘蓋を捨てて彼に頂禮し、光耀のない者となりましたのも不思議ではありません。この王の獻上した象軍を從えて覇王は軍をかえしましたが、その象群は貢物として山がヴァツァ王に捧げた岩が動くさまにも似ていました。

このように大地を征服して、ヴァツァ王は部下を連れてパドマーヴァティーの父マガダ國王の都城に到着しました。王が二人の妃と一緒に到着しましたとき、月が夜を照らすとき愛の神の喜ぶように、マガダ國王は大滿悦でありました。嘗て人知れずマガダ國王の王廷にいましたヴァーサヴァダッターは玆に改めて國王にひきあわされましたが、國王は彼女を見て尊敬に値する婦人

だと思いました。

かくて、勝利赫々たるヴァッツァ王はマガダ國王並びに全都城の人々に厚くもてなされたのち、彼に對する愛情から彼に隨行した全ての人々の忠誠心に扈從せられて、彼の有力な軍勢によって全世界を併呑して、自己の領土のラーヴァーナカに歸還しました。

二

かくて、軍勢の休息のためにラーヴァーナカに留っていましたとき、ヴァッツァ王は祕かにヤウガンダラーヤナに語りました。

「卿の明智によって余は全世界の王者を征服した。政略によって余に服屬した諸王は決して余に叛かないであろう。しかし、あのヴァーラーナシー王ブラフマダッタは陰險な男である。あの男一人が叛くと思う。惡意ある人間にどうして信頼がおけようか。」

と、ヴァッツァ王から言われましたヤウガンダラーヤナは答えました。

「陛下、ブラフマダッタは二度と謀反をしないでしょう。何故なれば、かの王がわれわれに征服せられて服屬しましたとき、陛下はあの王を非常に鄭重に取扱われました。心ある男ならば、誰が好遇する人に害を與えることが出來ましょうか。或はそれを敢てする人がありましても、その者はそれが結局自己を害することを知りましょう。この點について、こんな話があります。お聽き下さい。お話申し上げましょう。」

〔婆羅門パラブーティの物語〕

嘗て、パドマ國*に、アグニダッタという聲名高い勝れた婆羅門がありまして、王の贈與した土地に住んでいました。彼に二人の息子がいましたが、長子はソーマダッタといい、次子はヴァイシュヴァーナラダッタといいました。長子は容姿か勝れていましたけれども、馬鹿で素行が治まりませんでした。しかし、次子は賢明で、素行よく、また學問が好きでありました。彼等が結婚してから彼等の父が死にましたので、彼等は拜領の土地や其他の財産を半分ずつ分けました。彼等のうちで、次子の方が王に尊敬せられましたが、長子のソーマダッタは行狀がおさまりませんでしたので王に重用されず、農耕に從っていました。

或るとき、父の友人であった一人の婆羅門が、ソーマダッタがシュードラ*たちと歡談しているのを見まして

「馬鹿者め、お前はアグニダッタの子であるに拘わらず、シュードラのような振舞いをする。しかも、お前の弟が王に重用せられるのを見て、恥じるところもない。」

と言いました。この言葉を聞きますと、ソーマダッタは怒って、相手が長上であることを忘れて、その婆羅門に飛びかかって彼を蹴とばしました。そこで、婆羅門は蹴られたのに激怒してすぐさ

ま他の婆羅門たちを呼んで證人とし　王のところへ行って訴えでました。王は兵を派遣してソーマダッタを捕縛しようとしました。兵士等は出かけて行きましたが、武器を持った彼の友だちのために殺されてしまいました。そこで、王は改めて兵を派遣して、彼を捕えました。怒りに盲目となりました王は彼の磔刑を命じました。この婆羅門が磔刑のために柱に上げられますと、誰かに放り投げられたように突然に地上に落ちました。しかも、まこと運命が彼の將來の輝かしい福徳を守護したのでありましたか、彼を再び柱の上にあげようとした刑吏たちは盲目となってしまいました。

　そのとき、王はこの一部始終を聞き、また彼の弟からも懇願せられて心が和ぎ、彼を助命しました。こうして死を免れましたソーマダッタは、王の侮辱を避けるために家族と一緒に他國に行こうと欲しました。しかし、彼の親族の者たちが擧って彼の行くのに反對しましたので、自分が相續した拜領の土地の半分を捨てて生計をたてることにしました。けれども、他に生計の手段もありませんでしたので、農耕をしようと思い、適當な土地を探すために吉祥の日を選んで森に行きました。其處で彼は豐かな収穫の見込のある素晴らしい土地を見出しましたが、その眞中に亙大なアシュヴァッタ樹*を見ました。耕作を望む彼は、その樹が幸にも繁茂した蔭で太陽の光線を遮って雨期のように涼しくしてくれるのを知って、非常に喜びました。彼は

「どなたがこの樹に宿りたもうとも、私はその方の熱心な信者です。」

と言って、右遶をして、そのアシュヴァッタ樹を禮拜しました。彼は二疋の牝牛を鍬につけ、事

業達成のための祈頌を誦し、その樹に供物を供えて、其處で耕作を始めました。彼は夜となく晝となくその樹の下にいまして、彼の妻がいつも其處へ食物を運んだのです。時經て、穀物が實りましたとき、運命のしからしめるところか、その土地が敵國の軍勢によって荒されました。しかし、敵軍が引上げると、勇氣ある彼は穀物が害われましたけれども、泣き悲む妻を慰めて、彼女に殘っている僅かばかりを與え、自分は以前のように樹に供物を供えて、同じ場處の同じ樹の下に留まりました。まこと、忍耐心が不幸によって增大するということは志操の堅い人々の特性であります。

　さて、ある夜、心配のために睡れなくて獨り考えこんでいましたとき、アシュヴァッタ樹から聲がきこえてきました。

「おお、ソーマダッタよ。余は汝に滿足じゃ。されば、汝はシュリーカンタ*の土地にあるアーディティヤプラバという王の國に行け。其の地で、夕方のアグニホートラ祭*の際に用いる祈呪を唱えた後に、王の戸を絶えず叩いて、次の言葉を繰返せ。『私はパラブーティという婆羅門です。私の言う「善因善果・惡因惡果」という言葉をお聞き下さい。』このように語るとき、汝は非常な繁榮を得るであろう。夕方に於けるアグニホートラ祭の祈呪を今余より學べ。余は夜叉である。」

と言い、その威力によって直ちに彼が夕方のアグニホートラ祭の祈呪を敎わりますと、その聲は消えてしまいました。

その翌朝、夜叉から授けられたパラブーティという名を貰いました賢明なソーマダッタは、妻と一緒に出發しました。彼は彼の不運のように平坦でなく、しかも錯雜した森を通過して、シュリーカンタの土地に到着しました。其處で、彼は王の戸口で夕方に於けるアグニの祭祀の際の祈呪を誦えて、命ぜられた通りに自分の名をパラブーティと述べ、

「善因善果・惡因惡果」

という言葉を唱えて、世間に好奇心を起さしめました。彼が繰返しこの言葉を語っているのを知りまして、アーディティヤプラバ王は好奇心を起してパラブーティを王宮に連れてこさせました。彼は王宮に赴き、王の面前で同じ言葉を繰返して語りました。そのとき、王は傍の廷臣たちと一緒に笑いだし、王や大臣たちは彼に衣服、裝飾品及び村落を與えました。偉大な人々の喜びは無駄に終ることはないからであります。このようにして、貧乏なパラブーティはグヒヤカ（夜叉の別名）の恩寵によって忽ちに王から授けられた財寶を得る身となりました。そして、彼はいつも嚮に述べた言葉を唱えて、王の寵臣となりました。王者の心は慰めを愛するからであります。彼は漸次に王宮に於いても、王國内に於いても、また後宮に於いても、王の寵臣として親愛と尊敬を受けるに至りました。

或る日、森の狩獵から歸ってきましたアーディティヤプラバ王は急いで後宮に這入りました。そのとき、戸口に立つ侍衞が狼狽しましたので、彼は疑惑を抱きました。王が後宮に這入りますと、クヴァラヤーヴァリーという王妃が一心不亂に神に祈念しているのが見えました。彼女は丸

裸で、頭髮を逆立て、眼を閉じ、前額部に鉛丹でティラカ*を畫き、脣を震わせて呪文を唱えながら、血、酒及び人肉をならべた怖ろしい供物を供えて大きな曼荼羅（マンダラ）*の眞中に坐っていました。彼女は王が這入りますと、狼狽して衣服を着ました。彼がそのわけをたずねますと、彼女は宥恕を請うて直ちに答えました。

〔王妃クヴァラヤーヴァリーが神通力をえた物語〕

「妾は貴方が繁榮せられますようにとこの祭祀を行いました。妾がこの祭祀を知りました次第と妾の神通力のほどを、王さま、どうぞお聽き下さい。

嘗て、妾が父の家にいましたとき、春の祭典のときに庭にいました妾に友達たちがこのように申しました。

『この遊苑の中の木造の亭の眞中に、神々の神であらせられるガネーシャ（「ガナの主」の意、障礙の征服者ヴィナーヤカ）の靈驗あらたかな神像がありまして、わたしたちの願は何でもかなえて下さいます。わたしたちの祈願をかなえて下さるこの神像に誠信を捧げてお祀りすれば、あなたは難なくあなたに相應わしい夫を得られましょう。』

この言葉を聞きますと、妾は何も知りませんでしたので友達たちにたずねました。

『ガネーシャを祀れば、娘は何故夫を得ることが出來るのですか。』

すると、友達たちは

『あなたはどうしてそのようなことをたずねるのですか。かの神を祀らないとき、この世では如何なる人も成功を得ることは出來ないのです。この神の威力がどのようなものか、あなたにお話しましょう。お聴きなさい。』」

と言って、次のような話をしてくれました。

〔軍神カールッティケーヤの誕生物語〕

むかし、インドラ神がターラカ（悪魔の名）に壓迫せられましたとき、神王たる威光を示そうと欲して、シヴァ神から息子を授かりたいと望みました。そのとき、愛の神はシヴァの眼から發した火で焼きつくされていましたので、ガウリー（シヴァ神妃パールヴォティーの別名）は夫をもとめて非常に長い間苦行を行じて、厳しい禁欲を守っていました三眼の夫*をえたのです。彼女は息子を得ることと愛の神の蘇生を望みましたが、目的成就のためにガネーシャを祀るのを忘れていました。そのとき、願望の聴き届けられることを望みました美しい彼女に、シヴァは次のように語りました。

「愛する女よ、愛の神はむかしプラジャーパティ（創造主）の心から生れた。彼は生れるや否や傲慢から『俺は誰を狂わしてやろうか』(Kam darpayāmi)」と語った。そのため、梵天は彼にカンダルパ (Kandarpa) という名を與えたのである。そして、『息子よ、お前は自信があろうが、

シヴァ神のみは襲撃することを止めなさい。彼から死を與えられないようにな。』と言った。創造主がこのように言ったけれども、性悪な彼は私を悩ますためにやってきた。そのため、彼は私のために焼きつくされた。そして、彼は二度と身體を具えて生れかわることはないのである。*しかし、私は自分の威力によってそなたに息子を生ませよう。私は子孫を得るのに世の人間のするように愛慾の力を必要としないからである。」

牝牛を標識とする神（シヴァ神）がこのようにパールヴァティーに言っていましたとき、梵天がインドラを連れて彼の前に現われました。彼等が彼を讃嘆して阿修羅ターラカを滅ぼすことを懇願しましたので、シヴァは女神に自身の子を生ますことに同意しました。また、彼等の懇願により、生物の破滅を防ぐために、生物の心の中に形のない愛の神を生れさすことにも同意しました。そして、自分の心にも愛慾の這入りこむことを許しました。このことに滿足して、創造主は去り、パールヴァティーは非常に喜びました。

こうして、日を經た或るとき、シヴァはひそかにウマー（神妃パールヴァティーの異名）と愛慾の遊戯に耽りました。彼等の愛の戯れは果しなく、かくて數百年が過ぎ去りましたが、その摩擦のために三界は震動しました。そこで、世界の破滅を怖れて、梵天に教示せられた神々はシヴァの愛の戯れを止めさすためにアグニ（火神）を思い出しました。彼等がアグニのことを思い出した瞬間、アグニは愛の神を滅したシヴァの敵すべからざることを考えて、神々から逃げて水の中に這入りました。火神の熱に焼かれた蛙たちは、彼を探している神々に「火神アグニは水の中にいる」と告げました。

そこで、アグニは呪詛によって忽ちに蛙の聲を不明瞭にして、再び姿を消してマンダラ山に逃げました。しかし、象と鸚鵡にあばかれて、蝸牛の姿をして樹の穴の中に居ました彼は神々に見つけだされ、仕方なく神々の前に姿を現わしました。彼は呪詛によって鸚鵡と象の舌を明瞭な言葉の言えないようにし、神々におだてられて彼等の乞い願うことに承知しました。そこで、彼はシヴァのところへ行き、自己の火焔でシヴァの愛慾生活を止めさしましたが、かの神から呪詛せられるのを怖れて、彼に恭しく禮して神々の委命を述べました。シヴァはそのとき情慾が昂進しましたので、その火の中に射精してしまいました。火神もウマーもそれを受けとめることが出來ませんでした。女神は情慾が満足出來なかった怒りと嫉妬しえなかった悲しみから心亂れて

「妾は貴方から子を得られませんでした。」

と言いましたので、シヴァは彼女に

「そなたが障礙の支配者たるガネーシャを祀らなかったために、今障礙が生じたのだ。だから、火中にわれわれの子が速かに生れるように、かの神を祀りなさい。」

と言いました。シヴァからこのように言われました女神はガネーシャを祀りましたので、火はシヴァの精子によって姙りました。そして、シヴァの種を姙りました火は、あたかも太陽がその中に這入ったかのように、日中でさえも七色の光を發して輝きました。しかし、彼はその種を姙っていることが出來なくなって、ガンジス河に排出しました。ガンジス河はシヴァの命によってメール山*の火坑にそれを捨てました。其處でこの胎兒はシヴァの従者ガナたちに守護せられ、千年

を經て、六つの顔をもつ小兒となりました。

こうして、ガウリーに命ぜられてこの小兒を養育する六人のクリッティカー*たちの乳を六つの口で飲んで、この小兒は日ならずして成長しました。彼此する間に、神々の王が阿修羅ターラカに打負かされて、戰を捨てて、近づき難いメール山の山巓に逃げてきました。神々は神仙たちとともに六面のカールッティケーヤ*の保護を求めたのです。彼は神々を保護して、彼は彼等に取巻かれていました。インドラはそのことを知って、彼の王國がカールッティケーヤに奪われたと考え、心亂れ嫉妬して、カールッティケーヤのところへ行って戰を挑みました。インドラが彼の雷電でカールッティケーヤを打ちますと、そのときカールッティケーヤの身體からシャーカとヴィシャーカという無敵の威力を持つ二人の息子が生れました。シヴァは威力の點でインドラに勝る自分の息子のカールッティケーヤのところに行って、戰を止めさせました。そして、

「お前はターラカを殺してインドラの王國を護るために生れたのである。従って、お前は自己の義務を果せ。」

と命じました。インドラは大いに喜んで、直ちに恭しく禮して、カールッティケーヤを彼の軍將に任ずる灌頂式を始めました。インドラがカールッティケーヤの頭に水を灌がうとして腕を上げますと、彼の腕は動かなくなりましたので、彼は落膽しました。すると、シヴァが彼に

「お前が軍將を望むときに、象面の神（障礙の主宰者にして征服者たるヴィナーヤカ）を禮拝しなかったからこの障礙が生

じたのである。だから、お前は彼を祀るべきである。」

と言いました。シャチーの夫（インドラ神）はこの言葉を聞き、言われた通りにしましたので、腕は自由となり、将軍任命の盛大な灌頂式が正しく執行せられました。そして、間もなく、この軍将は阿修羅ターラカを殺しましたので、目的を果した神々も、また彼を子に持つガウリーも、ともに喜びました。

「ですから、姫君、神々でさえガネーシャを祀らないでは成功をかち得られないのです。あなたが恩寵を願われるならば、この神をお祀りしなさい。」

と、友達たちから言われました妾は、貴方、庭の一隅にあるガネーシャ像のところへ行って拝みました。禮拝が終りましたとき、妾は不圖友達たちが自身の神通力で天空に飛び上り遊び戯れているのを見ました。妾は好奇心に驅られて彼女等を呼び下ろし、神通力のことについて尋ねますと、彼女等は直ちに

「この神通力は魔女の呪文から得られたのであって、人肉を食べたことによるものです。妾たちにこれを教えたのはカーララートリという女性の婆羅門です。」

と答えました。友達からこのように言われました妾は空中を飛ぶ神通力を得たいと思いましたけれども、人肉を食べるのが怖ろしくて、一瞬ためらいました。しかし、どうしてもその神通力が得たくて、妾は彼女等に

「貴女がたは妾にそれを教えて下さい。」

と言ったのです。そこで、妾から慫慂せられました彼女等はカーララートリのところに行って、物凄く醜い彼女を其處へ連れてきました。彼女の眉毛は交叉し、眼はしょぼつき、鼻は平べったく、頬は大きく、唇は廣く裂けており、歯は突出て、首は長く、乳は垂れ下り、太鼓腹で、足は平たくて擴がっていました。まこと創造主が醜悪さを造りうる技能の標本として彼女を造られたかのようでありました。妾が水浴をしましてガネーシャを祀って彼女の前に平伏しますと、妾の衣服を脱がせ、曼荼羅の中で怖ろしいバイラヴァ（恐怖の姿を現じたシヴァ）を祀らせました。妾に灌頂しましたのち、彼女は自分の知っている數々の呪文を妾に教え、神を祀るために供えてありました人肉を妾に食べさせました。妾が數々の呪文を習い人肉を食べますと、妾は忽ちに裸のままで友達たちと一緒に天空に飛び上りました。遊び戯れました妾は先生の命で天から下り、妾はもとの娘の姿となって自分の部屋に歸りました。このように妾は娘のときに魔女の仲間に加わり、妾たちは集って澤山の人間を食べました。大王さま、この話の途中ですが、こんな話を聴いて下さいませ。

〔スンダラカと魔女カーララートリの物語〕

かのカーララートリにヴィシュヌ・スヴァーミンという名の婆羅門の夫がありました。ヴェー

ダの學問に通曉していました彼はその土地に於いて學匠として諸方から集ってきました弟子を教えていました。弟子の中にスンダラカという一人の若者がいましたが、彼の端麗な容姿は方正な品行によって一層引立っていました。あるとき、先生の妻カーララートリがこの若者に惚れこみ、夫が何處かに外出した留守に彼に言い寄ったのです。彼女が自分の姿も考えないでスンダラカに惚れこんだとは、まことに戀の神も醜い者を笑い草にして樂んだものです。彼も一度は心を動かしましたけれども、師の妻を犯すという大罪を精魂を盡して排撃しました。女が如何に誘惑しましても、善人の心は動かされないものです。こうして、彼が逃げだしましたので、カーララートリは自分の身體に自分で齒痕や爪痕をつけ口惜しがり、夫のヴィシュヌ・スヴァーミン先生が家に歸ってくるまで、着物も髪も振り亂して泣いていました。夫が家に這入りますと、彼女は

「あなた、見て下さい。スンダラカが妾を手籠めにしようとして、こんなにしたのです。」

と言いました。この言葉を聞きますと、ヴィシュヌ・スヴァーミンは忽ちに怒りの焔を燃え上らせました。まことに、女を信じますと、賢明な人々の反省力さえ無くなるものです。夕方、スンダラカが先生の家に歸ってきますと、ヴィシュヌ・スヴァーミンは彼に飛びかかり、弟子たちと一緒に彼を足蹴にし、拳骨で撲り、棒で叩きました。彼が毆打されて氣を失うと、ヴィシュヌ・スヴァーミンは弟子たちに命じて、遠慮會釋なく彼を夜の間に外の道路に捨てさせました。

さて、スンダラカは冷い夜風にあたって次第に正氣にかえり、このように辱かしめられた自分を顧みて考えました。

「嗚呼、女の煽動はまこと風が池の靜かな水面に波だたせるように、情熱を抑えた人々の心をさえ惱ますものだ。齡を重ねられ、また賢明な方にも拘わらず、先生が無思慮にも私に無慙な仕打をせられたのは、全くそのためだ。事實、愛欲と憤怒とは賢明な婆羅門たちにとっても生れたとき以來運命の定めるところによって免れえぬものであり、彼等が解脱に達する戸にある二つの閂である。また、事實、嘗て自分たちの妻が墮落するのを怖れて、仙人たちがデーヴァ・ダール樹の森でシヴァ神に對してさえ怒ったことがあったではないか。しかも、そのとき、この神は妃ウマーに聖仙でさえも克己心をもっていないことを示そうとして、佛僧の姿をしていたために、彼等は彼が神であるとは知らなかった。彼等は彼を呪ったが、彼が三界を震憾せしめる支配者たる神であることを知り、彼等は忽ちに宥恕を請い、彼の保護を求めた。このように、聖仙たちでさえ愛欲及び憤怒など人間の敵である六種の缺點*に欺かれて他人を害うことがある。ましてやヴェーダの學匠など尙更のことである。」

と、考えましたスンダラカは、夜間に於ける盜人の難を怖れて、近くの空の牛小屋に這入りこみました。人に見つからないように、その片隅に蹲っていますと、その小屋にカーララートリが近づいてきました。彼女は拔身の劍を手にし、ブーッと音を發して形相物凄く、眼と口から風と火焔を迸らせ、魔女の群を從えていました。このような怖ろしい姿でカーララートリの近づいてくるのを見まして、怖れおののきましたスンダラカは羅刹を攘ふ呪文を思い出して、それを唱えました。この呪文のために惑わされて、恐怖のために四肢を縮こまらせて小屋の片隅にひそかに蹲

っている彼を、カーララートリは發見することが出來ませんでした。カーララートリはそこで仲間とともに天空に飛び上る呪文を唱えて、牛小屋もろとも天に飛び上りました。

　スンダラカはその呪文を聞いて憶えてしまいました。カーララートリは牛小屋とともに天空を飛び、忽ちにウッジャイニーに行きました。其處に着きますと、彼女は呪文を唱えてそれを菜園に下ろし、自分は魔女たちに取卷かれて燒屍場に行って遊び戯れました。スンダラカは空腹を覺えましたので、直ちに菜園に下りて、根を掘って食べました。彼が腹を滿して牛小屋に歸りますと、カーララートリが夜中に墓場から歸ってきました。そして、彼女は牛小屋に乘り、前と同樣に呪文の力によって天空を弟子たちとともに驅って、その夜のうちに自分の家に歸りました。彼女は乘物とした牛小屋をもとの場處に置き、扈從した魔女たちを退散させて、寢室に這入りました。

　さて、スンダラカは彼の經驗した難儀に驚き果ててその夜を過し、翌朝になりますと牛小屋を去って友達の許に行きました。彼は自分の身に振りかかった一部始終を物語り、他國に行くことを望みましたが、友達たちに慰留せられて彼等の間で生活することにしました。彼は先生の家を去って、婆羅門への施行處で食事をし、友達たちと望みのままに交際して、其處で暮しました。

　ある日、カーララートリは家庭用品を買いに出かけて、市場でスンダラカを見ました。戀病に取憑かれていました彼女は再び彼に近づいて

「スンダラカよ、今日こそ妾を樂んで下さい。妾は貴方に首ったけなんです。」

と言いました。彼女からこのように言われますと、高潔なスンダラカは彼女に

「そのようなことを言わないで下さい。それは正しくありません。あなたは私の先生の奥樣ですから、いわば私の母上です。」

と言いました。すると、カーララートリは

「若しあなたが正しいことを知っているなら、妾の生命を救うて下さい。生命を救うことより偉大な正義はないでしょう。」

と、言いました。そこで、スンダラカは

「母上さま、そのような考を抱かれてはいけません。先生の閨を犯すということに何處に正義がありましょうや。」

と、答えました。彼にこのように拒絶されますと、彼女は憤然として彼を脅迫し、自ら自分の上着をずたずたに引裂いて、家に歸り、夫に上衣を見せて

「見て下さい、スンダラカが妾に襲いかかってこのように引裂いたのです。」

と、告げました。彼女の夫は怒って施行處に行き、

「スンダラカは死に値する惡漢である。」

と言って、其處で彼に食物を供することを止めさせました。そこで、スンダラカは空腹に堪えかねてその國を去ることを熱望しましたが、牛小屋で教わった空中飛翔の呪文は覺えていましたけれども、空中から降下の呪文を聞きながら忘れていましたので、それを學ぶためにその夜あの空

の牛小屋に再び行きました。彼が其處に居ますと、前と同様にカーララートリがやって來まして、牛小屋に乘って前の場合と全く同様に天空に飛び上ってウッジャイニーに行きました。彼女は其處に着きますと呪文を唱えて牛小屋を菜園の中に降下させ、再び墓場での夜會に出かけました。スンダラカは降下の呪文を聞きながらも、それを記憶に留めることが出來ませんでした。事實、先生から教えられるのでなくては、神通力は決して完全に達しえられるものではありません。そこで、彼はいくつかの根を食べ、持って歸るために他の根を牛小屋の中に置き、前と同様に其處にいました。すると、カーララートリが歸ってきまして牛小屋に乘り、その夜のうちに天空を驅って歸り、乘物を止めて自分の家に這入りました。スンダラカはその翌朝牛小屋を出て、食物を購う金を得るために根を賣りに出かけました。彼が根を賣っていますと、マーラヴァ生れの廷臣たちがその根が郷里の產であることを見まして、金を拂わずに奪い取りました。彼がそれを拒みますと、彼等は彼が石を投げつけたという廉で彼を捕縛して、王の面前に引立てましたので、彼の友達たちは彼について行きました。この悪者どもは王に

「われわれはこの男に『お前はどうしてマーラヴァから根を持ってきて、このカニヤークブジャ*でいつも賣るのか。』と、尋ねましたが、この男は一言も返事をせず、われわれに石を投げつけました。」

と奏上しました。王が彼にこの不思議なことについて尋ねますと、友達たちは

「われわれともども彼を宮殿に留めおかれるならば、王さま、その珍奇な話をすべてお話し申

し上げましょう。そのようになさらなければ、お話しは出來ません。」

と答えました。王がそれに同意し、彼を王宮に上らせますと、彼は呪文を唱えて衆人環視の中で忽ちに天に飛び上りました。彼は友達と一緒に天空を飛翔して、遂にプラヤーガ*に着きました。疲れた彼は其の土地の王が其處で水浴をしているのを見ました。彼は其處に宮殿を留めて、皆のものが驚嘆の眼をみはる中を天からガンジス河に飛び降りて、王に近づきました。

「貴方はどなたですか。また、どうして天から降下せられたのですか。」

と、王が恭しく尋ねますと、スンダラカは

「余はムラジャカというシヴァ神の從者である。かの神の命により、人間の快樂を望んで汝の許に來たのである。」

と、このように申しました。この言葉を聞きますと、王はそれが眞實であると思い、寶玉が滿ち溢れ、穀物が豐かに貯えられた都市に女と道具とを添えて、彼に贈りました。彼はその都市に這入って、從者たちともども天空に飛び上り、貧困を免れて永く思いのままに飛び廻りました。黃金の臥床に横たわり、チャーマラであおがれ、美しい女たちにかしずかれて、彼はインドラと同じ歡樂をたのしみました。

或るとき、彼は天空を飛翔していました或るシッダ*に出會って親交を結び、天空から地上に降下する呪文を學びました。スンダラカは下降の呪文を會得して、自分の郷土のカニヤークブジャに天空の道から降りました。

彼が夥多の財寶を携えて都市もろとも天空から降りてきたことを知りまして、王は好奇心に驅られて親しく彼のところへ出かけました。彼がまさしくスンダラカであることを認めて、王が彼に仔細を尋ねますと、彼はカーララートリのために惹き起された事件の一部始終をすべて王に物語りました。そこで、王はカーララートリを召喚して訊問しますと、彼女は怖れるところなく自分の不倫の行爲をすべて白狀しました。王は怒って、彼女の耳を削ごうとし、彼女を捕縛しましたけれども、彼女は衆人環視の中で姿を消してしまいました。そこで、王は彼女が自分の王土內に住むことを禁止しました。スンダラカは王から厚くもてなされて、再び天空に還った、ということです。

クヴァラヤーヴァリー妃はこのように夫のアーディティヤプラバ王に物語りましたのち、更に言葉を續けました。

「王さま、魔女の呪文によるこのような神通力はまさしく存在します。そして、このことは妾の父の國に起ったことで、到るところ有名なことです。それに、はじめに申上げましたように、妾はカーララートリの弟子です。しかも、妾は夫に貞淑でありますから、妾の神通力はカーララートリのよりも一層すぐれています。妾が今日あなたさまの繁榮を祈って祭典を行い、犧牲として捧げる人を呪文によって引寄せようとしていましたとき、あなたが妾を見られました。ですから、あなたも妾どものこの祭儀にお這入り下さい。そして、神通力をふるって征服した諸王を足

下に從えて下さいませ。」

この言葉を聞きますと、王は

「人肉を食うとは何ということだ。魔女の祭儀の何處に王たるの本務があろうか。」

と言って、王妃の申出を斥けました。しかし、王妃が自殺をしようとしましたので、王は止むをえず同意しました。情慾の對象に引きずられた人々がどうして善き道にとどまることが出來ましょうか。そこで、王妃は以前に祓い清めていました曼荼羅の中に王を這入らせ、王が誓言を述べ終りますと、王に語りました。

「あなたの信任厚いパラブーティという婆羅門を此處へ誘い寄せて犧牲として神に供える準備を調えました。しかし、彼を誘い寄せることは難かしいことです。從って、彼を殺して料理する料理人をわれわれのこの祭儀に加わらせましょう。しかも、彼の肉を供物にして食べることについて、あなたは良心の呵責を感じてはなりません。彼は最上の種姓の出ですから、祭祀を終えた曉にはあなたの神通力は完全でありましょう。」

と、愛する妃から言われました王は、罪障を怖れましたけれども、再びその言葉に同意しました。嗚呼、女に服從することはまことに怖ろしいことであります。そこで、王と王妃はサーハシカという料理人を呼び寄せて、彼をなだめて祭儀に加わらせ、ともどもに彼に語りました。

「明朝、誰かがお前のところへ來て、『今日、王さまはお妃とともに食事をせられる。急いで食物を調理せよ。』という人があれば、その人を殺し、その肉で祕かにわれわれのためにおいし

い料理をつくって貰いたい。」

と命ぜられました料理人は、それを承知して家に歸りました。そして、その翌朝、パラブーティが伺候しますと、王は彼に

「行って、臺所にいる料理人サーハシカに『今日、王さまはお妃とともにおいしい料理を食べさせられる。されば、急いで素晴らしい料理を調理せよ。』と言って貰いたい。」

と言いました。パラブーティは

「承知しました。」

と答えて出て行きました。彼が外に出ますと、チャンドラプラバという王子がやってきまして、

「あなたが以前に私の父のために作ったと同じ一揃の耳環を、この黄金で私に作って下さい。」

と、彼に言いました。王子から仕事を頼まれましたパラブーティは快く承知して、耳環を作りに行きました。王子はパラブーティから話されました王の命令を傳えに自らすすんで獨りで臺所に行きました。王子が其處に行って王の命令を傳えますと、約束に忠實な料理人サーハシカは忽ちに王子を庖丁で殺してしまいました。そして、彼の肉で料理をつくりました。王と王妃は何も知らずに祭祀が終ると、それを食べました。王はその夜を人肉を食べたという後悔のうちに過しましたが、その翌朝耳環を持ってパラブーティのやって來るのを見まして、王は驚きあやしみ、耳環について彼に尋ねました。パラノーティが仔細を話しますと、王は大地に倒れ

「嗚呼、太子よ。」

と叫び、王妃とわが身を責めたのです。大臣たちが尋ねますと、王はすべてをありのままに物語り、パラブーティが毎日語っていました「善因善果・悪因悪果」という言葉を述べて、

「あたかも壁に投げつけられた毬が跳ね反るように、他人に害を加えようとするとき、それは自身に跳ね反るものだ。婆羅門殺しをたくらんだ性悪なわれわれは、自分の子を殺したばかりでなく、その肉さえ食べてしまった。」

と語りました。

王はこのように言いますと、うなだれた大臣たちに萬端の處理を命じ、パラブーティを自分の王國の王位に即けました。祖先を祀るべき子のなくなりました王は罪障消滅のために布施を行ったのち、後悔の焔に既に燒きつくされていましたけれども、遂に王妃とともに火中に身を投じました。パラブーティはこうして王位を得て、大地を支配しました。このように、善悪のいずれにもせよ人がある行爲をしましたとき、その結果は自身に還着するものであります。

このようにヴァツァ王の前でヤウガンダラーヤナは物語りました後、更に言葉を續けました。

「覇王よ、従って、ブラフマダッタは貴方に征服せられました後も貴方から好遇せられたのでありますから、若し貴方に反抗することがあれば彼を殺すべきです。」

ヴァツァ王は首相からこの言葉を聞きますと、それに賛意を表し、座から立上って毎日の宗教上の義務を果すために出かけました。

そして、その次の日、四方の征服をなし遂げて大事業を果しましたヴァツァ王は、ラーヴァーナカを出發して自らの都城カウシャームビーに向いました。程なく、大地の支配者たるヴァツァ王は臣僚を従えて、舞姫の蔓草のような腕に似て空にはためく旗幟を高く揚げて歡喜に踊っているかのような都城に到着しました。彼は一歩一歩都城の女たちの眼の咲きそろう蓮池に微風を吹かせて入城し、樂人の歌い、吟唱詩人の讃え、諸王の平伏する中を宮殿に這入りました。

そこで、ヴァツァ王は彼に靡いた全土の諸王に勅諚を發し、祖先の遺した財寶の中から嘗て得ました先祖傳來のかの獅子寶座に凱歌高らかに登りました。その時の祝典に際して打鳴らされた太鼓の音の高い響や低い響が天に轟き渡りました。その音はあたかもヴァツァ王の首相に満悦せられた世界の守護神たちがそれぞれの方角で同時に賞讃の歡聲を擧げるかのようでありました。貪慾の念のなくなりました王は世界の征服によって贏ちえた財貨を婆羅門たちに分ち、また大饗宴を催して諸王たちや自身の大臣たちの願望を満足させました。そのとき、王はインドラが雨雲の轟き渡る中に雨を田畑に降らすように、太鼓の音の轟く中にそれぞれの功績に應じて臣下に恵みを授けました。都城の人々も、將來に於ける豐かな收穫を豫想して、家ごとに饗宴を催おして祝ったのでありました。

このようにして、世界を征服しました勝利者ヴァツァ王は國事の責任を將軍ルマンヴァットと宰相ヤウガンダラーヤナの二人に委ね、自らは安樂にヴァーサヴァダッターとパドマーヴァティーと日を送りました。彼は勝れた吟唱詩人に讃仰せられて、名聲と吉祥の女神のような二人の妃

の間に座をしめ、彼自身の名聲のように輝く月の昇るのを樂しみ、敵の威力を呑みつくすかのように絶えず燕飲をこととしました。

譯　註

一四　カイラーサ山――インド神話に著名な山。ヒマーラヤ山脈の中にあると考えられている。富の神クベーラの住居、シヴァ神の樂園のあるところ。

〃　ヴィディヤーダラ族――ヒマーラヤ山脈中に住み、シヴァ神に仕え、神通力（ヴィディヤー）を持つ（ダラ）という神話上の種族。

〃　ヴァツァ――ヴァンサとも言い、ジュムナー河の中流地方に勢力を振うた古代の王國の名。

〃　カウシャームビー――現在のアッラハーバード州の Kosam に比定せられる。漢譯佛典には憍賞彌と記される。

〃　パーンダヴァ王家――「マハーバーラタ」に於いてカウラヴァ王家とならぶ王家。パーンドゥ王の子孫。アルジュナはパーンドゥ王の第三子。

〃　トゥリ・プラ――三つの（トゥリ）都城（プラ）の義。シヴァ神が惡魔の三城を破壞した神話は「ハリ・ヴァンシァ」に詳し。

一五　アスラ族――（アスラ asura）とは元來「アス（生命、宗教學上のマナを意味する）を與える者（ラ）」の意で、デーヴァと並んでアーリヤ族の神觀の一つをなしていたが、後にア（非）スラ（天）と解釋せられて、神に對立する惡魔とされた。わが「阿修羅」にこの語の音譯である。

〃　ナンダナ園――天帝インドラの樂園。

一六　月種族――日種族と並んで、インドの神話に傳えられる王家の名。

〃　アヨーディヤー――サラユ河に臨む現在の Oude に比定せられる。コーサラ國の首都で、日種族の都城。

一八　ガルダ鳥――インド神話に於ける巨鳥。ヴィシュヌ神の乘物で、蛇族の敵とせられる。

二一　シャヴァラ族——デッカン地方に住む蠻族の一。
二三　マーラヴァ——西インドの地方。ガンジス河の支流チャムバル川の上流一帶。
〃　パータリプトラ——古代に於いて東インド第一の都會。現在の Patna 近郊にその遺跡がある。前五世紀の頃よりマガダ國の首都であった。
二四　ビーマとドゥルヨーダナ——ビーマはパーンドゥ王の第二子。パーンドゥ王が夭折したので、兄のドゥリタラーシュトラ盲目王が卽位し、パーンドゥ王の王子たちを引き取って育てた。ドゥルヨーダナはドゥリタラーシュトラ王の子である。ドゥルヨーダナとパーンドゥ王の王子たちの爭いが「マハーバーラタ」に述べられる大戰爭の原因となった。
〃　アヴァンティ——マーラヴァ地方の古名。
二六　ダイティヤ族——神話的種族で、惡魔の一とされる。
〃　ヤクシャ——クベーラ神の從者である半神的存在。夜叉。
二七　アナンタ——千頭をもち、大地を支えるという龍神で、ヴィシュヌ神の牀座。
二八　ウッジ　イニー——マーラヴァ（アヴァンティ）地方の首都。現在の Ujjein.
二九　ラークシャシー——ラークシャサ（羅刹）の女性形。
三二　マトゥラー——シューラセーナ地方の首都。現在の Muttra.
三四　チァクラヴァーカ鳥——鴨の一種。Anas Casarca. 夜間には雌雄が離れて、互いに戀い慕うと信ぜられた。
三六　ガーンダルヴァ式の結婚——親の許諾なしに戀人同志が自由に行う結婚。
三七　プリンダ族——ヴィンディヤ山中に住む蠻族の一。
三九　ヤクシニー——ヤクシャ（夜叉）の女性形。
四二　喜悦に逆立つ頭髪——インドの古典文藝では、「頭髪が逆立つ」という敍述は非常な喜びを表現するときにのみ用いられる。

四二　耳の根元に寂靜の使者たる老齡が到着する——鬢髪が白くなる意。
四六　マハーカーラ——破壞者としてのシヴァ神の權化の一。從って、色は黑く、怖ろしい姿で表現せられる。
五二　人工の象——「トロヤの馬」と同じモティーフである。構造の動物に人間をかくすことは文學に於いては稀であるが、エヂプト第十二王朝のパピルスには、水瓶に人間をかくして市中に運びこむことが述べられている。（Maspero : Stories of ancient Egypt. pp. 108—114)。「千一夜物語」の「アリ・ババと四十人の盜賊」の中に、同巧の計略が用いられていることは周知の事實である。
五五　竊盜のための處方——古代インドには竊盜の指南書として「ステーヤ・シャーストラ」があり、忍びこむ穴のあけ方などを敎えたことが知られる。その原典は傳わっていないが、戲曲「土の小車」（ムリッチャカティカー）の中の、盜人シャルヴィラカの獨白の中に、その面影が見られる。それに依れば、魔法の軟膏を身體に塗ることが知られ、これを塗れば夜番にも見つからず、刄物が落ちかかっても、かすり傷さえ負わない、と記されている。
五九　禮拜の時間に於ける遊女の務——古代インドに於いては、遊女はデーヴァ・ダーシー「神の奴隷女」として、神殿で歌をうたい、踊るのを業とした。
〃　遊女に對する女將の警め——八世紀の終にカシュミールのジャヤーピーダ王の大臣で詩人のダーモーダラグプタの作品に「クッタニー・マタ」（女將の警め）というのがある。それによれば、遊女が富裕な若者に對して眞の愛を裝うて、金を得るためであることを覺られぬように誑す技巧手段などが說かれている。
六三　ラーマ——敍事詩「ラーマーヤナ」の主人公。妃シーターを奪った惡魔ラーヴァナを征伐するために、猿軍の援けをえて、ランカー島（セイロン）に渡って、敵を仆し、妃を奪いかえした。
六五　棍　、螺貝、輪寶——これらはすべてヴィシュヌ神の武器である。
〃　由旬——距離の單位ヨージャナ yojana の音譯。一由旬がどれだけの距離を正確に表わすかは明確でない。或は四クローシャ（約九マイル）と言い、或は八クローシャとも言い、また四マイル乃至五マイルと言う。

六七　半身に油煙を塗り、半身を赤鉛で塗れ——シヴァ神は屢〻神像としては、右半身は男、左半身は女として表現せられて安置せられている、卽ち、ナリー・ナラ或はアルダナリーシュヴァラという。

六九　王命によって自由の身とする——古代インドに於いては、遊女は王に屬し、王の許可がなければ自由の身となれなかった。戯曲「土の小車」の女主人公ヴァサンタセーナーは敎養高い富裕な遊女であったが、なお自由の身でなく、最後に新らしく卽位したアーリヤカ王によって、遊女の身分から解放された。

七四　タームラリプティー——ガンジス河口に臨む海港。現在の Tamluk. この地は古くから東南アジア方面に對する重要な港であった。

七六　カターハ・ドヴィーパ——マライ半島にある商業地。現在の Kedah.

八二　五大——肉體を形成する地、水、火、風、空の五要素。

〃　五感——感覺を司る眼、耳、鼻、舌、身の五器官。

八三　ダットゥーラ——ちょうせんあさがお。蔓陀羅花ともいう。白色漏斗狀の花を咲かし、果實は球形、刺がある。アトロピン、ヒヨスチアミン、スコポミンなどを含み、運動中樞神經を最も初期に侵し、ついで知覺及び意識の消失を來す。

八九　マダ——發情期に象が顳顬から分泌する液。

九五　ハスティナー・プラ——現在の Delhi の北東五十七哩の地にあった都。ガンジス河の古床に臨み、月種族の王家の都城であった。

九七　マガダ國——ガンジス河南岸の現在のビハール州及びベンガル州西部に勢力を有した王國。

九八　マーカンディカー——比定不詳。

一〇一　シュラーヴァスティー——コーサラ國の首都。現在 Oudh の Ayodhyā の北五十八哩の Sāhet-Māhet に比定せられる。漢譯佛典に記される舍衞城はこの都である。

〃　ウンマーディニー——この名は「人を魅了する女」、「人を狂氣ならしめる女」の意。

一〇三　ラーヴァナ——敍事詩「ラーマーヤナ」に於ける魔王。

一〇六　ラーヴァーナカー——位置不詳。

一〇七　パーリジャータ樹——天國の樂園に咲く五樹の一。

〃　ユディシュティラと四人の兄弟——パーンドゥ王の五王子で、「マハーバーラタ」の主人公。ユディシュティラ、アルジュナ、ビーマ、ナクラ、サハデーヴァの五人。なお、ヴァツァ王はアルジュナがヤーダヴァ族のクリシュナの妹スバドラーと結婚して生れた王子アビマニユの子孫である。

〃　ドラウパディー——パンチャーラ王ドゥルパダの王女。パーンダヴァ族の五王子に嫁し、古代インドの多夫婚の例として著名である。

一一二　ヴィラータ王——ヴィラータはインドの北西部にあった國。現在の Berar と推定せられる。パーンダヴァ族の五王子はドゥルヨーダナに逐われて逃亡生活を送らねばならなかったとき、ドラウパディーとともに十三年間この王廷に姿を隱して忍ばねばならなかった。

一一三　プルーラヴァスとウルヴァシー——プルーラヴァスとウルヴァシーの神婚說話はインド神話に名高く、數々の書に種々の形で傳えられている。インド最古の聖典「リグ・ヴェーダ」を始め、「シャタパタ・ブラーフマナ」、「カータカ・サンヒター」などのヴェーダ聖典、大敍事詩「マハーバーラタ」及びその附錄「ハリ・ヴァンシャ」、ヒンヅー敎の聖典「ヴィシュヌ・プラーナ」及び「マツヤ・プラーナ」などに、兩人が別れるに至る原因も、或は結婚の際の約束の不履行、或は聖仙の呪詛により、種々傳えられていて、一致を見ない。この說話の最も發達した形というべきものは、インド古典文藝の詞宗カーリダーサの戯曲「ヴィクモールヴァシーヤ」（勇武によって得たウルヴァシー）である。

一一四　クリシュナ天——クリシュナはヤーダヴァ族の勇士で、「マハーバーラタ」に於いてはパーンダヴァ族五王子の味方。後、神格化せられ、ヴィシュヌ神と同一視せられ、またヴィシュヌ神の十權化の一とせられた。

〃　バダリカー——ガンジス河の水源の一。

一二六　ティミラー——比定不詳。

一三三　チャーマラ——ヤク（チャム）の毛で作った一種の扇。

一三六　人々に凡ゆる望を滿さしめる牛——ヴァシシュタ仙に屬するという神話上の牛。

〃　インドラとアハリヤーの物語——數種の傳承が傳えられている。「ラーマーヤナ」では、インドラ神が夫の姿をしたとき、アハリヤーがだまされたと記している。別の所傳では、ソーマ（月神）がインドラ神を援助し、鷄となって夜中に鳴いた。ガウタマ仙は何も疑わずに起き出て、朝の勤行を始めた、その間にインドラ神がアハリヤーの寢床に忍びこんだ。

一三七　猫——原語 majjāo は「猫」と「情夫」の二義をもつ言葉である。

〃　千眼となるであろう——インドラはこの故にサハスラ・ネートラ、サハスラ・ナヤナ、サハスラークシャと呼ばれた。いずれも「千眼を有する者」の義である。

一四一　愛情の爪痕——古代インドに於いては、性愛の技巧の一として爪痕をつけることが愛好せられた。詳しくは、「カーマ・スートラ」第二篇第四章を見よ。

一四三　ラティとプリーティ——愛の神カーマの二人の妃の名。

〃　王による訊問——古代インドに於いては、王者が直接に訴訟を聽き、裁判をするのが慣例であった。

一四四　財寶による威力の獲得——古代インドにおいて、或る者が威力を獲得するのは、何等かの理由でその者が得た財寶の力によると信ぜられた。寓話集「パンチャ・タントラ」には、鼠が財寶によって力を有する物語があり、われわれの「カターサリット・サーガラ」六一にも同じモチーフがある。また、ジャータカ（本生譚）三九及び二五七にも同巧のモチーフが物語られている。

一四九　パウンドラヴァルダナ——東インドのガウダ地方の首都。現在ベンガル州中部に位する Pabna に比定せられる。

一五二　バーラーナシー——現在のベナーレス。

〃　ヴァイデーハ——ヴィデーハとも言う。現在のビハール州北部の Tirhut 地方。

一五三　チェーディ國——現在のブンデルカンド地方。

一五四　シェーシャ——千頭の龍蛇アナンタ（上記二七頁を見よ）。

〃　髑髏を捧持するシヴァ行者——シヴァ派に屬するカーパーリカ派の行者は、現在でも男の髑髏（カパーラ）を捧持し、それで飮食する。

一五五　毒娘——肉體的關係をもつ男を殺すと考えられた娘。ヴィシャーカダッタ（五世紀頃か）の戲曲「ムドラーラークシャサ」（ラークシャサの印章指環）にも、この娘のことが記されている。毒娘に關する說話はインドに發し、ヨーロッパ中世にもてはやされた「祕密の祕密」Secretum Secretorum（アリストテレスの書とされ、アリストテレスがアレクサンドゥロス大王に送ったという書翰を集めたもの）を通じて、ヨーロッパ各國の文學に取り上げられた。ホーソン Nathaniel Hawthorne (1804—1864) の「ラッパッチーニの娘」Rappaccini's Daughter という短篇は、中世のイタリアを舞臺にして、このモチーフを用いた妖しくも美しい戀と死の物語である。

〃　カリンガ——マハーナディー河とゴーダーヴァリー河の間に位する、ベンガル灣に沿う一帶の地方の古名。

〃　マヘーンドラ山——東ガッツ山脈の高峯。

一五六　カーヴェーリー河——現在の Cauvery 河。

〃　チョーラ族——コロマンデル海岸地帶の部族。西紀前三世紀の頃からこの部族の建てたチョーラ王國の名が知られ、一世紀以後東西貿易の中繼地、寶玉の產地として、この王國は富强を誇った。

〃　ムーララ族——現在南インドの西岸マラバール海岸地方に據ったケーララ族の別名。

〃　レーヴァー河——現在のナルマダー河。

〃　ラータ——現在のグジャラート地方。

〃　マンダラ山——インド神話に名高い山。神々の住處とせられ、嘗て劫初に大洪水のあったとき失われたアムリタ（甘露）及び十三種の貴重な物を探すため、神々とアスラたちが海を攪拌した際、この山はその攪拌のための棒にせられたという。

一五七　アラカー城——クベーラ神の居城。
〃　シンドゥ——インダス河の古名をシンドゥ河という。シンドゥ地方は現在のパンジャーブ州一帯の地方の古名。
〃　ムレッチャ族——北方の蠻族の總稱。
〃　トゥルシュカ族——古代のインド・スキチア族のサンスクリット名。
〃　ヴィシュヌ神がラーフの頭を刎ねた——「大海の攪拌」に際して、ラーフはアスラであったにも拘わらず神に變裝し、甘露を盜もうとした。ヴィシュヌ神は怒って、その武器の輪寶でラーフの頭を刎ねた。
〃　ペーラーシカ族——ペルシア人のサンスクリット名。
〃　フーナ族——中國の史書に見える匈奴卽ちフンヌ族。
〃　カーマルーパ——現在のアッサム州西部。玄奘は「大唐西域記」に迦摩縷波國と記す。
一五九　パドマ國——不明。
〃　シュードラ——インドの四姓の最下位にある賤民。
一六〇　アシュヴァッタ樹——無花果の一種。インドに於いては神聖視されている。學名 Ficus Religiosa.
一六一　シュリーカンタ——現在のデリーの北西にある不毛地帶の名。
〃　アグニホートラ祭——火神アグニに牛乳、油、酸粥（米を牛乳で煮て醱酵させたもの）などを捧げる祭祀。
一六三　ティラカ——裝飾或は宗派の區別のために、前額部につけた印。
〃　曼荼羅——マンダラとは元來「圓形のもの」を意味する。ヒンヅー敎の祭祀では圓形の土壇を築いて、諸神を玆に安置して供物を供えて祀る。玆では床に圓形を描いて神を祀っている。
一六四　三眼の夫——シヴァはトリ・ネートラ「三眼をもつ者」の異名をもつ。
一六五　愛神は二度と身體を具えて生れかわることはない——愛神カーマはシヴァの眼から發せられた光明で燒かれて灰となった。この故に、愛神カーマはアナンガ（「身體のない者」の意）と稱せられるに至った。この神話は「マハーバーラタ」に於いては極めて簡單に述べられているに過ぎないが、インド古典文學の詞宗カーリダーサが敍事詩「クマーラ・サンバヴァ」（軍神の誕生）の發端に詳しく述べているので有名である。また、この神話はジャヴァに傳えられ、クディリ朝のカーメーシュヴァラ王（1115—1130A.D.）の治世に、詩人ダルマヤが「スマラ・ダハナ」（愛神の燒殺）という敍事詩を作った。これは古代ジャヴァ語文學卽ちカウィ文學の傑作の一である。
一六六　メール山——神話に名高い山。ギリシア神話のオリュムポスに比せられる。
一六七　六人のクリッティカー——プレヤデス座の六星をさす。わがスバル（昴）座の六連星。
〃　六面のカールッティケーヤ——六人のクリッティカーに育てられたので、カールッティケーヤは六面になった。カールッティケーヤの名は乳母クリッティカーの名に由來する。この神は軍神であり、また盜賊の神とせられる。
一七一　人間の敵である六種の缺點——愛慾、憤怒、貪慾、困惑、自惚及び嫉妬の六種をいう。
一七四　カニヤークブジャ——現在の連合州の Farrnkhabād 縣にある Kanauj の古名。古くは大都會で、七世紀にはハルシャ王の首都であった。
一七五　プラ・ーガ——ガンジス河とヤムナー河の合流點に位する Allāhabād の古名。
〃　シッダ——インド神話に於ける半神的存在の一。

解題

一、「カター・サリット・サーガラ」の內容

今、玆に、譯出する「カター・サリット・サーガラ」Kathāsaritsāgara は西暦十一世紀に於けるカシュミールの詩人ソーマ・デーヴァ Somadeva の作品である。全篇を通じて格調のあるサンスクリット語の詩で書かれ、十八巻に分たれ、二萬一千三百八十八頌（一頌は二行より成る）の大册である。文章は流麗で、インドの古典文藝に特有な文飾を衒わず、興味津々たる數々の挿話を包むに外廓物語を以てする。卽ち、ウダヤナ王行狀記、ナラヴァーハナダッタ行狀記を枠とし、その中に凡ゆる源泉から流れでた物語の大小の河川が流れこんでいるのである。本書はまさしく物語（カター）の凡ゆる河川（サリット）が注いだ一大海洋（サーガラ）であって、「カター・サリット・サーガラ」の名に相應わしい作品であり、この意味に於いて世界文學の中に特異な位置を占めるものである。

さて、われわれの「カター・サリット・サーガラ」は、まず本書の成立に關する因緣物語として、インドの固有文藝に特有な神話的な物語を述べる。次いで、カウシャームビーに都したヴァツァ國王ウダヤナの生涯と冒險、特に彼の大臣ヤウガンダラーヤナの智謀、マーラヴァ國の王女

ヴァーサヴァダッター及びマガダ國の王女パドマーヴァティーとの結婚などが物語られる。これは、本書に於いては、ウダヤナ王の王子ナラヴァーハナダッタの行狀記の序篇とも稱すべき位置を占めているが、インド文學史の立場から言えば、ナラヴァーハナダッタ行狀記よりも一層重要であり、且つ物語としても興味が深い。玆に「カター・サリット・サーガラ」の邦譯の第一巻として採り上げた所以である。ウダヤナ王行狀記に續いて、ナラヴァーハナ太子の行狀記が長々と記される。これは太子の情事の數々と、彼が最後にインド神話に於ける半神的存在のヴィディヤーダラ族の王者となった次第を物語っている。

次に、われわれの「カター・サリット・サーガラ」には、因縁物語、ウダヤナ王行狀記及びナラヴァーハナダッタ行狀記を緯として、その間にほぼ三百五十篇の長短さまざまの物語が織りこまれている。これらの物語の一部は枠物語の挿話と見做されるもの、或は多少なりとも何等かの關聯性のあるものであるが、大部分は枠物語とは直接に關係がなく、枠の中に雜然と挿入せられているのである。しかし、これらの物語を物語文學の類型の點から見れば、本書に見られない類型のものはないと言っても、敢て過言ではないであろう。神話あり、神仙譚あり、寓話あり、頓智物語もあれば笑話もある。また、愚者物語あり、惡漢物語あり、貞淑な女の物語もあれば不貞な女の物語もある。從って、登場する人物も、神あり、女神あり、天女あり、聖仙あり、王者あり、また惡魔あり、魔法使あり、遊女あり、寶掘りあり、社會の上下貴賤を問わず、凡ゆる階層を網羅して枚擧に遑ないほどである。更に、われわれの興味を惹くのは、「パンチャ・タントラ」

或は「ヴェーターラ・パンチャヴィンシャティカー」（憑屍鬼廿五物語）のごとく、單行の物語集としてインド文學史に著名な作品が、この物語の大洋の中に、或は全篇のまま、或は拔萃の形で、流れこんでいることである。また、挿入された數多くの物語の背景をなす宗教を見れば、婆羅門教があり、佛教があり、ジャイナ教があるのみでなく、陰慘を極めるヒンヅー教の祭祀があり、また原始素朴な信仰形態も見られる。かくて、われわれの「カター・サリット・サーガラ」はインド文學史のみでなく、インドの文化史にも大きな光を投ずるものであって、その重要性は測り知れないものがあると言わねばならない。

しかも、更に、本書に見られるいくつかの物語なり、そのモチーフが、アラビア或はヨーロッパの著名な物語のいくつかと軌を一つにしているのであって、この點が強くわれわれの關心を惹きつけずにはおかない。例えば「笑う魚の物語」（五・一四以下）は「ペンタメローネ」三六話、或は「ストラパローラ」四・一と軌を一にし、「賢者ハリシャルマンの物語」（三〇・九二以下）は「グリム童話集」の「物識り博士」（岩波文庫本第一一一話）と同巧異曲である。この點に關しては、インドの他の說話文學例えば佛教徒の「ジャータカ」（本生譚）などもその例に洩れない。これら東西軌を一つにする說話要素が、異った民族の間に互に獨立して成立したのであるか、或はいずれかの借用に基づくかは、決定の極めて困難な問題で輕々に斷じ難いが、中にはラ・フォンテーヌの「寓話」に「ビルパイ物語」に基づくと記しているもののように、明かにインドに起源を有するものも數多い。前述の「グリム童話集」の「物識り博士」も、同じく「物ぐさハ

インツ」などとともに、インドに起源を有することが辿られるのであるが、これらはヨーロッパに於いて民衆の間に脈々と生き永らえ、民衆の心の中に生き、そしてヨーロッパの情緒を養ってきたのである。この意味に於いて、インドの説話文學は世界文學にも極めて重要な意義を有しているのであって、從ってわれわれの物語集はまた世界文學の重要な作品の一であると言っても、蓋し言い過ぎではないであろう。しかも、本書に繰りひろげられる物語の繪巻は、インド的な雰圍氣の中に演ぜられ物語られる、餘りにもインド的なさまざまな姿を描いたものであるが、なお人間追求の嚴しい現實の姿がひしひしと感ぜられるのである。玆に、われわれはこの作品を「千一夜物語」などと比べて、敢て勝るとも劣らぬ作品の一つと言いうるであろう。

二、作者ソーマ・デーヴァとその時代

われわれの「カター・サリット・サーガラ」の著者ソーマ・デーヴァについては餘り知られていない。著者はカシュミールの婆羅門で父をラーマといい、本書を書いたのは西暦一〇六三年から一〇八一年までの間である。そして、本書を編述した目的は、ジャランダラの王女スールヤマティーの悩める心を慰めるためであったという。ソーマ・デーヴァに他の作品があったことは傳えられていない。

十一、二世紀に於いて、インドの西北境カシュミールは文藝の中心であった。インドの古典文

藝は八世紀を最後としてインドの中原から姿を消した。爾後、カナウジ或はダーラー（マーラヴァ地方）の宮廷に小さな花の咲いたことはあったけれども、インド古典文藝の傳統はカシュミールに傳えられ、遺された。既に九世紀にラトナーカラが出て、インド古典文藝の傳統の墓に花を數輪咲かせたのであったが、十一世紀になると滿開の花が繚亂の美を競って、十二世紀に及んだ。まず第一に擧ぐべきは、インド文學史上に類例を見ぬ多作家のクシェーメーンドラが出た。この作家は文學活動のあらゆる面に活動し、敍事詩や劇を書き、古代の偉大な作品の精粋を編述したのみでなく、宗教詩や道德詩を作り、詩論、政治諷さえも著わした。クシェーメーンドラより少し後れて、われわれの「カター・サリット・サーガラ」の作者ソーマ・デーヴァが出た。當時はカラシャ王の治世（1064—1088）であるが、この王の治世下にはまた詩人ビルハナがカシュミールにいた。ビルハナは、敍事詩抒情詩或は戯曲の作家として著名で、後にカシュミールを去ってインドの各地を遍歴し、遂に西チャールキヤ朝のヴィクラマーディティヤ六世（1076—1127）の許に留まり、この王並びに王家の功業を讃嘆した「ヴィクラマーンカ・デーヴァ・チャリタ」を作った。十二世紀になると、ジャヤシンハ王の治世（1128—1149）に詩人マンカが出て、敍事詩「シュリーカンタ・チャリタ」を書いた。そして、一一四八年頃には、インド第一の史家といわれるカルハナがカシュミールの年代記「ラージャ・タランギニー」（王統史）を著わした。この書は史實と傳説を混合してはいるけれども、文化史の資料としては比肩するもののないほどに價値のあるものである。

このように、ソーマ・デーヴァの環境は彼の教養を深め、彼が活動するのに好都合であった。かくて、サフランの花が咲き亂れ、百合の香の高い山紫水明のカシュミールは、インド說話文學の寶庫であり大洋である、われわれの「カター・サリット・サーガラ」を生み出さしめる豐かな土地となった。

三、「ブリハット・カター」とその改刪本

さて、ソーマ・デーヴァが「カター・サリット・サーガラ」を編述するにあたって、彼が卷頭の歸敬偈に

　無數のもの照らす燈火なる
　言葉の女神をおろがみまつり、
　ブリハット・カターが精粹を
　撰み集めしこの書をわれは編む。

と、記しているのによって、ソーマ・デーヴァのこの作品の根源に「ブリハット・カター」という書のあったことが知られる。しかも、作者は本書の全十八篇の篇名を擧げた後に、

「この書はその根本を正確に踏襲し、それより僅かながらも離れることはない。ただ言語のみは冗長さを短縮するように撰び、この點のみが異なる。妥當適切で無理のない順序を守ることと、

物語の本筋を害わないように詩文を組立てることとの二つは、出來うるかぎり守られている。」

と、述べているのである。これによって、ソーマ・デーヴァは「ブリハット・カター」を殆んどそのままに踏襲したのであろう、と推察される。しかし、事實はそれほど簡單ではないようである。何故なれば、「ブリハット・カター」の原本は現在亡失しているが、その改稿本乃至は改刪本はわれわれの「カター・サリット・サーガラ」のみでなく、他にかかる作品があるからである。その一つは、われわれの「カター・サリット・サーガラ」より僅か以前の一〇三七年に編述されたクシェーメーンドラ Kṣemendra の「ブリハット・カター・マンジャリー」 Bṛhatkathāmañjarī (ブリハット・カターの花束) である。この書は「カター・サリット・サーガラ」と同じく、カシュミール所傳の「ブリハット・カター」に據ったもので、兩者は大體に於いて一致しており、或る學者は「ソーマ・デーヴァは原本の內容を、クシェーメーンドラは原本の結構を忠實に再現したものであろう。」と、推察した (Maṅkowski : Der Auszug aus dem Pañcatantra in Kṣemendras Bṛhatkathāmañjarī, Text, Übersetzung und Anmerkungen, Leipzig 1892. s. 167 f.).「ブリハット・カター」の他の改稿本はブッダスヴァーミン Buddhasvāmin の「ブリハット・カター・シュローカサングラハ」 Bṛhatkathāślokasaṁgraha で、これは完本ではない。しかし、ソーマ・デーヴァ及びクシェーメーンドラの作品に比べると、原本に近い形で傳えられている、とされている。これは前世紀の末頃にネパールに於いて發見されたもので、このネパール傳本の發見はカシュミール傳本しか知らなかった學界に非常に大きな問題を提供した

が、「ブリハット・カター」に關する謎は依然として未解決である。また、「ヴァスデーヴァ・ヒンディ」Vasudeva hiṇḍi という、古形マーハーラーシュトリー語（中期インド・アリヤン語の1）で書かれたジャイナ教の物語集に、詳細で委曲を盡した所傳のあることが知られた（L. Alsdorf : The Vasudevahiṇḍi, a Specimen of Archaic Jaina-Māhārāṣṭrī, Bulletin of the School of Oriental Studies. vol. Ⅷ, p. 320). これは亡失した「ブリハット・カター」の再構に極めて重要であることが指摘されている。最近、譯書も出版されたが（Sten Konow : En Bunt Indiske Eventyr, Oslo 1949). 問題は依然として殘されているのが現狀である。。かくして、われわれは「ブリハット・カター」の原本を今日に見ることは出來ないが、その改稿本として次の三傳本四書を有するわけである。

一、カシュミール傳本――「ブリハット・カター・マンジャリー」、「カター・サリット・サーガラ」

二、ネパール傳本――「ブリハット・カター・シュローカサングラハ」

三、ジャイナ教傳本――「ヴァスデーヴァ・ヒンディ」所收

さて、カシュミール傳本二種の中では、われわれの「カター・サリット・サーガラ」が早くから學界に知られ、また文藝作品としても遙かに勝れている。「ブリハット・カター・マンジャリー」の作者クシェーメーンドラは前述の如く多作家であり、特にインドの二大敍事詩「マハーバーラタ」及び「ラーマーヤナ」の精粹を編述したので有名である。これによって、これらの大文學が

讀者に親しまれ易くなったことは彼の功績であるが、また一面に於いてシルヴァン・レヴィ教授が指摘したように（Journal asiatique, 1885, s. 8, t. vi, p. 420）原作の美しさをすべて奪ったことも事實である。從って、「ブリハット・カター」の精粹を編述したという「ブリハット・カター・マンジャリー」も、時には理解し難いまでに短縮している反面に、或る箇處では極めて多辯となり、特にエローティッシュな場面や宗教的な内容の物語の敍述に於いて甚だしい。これに對し、ソーマデーヴァは上品でしかも美しい言語を用いて、技巧をてらわず、民俗文學の特色とインド古典文藝の特色とを巧みに結合しているのである。われわれの「カター・サリット・サーガラ」が、その内容と相俟って、世に珍重せられる所以であり、作者ソーマ・デーヴァが疑いもなくインドで最も愛好せられる作家とせられる所以である。

四、「カター・サリット・サーガラ」のテキスト並びに飜譯

われわれの「カター・サリット・サーガラ」のテキスト並びに飜譯について、茲に簡單に述べる必要があろう。まず、一八三九年に、第一篇から第五篇までのテキストがドイツ語譯とともにブロックハウス H. Brockhaus によってライプチッヒ及びパリで出版された。次いで、ブロックハウスによって、第六篇以後のテキストのみがドイツ東洋學協會發行の Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes の第二卷（一八六二年）及び第四卷（一八六四年）として發表

された。このテキストに依って、トーニー C. H. Tawney の英譯がベンガル亞細亞協會の「インド文庫」Bibliotheca Indica 叢書の中に發表せられた。二册に分たれ、第一册は一八八〇年、第二册は一八八四年の發行である。

一八八九年にテキストがボンベイの Nirnaya Sāgara Press から出版された。The Kathāsaritsāgara of Somadevabhaṭṭa, ed. by Paṇḍit Durgāprasād and Kāśīnāth Pāndurang Parab. がこれで、ブロックハウスの出刊に比較して格段の差のある善本である。一九〇三年に第二版、一九一五年に第三版を重ね、われわれが今日用いるテキストはこの版本である。

トーニーの英譯は、彼の死後ペンザー N. N. Penzer が詳細な註をつけ、十巻の大册となって限定出版された。The Ocean of Story, being C. H. Tawney's Translation of Somadeva's Kathā Sarit Sāgara (or Ocean of Streams of Story), new edited with introduction, fresh explanatory notes and terminal essay by N. M. Penzer in ten volumes, London 1924. がこれである。ペンザーの註は民俗學的にも比較文學的にも極めて貴重であり、また興味深いものであるが、稍〻繁雜に過ぎる憾がないではない。フランス語譯については、書店の目錄にその名を見たが、その詳細については知らない。ドイツ語の全譯は未だない。部分譯としては、第十篇を譯した H. Schacht : Indische Erzählungen. Lausanne und Leipzig 1918. があり、拔萃譯としては J. Hertel : Bunte Geschichten aus dem Himalaya, München 1903. などがある。

五、「ウダヤナ王行狀記」について

「カター・サリット・サーガラ」は、前述のごとく二萬頌を越える大册であって、到底その全部を邦譯するわかにはゆかない。從って、本分庫にはその拔萃を收めることにしたのであるが、その第一册として「カター・サリット・サーガラ」の枠物語（第九巻から第廿巻）をなす「ウダヤナ王行狀記」を選んだ。この物語はインド文學史上に重要な作品であるのみでなく、物語としても興味深いものであるからである。

まず第一に、「ウダヤナ王行狀記」の後半の部分は、バーサの戲曲「ヤウガンダラーヤナの誓」Pratijñāyaugandharāyaṇa 及び「夢に現われたヴァーサヴァダッター」Svapnavāsavadatta のテーマをなしている。この二つの作品は元來一つではなかったかと思われるが、現存のテキストは明かに獨立した作品であって、前者は四幕、後者は六幕から成る。

「ヤウガンダラーヤナの誓」は本書五二頁以下に述べられる物語と殆んど同一であり、大臣ヤウガンダラーヤナの政略、智謀とその王に對する忠誠心とがテーマとなっている。玆では、ヴァーサヴァダッターの父マハーセーナ王の大臣バラタローハカとヤウガンダラーヤナとの武技試合が劇的展開に於ける主動的なモティーフとなっており、この點に於いてわれわれの物語と異なる。

「夢に現われたヴァーサヴァダッター」は本書一〇九頁以下に述べられる物語を骨子としてい

るが、第五幕に於いてウダヤナ王が晝寢の夢の中でヴァーサヴァダッターを見る條があり、また第六幕ではヴァーサヴァダッターの兩親からウダヤナ王とヴァーサヴァダッターの繪像を屆けてくるが、これは二人の駈落のために結婚式が擧げられなかったので、繪像で結婚式を擧げたという記念の繪像であった。われわれの物語では、この繪像については語られず、玆にバーサの劇作家としての手腕が見られる。

「ウダヤナ王行狀記」は更に後世の作家に素材を提供している。マートラ・ラージャ（またアナンガ・ハルジャともいう）はその戯曲「ターパサ・ヴァツァラージャ・チャリタ」に於いて「ウダヤナ王行狀記」をテーマとしているが、玆ではウダヤナ王はヴァーサヴァダッターの死を悼んで、その果に落膽して苦行者になっている。マートラ・ラージャの年代は不詳であるが、九世紀以前であることは明らかである。また、十三世紀に於けるジャイナ教の詩人ソーマプラバは、プラークリット語の詩と散文で「クマーラパーラ・プラティボーダ」を書き、「ウダヤナ王行狀記」を取扱っている。

「法句經註釋」に傳えられる「ウダヤナ王行狀記」Udenavatthu (Dhammapa laṭṭhaka thā. ed. Norman, pp. 161—231) は佛教徒の所傳として珍重すべきものである。この所傳の大要は次の通りである。

ウダヤナ王はカウシャームビーのパランタパ王の王子であったが、母后が臨月のとき鷹にさらわれたので、ヒマーラヤ地方の樹上で生れた。アッラカッパ仙に養われたが、父王の死を聞

き、アッラカッパ仙から象呪を受け、しるしの父の指環を持って歸國し、王位に即いた。ウッジャイニーの王チャンダパッジョータの謀計に陷り、囚われた。王女ヴァースラダッターが象呪を學びたいと乞うたので教えたが、その教授中に姫と謀って逃げ、姫を妃とする。後にゴーシタ長者の女サーマーヴァティー、更にマーガンディヤーを納れて妃とした。これで、ウダヤナ王の後宮には、三妃と千五百人の舞姫がいるに至った。サーマーヴァティーは佛陀の信者となったが、マーガンディヤーは佛陀を惡み、サーマーヴァティーを嫉み、佛陀とサーマーヴァティーとの間が怪しい、と王に讒した。王はこの讒言によってサーマーヴァティーを殺そうとしたが、佛陀の威德に驚き、かえって許を乞うに至り、サーマーヴァティーの勸めによって佛陀の信者となる。しかし、その後、遂にマーガンディヤーがサーマーヴァティーを燒殺したのを怒って、マーガンディヤーを燒殺した。

と。この物語の後半は佛教的であり、佛教徒による潤色と見られるが、前半はわれわれの物語乃至はバーサの戯曲「夢に現われたヴァーサヴァダッター」と殆んど同一で、佛教とは直接に何等の關係も認められない。從って、この部分は「法句經註釋」の編者が「ブリハット・カター」所傳のとは異なる他の所傳の「ウダヤナ王行狀記」から採ったものと考えられる。ウダヤナ王はまた佛教徒の所傳では「マーカンディカ・アヴァダーナ」(The Divyāvadāna, a Collection of Early Buddhist Legends, ed. E. B. Cowell and R. A. Neil, pp. 515—544) に登場する。ここでは王の妃はシャーマーヴァティー、アヌパマーとなっており、アヌピャーがシャーマーヴァ

ティーを燒殺したことを傳えて、「法句經註釋」の後段と軌を一つにしている。佛敎徒のその他の所傳ではウダヤナ王は信仰の厚い王とせられ、王の造像供養の傳説は、「大唐西域記」巻五及び巻十二、「增一阿含經」第二十八などに見える。

かくのごとく、ウダヤナ王はインドの文藝傳説に著名であるが、歷史上の人物である。原始佛敎經典によれば、佛陀の時代に於けるヴァンサ（ヴァツァの別名）の王はウデーナ（ウダヤナのパーリ語形）といい、パランタパ王の子で、王子をボーディ・クマーラといったことが知られる。この歷史上の王が如何なる理由で文藝或は傳説の主人公になったかは明らかでない。

インド古典説話集 カター・サリット・サーガラ(一)〔全4冊〕

1954年1月5日 第1刷発行
1989年3月17日 第4刷発行

定価400円

訳者 岩本裕（いわもと ゆたか）
発行者 緑川亨
〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします
Printed in Japan
ISBN 4-00-320661-4